阿波人形浄瑠璃誌

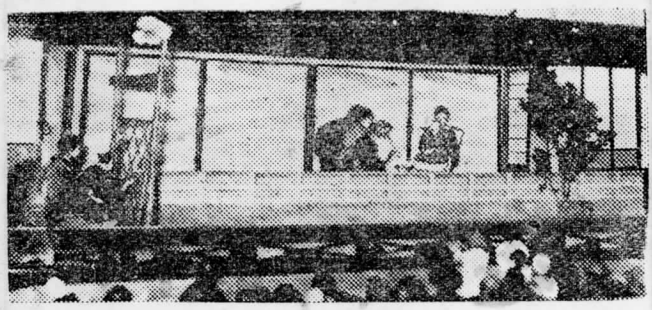
第四輯

阿波人形芝居特輯號

阿波鄉土誌

阿波人形芝居特輯號

第四輯



阿波郷土誌第四輯目次

題　字……蜂須賀　正韶侯

口繪＝傀儡師の風俗＝阿波のはこまわし＝人形師の細工場より＝天狗久事吉岡久吉翁＝天狗辨事近藤辨吉氏＝四代大江武雄氏＝明治十七年發行阿波義太夫三味線番附

本誌の綱領……一

人形芝居の源流……文學博士…喜田貞吉……一

阿波人形芝居……田所眉東……二

淡路と西宮の人形座……吉井太郎……三二

淨瑠璃の間の物……三田村鳶魚……五四

人形の魂……文樂座…吉田榮三　吉田文五郎……六六

近松半二と歌舞伎……木谷蓬吟……九四

人形三人遣ひの源流……石割松太郎……〇一

田舍の人形淨瑠璃……文學士…鈴木　馨……一一八

道行について……文學士　富倉二郎　二一
積留話傀儡秘事……人形師　吉岡久吉　三四
近世名人『越路』を生む……小川袖香　四八
操座の蔭語と人形頭の說明……久米葉舟　一五六
阿波に於ける三味線義太夫墓所記……故松浦德二郎　六六
人形座……（戲曲）……林　皷浪　七八
一の宮城跡と鮎喰川の歌……西內瀧三郎　一一
德川初期に掘鑿した別宮新川の由來……小川國太郎　六五
人形師川島富五郎翁の遺作品の發見……九三
淨瑠璃阿波の鳴門に因める珍談……一〇一
三味線の傳來……一二一
阿波の生んだ淨瑠璃本書豊竹綱惠太夫……一三三
誌代集金に就て……一三三
次輯よりよろず紹介欄設置……一六五
本誌每月發行……一七七
新刊紹介……一八七
編輯餘錄……久米葉舟　一八八

◪傀儡師の風俗◪

=(裏面記事參照)=

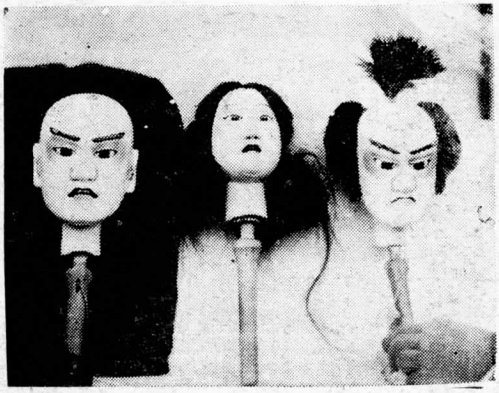
◇傀儡師の風俗

（表面寫眞解說）

正月の門附の一に傀儡師がある、これはゑびす廻し、夷子舁、でく廻し、また山猫等とも云ふ桃山時代の末頃から諸國都鄙の兒童を面白がらせた人形使ひで箱の上で人形を操り、特殊な節面白い歌を唄ひ歩いたもので、これが今の操芝居の元祖である。寫眞は人形の蒐集家で知られた小澤袋中氏が衣裳と阿波人形とを以つて京都風俗研究會で扮裝せられたものである、着用の服裝は西の宮吉井太郎氏の考證によりたもので頭には投頭巾を被り、古くは小袖の上から無地の素襖のやうなものを着し、下には同じ地質の裁着袴を穿き、人形を入れた紙張箱を胸に吊して其の上で人形を操つたものである、頭は時として、さゞえ巻と稱して、手拭で鉢巻やうのものを作ることもあつた。

◇阿波人形『はこまわし』◇

人形師の細工場から



塲工細の翁吉久岡吉事久狗天師形人の波阿的寶國　（上）

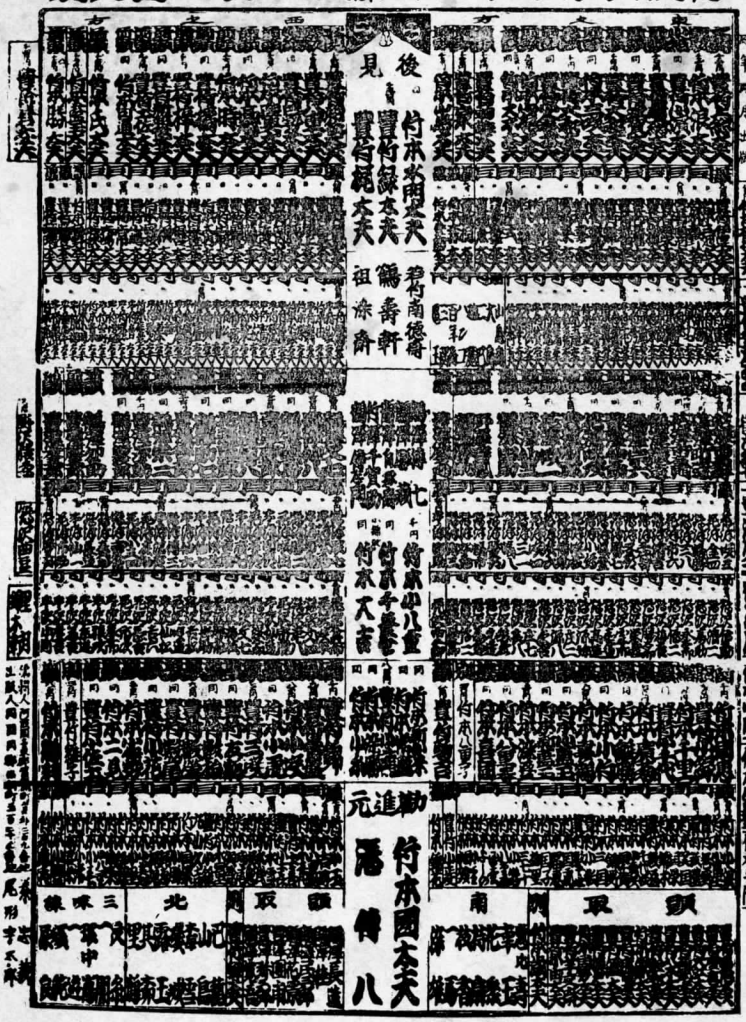
ろいろいの頭たつ上來出同　（下）

◇阿波人形師の細工場から◇

（上）天狗辨事近藤辨吉氏の製作人形

（下）榮松翁四代大江武雄氏の製作人形

阿波國淨瑠璃三味線女太夫共見立鏡



◇ 附番線味三夫太義國波阿の版出年七治明 ◇

=(古物町澤鶴町造氏所藏)=

阿波郷土誌

第四輯

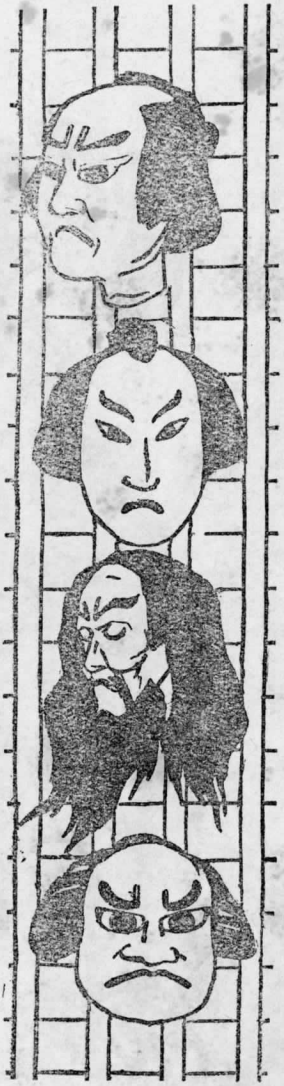
本誌の綱領

△本誌は我が郷土歴史の由來沿革を調査し其社會組織上の諸現象を明にするを以て目的とする。

△右の目的を達せんがため、たゞ古今文獻の調査のみならず、周ねく遺物遺蹟、土俗、傳説、言語、信仰其他人類上、社會學上の諸研究並びに資料を掲載す

△本誌は廣く同好の諸士より前記諸項に關する研究並に資料の提供を歡迎す。

△本誌は郷土歴史研究の趣味を喚起し、其智識を普及せしめんがために、特に通俗を旨とし、高遠なる學説の發表と共に卑近なる報道を掲載するを避けず。



人形芝居の保流

文學博士　喜田貞吉

一、緒言

久米葉舟君書を寄せて阿波鄉土誌人形芝居號に是非何か書けといふ。實は自分は近ごろ少々健康を損じ

て、肝腎の責任ある仕事が大後れに後れて居るので、　往辭退に及んだが承知されない。乃ち手數のかゝらぬ所で、極めて簡單に人形芝居の源流に關する研究の梗概を書いて見る。

人形芝居は何と云つても淡路と阿波が本場で、淡路に於ては、舊藩政時代頃には、座元の數が四十幾つの多きに達して居た。それと比べたなら、今では甚しく其の數を減じたそうであるが、それでもなを日本中を跨にかけて、一座を率ゐて打ち廻つて居る興行師が數座あるそうな。阿波は國が廣いだけに、小さいながらも人形座の數に於ては、淡路よりも却つて多かつたかも知れぬ。自分の子供の時分には、出生村の那賀郡櫛淵村(今立江の内)にも村持の一座があり、別に藤田忠太夫座といふ個人持のものもあつて、氏神の祭禮や出來秋の豐樂に、度々芝居が興行せられたものであつた。是が爲に僅か二百戸内外の小村にも、八幡社、諏訪社、天神社の三個所に、常設の舞臺が設けられて居り、お百姓衆の素人義太夫語や、人形使が頗る多かつた。つまり村のお百姓だけで、芝居を打つて余る程の藝人が揃つて居たのだつた。そんな有樣だつたから、大抵の人は　口淨瑠璃の眞似事位はする。お婆さんが火燵で足袋の繕ひをしながら、『そりや聞えませぬ傳兵衛さん』をやる。子守女が赤ん坊を背中におんぶして、『今頃は半七さんは』をうなるといふ始末だつた。近ごろは各地に民間藝術だの、鄕土舞踊だのといふ事が奬勵せられて、一旦廢たれて居たのまでだん〳〵再興せられ、はる〴〵東京の青年會館へ出かけて其の鄕技を演じたり、或はラヂヲで全國に放送したりして居るのである。阿波の人形芝居を民間藝術として復興することは、今では恐らく不可能の事ではあらうが、せめては此の人形芝居號によつて、隆盛だつた往時を心ゆく迄偲んで見たいと、

大なる期待を久米君の努力振にかけて此の筆を執る。

二、攝津西の宮の百太夫と傀儡師

今日ではどうか知らぬが、自分の子供の時分には、よく夷舞はしといふ物貰ひが農家に訪れたのであつた。夷三郎の人形持つて滑稽なる所作を演じつゝ、『夷三郎左衛門の尉、生れ月日は何時ぞと問へば、福德元年正月三日、寅の一天まだ卯の刻に、なるやならずに安ら安らと御誕生なされた』といふ樣な、めでたい限りの文句を並べて、所謂『祝言』を述べて家門を祝福し、米を貰つて歸るのである。今日の言葉で云へば一種の移動藝術家で、古へは之を傀儡師と云ひ、俗に河原乞食なぞと云はれた仲間で、是れ實に後の人形芝居の源流を、舊い形のまゝに繼承したものであつた。

攝津西の宮の夷神社は、庶民に財福を授け給ふ神として世間の信仰厚く、是が爲に神社其のものも福々でいらせられる所の有名なる神社であるが、其の攝社の一つに百太夫社といふのがあつて、それが傀儡師の元祖だと言はれて居る。『傀儡師首に懸けたる人形箱、鬼を出さうと、佛出さうと』といふ歌の示す如く、傀儡師は即ち人形使の事である、其の西の宮の近所にもと產所といふ部落があり、其の住民が百太夫を祖神として夷三郎の木偶を作つて、之を舞はして諸國を廻つたのが所謂夷舞はしで、或は之を夷舁とも云ひ、それがだん〳〵と發達したのが即ち人形芝居である、そしてそれがお向うの淡路に移り、更に阿波に擴まつた事と察せられるのである。此の事に就いては西の宮の吉井太郎君がよく其の沿革を調査して居られるので、是が寄稿を御依賴して置いたから、多分有益なる研究が、本誌に光彩を添へてる事であらう

と思ふ。そこで自分は、此の方面の事はすべてそれに讓る事として、更に遡つて其の源流を探り、所謂人形芝居の顚末を明にするの資とすると共に、一つには人形使ひ其の他の遊藝者の徒が、過去に於て世間から蒙つて居つた或る種の誤解を掃するの料ともしたいと思ふ。

三、道薫坊

人形使ひの事を古へ道薫坊師と云つた事が淡路常盤草にある、藩政時代の三條村、市村の戸籍即ち棟付帳には、道薫坊廻とあつたと記憶する、此の事に就いては古來種々の說がある、むかし、西の宮の道薫なる者が、人形を作つて夷神の神慮を慰めたのが起原で人形の事を道薫坊と云ひ、轉じて人形使ひを道薫坊といふ事になつたなど云ふ、或は道薫は道君で、百太夫の事であり、人形使ひは、即ち百太夫を元祖とする流れの者だから、それで道薫坊といふのだなどともいふ。百太夫が道君であるといふ事に就いては一理がある。大江匡房の傀儡子記に、平安當時の傀儡子、即ち今の言葉で云へば遊藝を以つて生計とする種のルンペンの徒が、夜は則ち百神を祭り、皷舞喧嘩して以て福助を祈るとあり、又其の傀儡子の婦女は當時に於て多くは遊女であつたが、彼等が殊に百太夫に事ふることを、同じ匡房の遊女記に述べてある。而して其の百太夫なるものを說明して、道神の一名なり、人別に之を有して、其の數百千に及ぶとの事を云つて居るのである。傀儡子は定居なく、當家なく、穹廬氈帳、水草を遂うて移徙すとあつて、言ふまでもなく浮浪漂泊の民であり、それが手品、輕業、其の他の曲藝を演じ、或は木人を舞はして生人の態を能くすともあつて、彼等は一方で實に人形使ひでもあつた。又遊女は古く遊行女婦と書いて、是れ亦もと浮浪

漂泊の生活を本體としたのであつた。從つて彼等は常に道神を祭り行旅の安全を祈る。即ち道神である。道祖神を一にサイの神といふ。蓋し幸の神で、所謂福助を祈るから呼ばれた名である。而して遊女が之を祭る場合、第一に祈るところは艶福であり、爲に道祖神は普通に緣結びの神として祭られ、時には腰から下の病を治す神としても祭られ、而して遊女等は此の神を守護神として、各自肌身離さず携帶し、其の數百千に及ぶ。故に之を百神又は百太夫と呼んだものであつたと考へられる。こゝに於て、百太夫が傀儡師の祖神として祭られた理由もわかり、之を道君と稱して、道薫坊の名を說明せんとするにも一往の道理があると謂はねばならぬ。而して更にそれから轉じて道薫なる人物を假想し、それを人形使ひの元祖とする說も起り得るのである。

併しながら、一方に人形其の物をデク、或はデクの坊といふ語がある。今日では餘り口にされない樣だが、自分等の子供の時には、阿波で一般に人形の事をデコ、又はデコン坊と云つたものである。案するに古へ人形の事をテクグツと云つた。室町時代の記錄などに往々見えて居る。或は人形使ひをクグツと云つた場合もある。クグツとはもと傀儡子の事で、それに斯くの如き文字を宛てたのは、傀儡とは支那で人形の事であるから、其の傀儡を使ふ者といふ意味からであつた。後世之を傀儡師と書くのは文字の轉訛である。又遊女の事を一にクグツと云ひ、傀儡の文字を當てゝあるのは、彼等が同じ傀儡子の仲間であるが爲であつた。然るにやがては傀儡即ち人形其の物をクグツといひ、本來のクグツ即ち傀儡子の事をクグツマハシといふ事になつて、其のクグツ即ち人形の、手に持つ樣な小さいのを手クグツと云ひ、それが略され

てデクともなり、更に訛つてデコともなり、それからデクノ坊、又はデコン坊なる名稱が生じたものであらう。而してそれに道薫坊といふ樣な文字をあてはめて、人形使を道薫坊師、或は道薫坊廻などと云ふに至つたものであらう。而も一方に、テクグツ其の物が人形使ひの稱として呼ばれて居たと同樣に、其のデコン坊がやはり人形使の名として呼ばれ、爲に人形使の元祖を道薫と云つたとか、百太夫が道神で、即ち道君であるからだとかいふ樣な、附會說も生じたものだと思はれる。

一說にデクノ坊は出狂坊だといふ。人の前に出て狂態を演ずるとの意か。松屋筆記に用例を引いて辯じて居るが、落ち付かない。但、デコン坊にしても、デクの坊にしても、或は出狂坊にしても、其の坊とは法師の義で、平安朝に地方官が暴政を極めた頃、公民が戸籍から脫して其の誅求を免れんが爲に身を法師に扮し、出家の手段によつて戸籍から削除されて、遊藝、工業、其の他の雜職に從事した事から、後までも此の業には法師姿のものが多く、又法師姿でなくとも普通に之を法師と呼び、是が爲に法師とは賤者の名稱の如くになつて、然か呼ばれることに屈辱を感ずる事になつたので、後に之にかへるに坊主の語を以てし、つひに略して何々坊と唱へる事になつたのであつた。

四、散所の者と河原者

人形使の元祖だと言はれる攝津西の宮の部落は、産所と呼ばれて、他からは筋の違つたものと見られて居た部落であつた。淡路で人形芝居の本場たる三條も、もとは文字に産所と書いて居た事が音曲道智編に見える。人形芝居は阿波では立派に民間藝術となつてしまつて、お百姓のアマチュア的余技であつたが、

それを本職として諸國を興行して廻るものに對しては、其れは歌舞伎俳優や大道藝人などと同じく、河原者或は河原乞食などと、失禮なことを云つたものであつた。淡路の人形座は日向掾などに任官したと云はれて、今で云へば宮崎縣事務官といふ程の高等官の身分として、代々脇差を帶し、百姓共よりは餘程偉い筈であつたに拘らず、やはり之に對して、蔭では之を別扱ひにし、結婚なども忌避したものであつたらしい。淡路古今紀聞に農家の古諺として、

三條の者は脇指やさせど、あれは院内門花子（かどこじ）

といふ俗謠を收めて居る。院内とは、院即ち垣を以て限られた中に隔離せられて生活したものゝ事で、各地に其の名が遺つて居る。又門花子とは、人の門に立つ河原乞食といふ義を述べたものであらう。自分が大正十二年に三條へ行つた際に聞かされたところに、昔は農家の人々の間に、

市や三條から貰ひに來たら、死んで居らぬと言ておくれ。

といふ俗謠が口にせられたとあつた。先方は相當の身分のものだから、面と向つて結婚申込を謝絶する譯に行かぬので、婉曲に之を斷る意味のものらしい。

然らば產所と云ひ、河原者或は河原乞食とは如何なるものか。サンジョは後世では文字に產所或は算所などと書いて居るが、古くは散所或は散所の者、散所法師などもあつて、もとは一定の住居を有せず、便宜散在居處するの義であらう。又河原者とは、是も一定の居所を有せぬものが、京都にありては多く賀茂川の河原に集まつて、そこに臨時の假住居を營んだものに就いて、都人が然か呼んだものであつた。今

の賀茂川は河原も少く、川幅の狹い所であるが、豐臣秀吉の京都市區整理以前には、治水の手段も殆ど講ぜられなかつたが爲に、川幅は恐らく今の三倍以上にも亘り、一面の河原になつて居たのであつた。そして戰國亂離の世、地方民の戰亂に苦しめられ、或は飢饉によつて生に安んじ得ないものが、何等かの職を求めんが爲に流れて此の大都會に集まり、此の河原に住んで河原者と呼ばれたものであつた。或は東山の坂に假の住居を營んで、坂の者と呼ばれたものもあつた。今或る種の浮浪民をサンカ或はサンカ者といふ名稱は、此の坂の者の轉訛である。散所の者といふのも畢竟は同樣で、つまりは今の所謂ルンペン或は自由勞働者なるものである。而して彼等は活んが爲に種々の道に流れて行つたが、其の中には諸種の遊藝に走り、祝言(ほかひごと)を演じて食を乞うた者も少くなかつた。爲に或はホカヒビト(祝人)とも略、してホイトとも呼ばれて、乞食の名稱となり、階級意識の旺盛な時代思想の犧牲となつて、其の子孫は固より、同じ流れを汲むものまでが、何時までも河原者だの、河原乞食だのと謂つて、或る差別待遇を受ける事になつたのであつた。今日の思想や狀態から考へれば、實に馬鹿々々しい限りであるが、往時はこんな不條理な現象が社會を風靡して、武家から壓迫を受けてみじめな境遇に置かれた農民等は、內々之に對して自己の優越心を滿足せしめて居たのであつた。而も當時に於て貴族階級たる所謂武家の中にも、是等と同じ流れから出たものゝ少なからなんだ事を忘れてはならぬ。

西の宮の產所部落ももと所謂散所の者がこゝに定住の地を卜し恐らく西の宮の夷神社に附屬して境內の警固其他の雜役に服したものであつたらう。東寺其の他の大寺にも、所謂散所法師の徒が附屬して居た例

は幾らもある。而して西の宮の散所は大江匡房の所謂傀儡子の徒として、百太夫を祖神と仰ぎ、西の宮の夷神を人形即ち傀儡に作つて、祝人渡世をなし、爲に傀儡師とも呼ばれ、其の伎がだん〳〵發達して、人形芝居となり、はては淡路の產所にも移り、阿波にも擴まつたものであらう。

五、結　語

藩政時代に於ける阿波の人形芝居の源流が、右言ふが如き所にあるは殆ご疑ひを容れない所であるが、併しそれが必ずしも人形芝居其の物の源流を語るものではない。平安朝に於て、すでに所謂傀儡子は木人を舞はして、生人の態を能くしたと匡房は言つて居るのである。それがだん〳〵と發達變遷して、田樂ともなり、猿樂ともなる。猿樂の最も發達した本場は奈良で、奈良坂に宿の春日と呼ばれる神社があり、宿神を祭り、翁の面を傳へてトウトウタラリの三番叟を演ずる例であつたが、人形芝居にも亦祝儀として三番叟を演じ、上村日向掾は、用明天皇御宇春日佛師稽文會の作と稱する翁の面を持傳へ、それを至寶として居るそうである。然らば奈良の猿樂と、淡路の人形芝居との間には、一脈の密接なるものが相通ずることを否定し難い。ひとり奈良猿樂のみならず、各地の能樂大抵此の面を尊重する例で、昨年出羽庄内の黑川能を調査に行つた時にも、此の村にやはり翁の面を傳へて至寶として居るのを見た。大正七年一月日向佐土原へ行つた時に、全村の殆ごすべてが歌舞伎役者、或は舞臺方など、所謂芝居者のみの、俗稱ビューといふ村を視察した事があつたが、こゝにも翁樣と稱して、紙の張抜の翁の面を傳へ、之を甚しく尊重して居た。深く人形芝居の源流を尋ねんとならば、先づ以て此の翁面を通じて廣く各種の遊藝者を涉獵し、更

に進んで平安朝の傀儡子にまで遡らねばならぬが、問題のあまりに枝葉廣汎に渉ることを避けて、今はたゞ其の大要を述べる事に止める。（昭和七、六、八）

一の宮城趾と鮎喰川の歌

西内瀧三郎

一の宮長門守の城あとは苔むしにけり松風の音
たきすてし炭のかけらをそと拾ひこの城あとの歌かきつづる
松風のあはひに白き鮎喰川延命へわひる橋長くかかり
水無月のはじめとなりて山松のかなたに麥がうれて見ゆるも
本丸あとの松吹く風の涼しくて蜂の羽音をきく眞晝なり
鮎喰川うれり曲りて松青く砂に眞白き衣さらしたり
夏霞山一ぱいにひろごりて麓麥畑黄に熟れてゐる
鮎喰川の涯はかすみて目が照れば線路をくぎり市街は見へぬも
老松の根にともしくも建てる墓往時をしのび土に涙す
瀞の水に松かげ寫るひるすぎを橋わたりゆくあまた人かげ
晝すぎの鮎喰磧にしらゆふのほされて松のかげ濃かなり
城あとにあそびしけふの記念にと拾ひてかへる燒麥の粒（落城の節燒落しほしい倉の麥）

阿波人形芝居

東眉所田

私は此頃頗る多忙で年に三度の光慶圖書館にある阿波郷土研究會さへ欠席勝ち一三度久米葉舟君の御光來もあり其上御手紙で六月二十日まで何んでも『阿波人形座沿革史』を筆せよとの嚴命であるが、書かぬ分けには行かずさりとて組織的にするには時間はなし依て茶を濁す程度のものにした。

何事も突如として現出するものでない。そうして人形が座組織になるまでには其前に淨瑠璃といふものを考へなければならん、又淨瑠璃といへば三味線となるは當然であらうと思ふ。胡弓と三味線との關係は姑く惜いて、何人もお知りの通り慶長頃に澤住（本に澤角）撿校が琵琶の高手であり。此人が又三味線に巧妙にて平家物語に琵琶を合するが如く淨瑠璃節に三味線を合す、之を淨瑠璃曲が樂器の伴奏を得た始めです。澤住の門人に目貫屋長三郎といふ者があり西宮の傀儡師引田某を語ひ淨瑠璃に合せて人形を操る之れを淨瑠璃曲が人形と合演する始めであります。共に慶長年間の事である。茲に於て淨瑠璃曲は伴奏の樂器を得て純正的の聲樂たる形體を具備するに至り劇的動作

の人形に配して全く戯曲の性質を表彰し得べきものとなつた。兎に角も美術上の上に立つべき價値を有するものとなつたのである。『嬉遊笑覽』に

慶長年間の古屏風四條(京都)の繪に女太夫の上るり芝居有り。三絃彈も女にて太夫扇を持て出がたりなり。人形つかふ所より　段高し。人形は上るり語の目の下にあり。人形は戰場の體にて城廓矢倉等の作り者あり。人の足又は人形つかひの首手なご見えず芝居の表やぐら下の扎黑ぬり。緣朱ぬりにて金かなもの。中の文字金粉にてじやうるり內記と記す云々

以て其　班を窺れます。薩摩太夫の淨雲が慶長の初豐太閤の上覽を蒙り尙禁廷に召されて畏くも叡覽を賜はる即ち受領して淨瑠璃太夫の稱を許された。

元來人形を作つて禁裏に奉つたものに受領號を許されたが始めであつた。然るに此の淨瑠璃を人形に合はするに及び。語る者の方勢ひ强くつひに人形遣の受領號を奪ふに至つた。寛永の初、江戸の中橋廣小路に操芝居を興行した。此時島津侯が此邊を徘徊し其後ち居館に招いて興行せしめた。其時小平太なるものの人形はことぐ〳〵く土偶であつたから大身の興とて通四丁目に京都より下りて。江戸中それまだ只一人のみ渡世ミする人形師鶴屋といふ者に申付け殘らず彼の人形を木偶にした。是迄小平太紙の幕を用ひたが彼の館にては紫の絹幕に家紋入りである。島津侯興に入り、其褒美として木偶と共に其幕まで下賜せられた。是に於て土偶が木偶となり、紙幕が絹幕となり、汎く流行して殆んご其名を知らないものなきに至つたから幕府は之に對して禁令まで出て居る、されご世の大勢は仕方ないのである。

淨瑠璃は其後ち虎屋源太夫に依り淨雲の流は東西二派となり更に數多の流派を生した竹田出雲は阿波の產であつたが餘りに有名である其子近江は德島蝦屋町に住んたことを聞く合作なれども假名手本忠臣藏をかき又有名なる妹背山女庭訓の狐原者三好松若は名東郡法華万松菴の僧であつた、常に戯作に松落の號は万松菴を墮落の謂であるこ松落又松洛ともかく、美馬郡祖谷の義太夫は上洛して太夫號を許された、染太夫は名東郡津田の魚賣であつた、遂に越前大椽に上つた。五代目染太夫の鹿子太夫と時を同しくした浪太夫もある。同郡庄村から三木勝藏の上總太夫も出で兎に角は斯界に名をなす者が多かつた之れも阿波に於て如何に淨瑠璃が隆盛であつたかといふことが想像するに難くないと思ふ。

何故に阿波に於て淨瑠璃が隆盛になつたかと云ふに此頃德島日々新報に連載しつゝある阿波藍同業編纂の『阿波藍沿革史』を讀めば能く解りますが此の阿波藍なる專賣的の產業があるが爲に阿波藩は藩扎が他藩と異なり大阪でも通用する天保頃には廿五万石の高が實高四拾万石となり幕府に對して大に遠慮した事さへある位の關西の富藩と呼はれた此賣場の取引關係が頗る長期にわたる爲めに各所に棚所謂座といふものがあつた。こゝに出張する店員は金まはりはよいし、長年月の旅稼き其徒然を慰むる淨瑠璃をうなるものも相當出來たが、京坂や江戸にあるは人形芝居を時々見物したらうし、其主人公の中には吉原の總あげする者も相當にあつた、其極伊勢古市の油屋騷動の曲藝もあつた阿波の藍商は時に他藩で御銀主なとまで勤め駿洲沼津で丸腰大名と稱はれた小松島の井上家の如きもあつた、粹な所で云へば『橋の欄干に腰打ちかけて沖を遙に見渡せば』と江戸甚句にうたはれた小松島の神代橋さへある位なれば不景氣知らずの藍商は

藩内に於ては士分格の小高取が多い、正月には城内御目見格で一般に武士階級は故三浦周行博士も云ふ通り財政は却々の窮迫で富藩の德島城下にも武士の内職より町名まで起つた、佐古の鍋蓋小路や、小細工の安宅物の名も出來た折柄にも大阪などで仕込まれた、當時灰殼の淨瑠璃は酒席など醉興の餘波は眼は朦朧として頗べチャ手を當てうなり出せは何んとなく、雄大な風が吹く之れに村民等は共鳴せぬであらう、冬の夜長などには實にふさはしい遊戯である、それが經濟的藩内を支配した權威の指導である、淨瑠璃といへば三味線殊に義太夫である。此邊まで來れば三柏子の二柏子まで出來た在來連盟した人形の本山淡路の源之丞は同藩内の事なり、三里の鳴門を渡つて乘込むは當然のことである、現在の如く定席があるでなし皆臨時の小屋掛である音聲の散亂し易い小屋中なれは太夫が語るも其音聲を徹底さゝなけれはならん次第に音聲は大きくなるとは小松島の豊竹綱惠太夫の説である。阿波淨瑠璃が澁味があつた、何んとなく古拙な所があるは古い其節まはしを傳へたものかと考へる。阿波藍の隆盛なる時代は所謂阿波式で押し通されたものであらう、藍業の衰頽はやがて淨瑠璃まで影響し其上世相の相違は文樂式が發展した結果今は殆んと純阿波調の淨瑠璃は聽くことが出來ぬ。

先年松本彦治郎先生が勝部博士と貞光出演の節、誘ひ出されて共に參り當時美馬郡長であつた、岬吉之亟藤崎(當時視學)諸賢にお頼みし美馬郡三島村の七十何幾某の純阿波淨瑠璃を陪聽した、以來聽た事がない位に文樂式に今は征服されて居る。以上の按梅で昔は語り手に上才もあるが其間に葱太夫も相當に出來たのである葱太夫でも人は自惚なもので何んとかして、人に聽かしたと見えて北方の某金持の旦那さん一

度代議士にもなつた御方で村に人形芝居が出來るオレも是非共に出演すると云ひ仕方がない、番頭は詮方なく思案の結果一案を考へ出した、臺所で内々人手を入れ澤山の折詰製造に取り掛り旦那出演の一寸前にワクの間を三拜九拜して、折詰に瓶ヅメを配り出す。さて、旦那出演中は淨瑠璃拜聽より御馳走拜領の方が頗る大多忙である。コンミッションを取つた以上は德義上謹聽せざるを得ん節もある旦那家に歸り番頭を招いて曰く『今晩の淨瑠璃の出來バへ如何』番頭言上すらく『旦那近來の上出來頗る好評よ』と旦那は大恐悅であつた、熟興の極は先つ斯の如きものである。このやうな人は各所に澤山あつた故に年貢米の五合や一升を彼是れ云ふ輩でも、淨瑠璃に投ずるは別に惜まないのである、年に一度の秋の豐年祝に淡路の源之丞は毎年阿波へ乘込んで來た、源之丞は迚ても其申込みに應じ切れなんだ。

需要と供給との關係は自然の理法である迚ても淡路源之丞君のみには需要に應ぜられん、階級制度の嚴たる時代え仮令これが有利なる一つの事業としても着手に躊躇するは何と申すも下り者の事業であるからである、茲に於て思ひ起すは、正月の門附の徒である、其中でも猿廻し今も同樣で古くからあつた古くは猿引。阿波の公簿等には猿牽とある足利時代よりあつたと思ふ、能の時に遣る狂言の靱猿にも此事がよく作り込まれるし、猿を引くは一種の信仰上から來た馬の病を猿が癒すと考へた猿牽の繪錢を馬引錢といふウマヤで猿牽を舞す猿は去るなれは諸病や危を去る、關西では只だ可愛と云ふ所から藝させた、又後に囃子とて太皷を打つ那賀郡川北地方にある風呂敷人形は生きたお猿を人形にかへた丈け之れが一歩進めば箱人形であらうと思ふ此頃の箱人形は『座』の一部が特別營業として出稼する者もあるが根本の箱人形とは

少し其趣を異にし所謂渡り者の式で夫婦に小供位を引き連れた箱人形が太夫等のうちなどを尋ね來る、太夫等は我家に宿泊させ何所の何人なるかは知らねども十二分の世話をやいて渡す、万一旅銀なぞに窮せば此の心配までして進ぜる、其情合は始めて合ふて拾年の緣者のやうである。故に此の緣起のよい猿牽が次第に工夫を凝らしたものが後ちに人形座を組織するやうになつた、依て阿波の此座には猿牽が之れに類する掃除のもの丶部落が多い其內容も考察せず只だ文字の皮想觀より四方楚歌の聲に陷つた町名改正の市富田裏掃除町は此點にある。裏掃除町等の起原は公簿の上には掃除の上に『御』がつき御掃除でお徒、小奉行級の士分で郡部にある掃除とは違ふ左に文化五辰歲麻植郡東川田村猿牽掃除棟附人數御改帳(抄出)を出す

壹家　御藏猿牽　安太郎　歲四拾八

此者父安之丞儀元文三午年當村棟附御帳に肩書猿牽斷出奉公人と相付左書に此者祖父九兵衛儀立木傳左衛門樣當村棟附御改之節壹家斷出奉公人九兵衛歲五拾七と御帳に付上左書に此者寬文十一年より御給人長谷川越前樣斷出奉公人と野々村左門樣御改之節も付上申候但長谷川主計樣御挨知川成跡川原林御行被御付帳に居申候樣付上候所其節九兵衛一家小家其夫役被仰付百姓九兵衛と夫帳に相付小役引御付扎御座候今以長谷川民之助樣御斷出に罷成當村御手林制道役仕居候旨付上御座候然る所寬政三亥年長谷川近江樣御挨知御上り知に相成居申此度棟附御取調に付右之運申上候處御詮義之上本來其御藏猿牽と付上夫役被仰付候且彼者儀享和亥年より當村野山へ罷越稼居申候

小家　御藏猿牽安太郎忌外　七　藏　歲參拾四

同　同　熊　治　同四拾五
同　同　林　之　助　同參拾四
同　同　伊　勢　之　助　同四拾九
同　同　常　八　同貳拾壹
同　同　源　七　後　家　同五拾四
同　同　澤　治　郎　同拾　四
同　同　音　之　助　同四拾貳
御藏掃除　初　太　郎　同四拾五

一壹家

此者親喜兵衛儀は根元美馬郡重清村掃除三五郎影之者に候所親喜兵衛代當村へ罷越當村猿牽眞佐右衛門姉妻ニ仕親喜兵衛儀ハ享和亥年病死仕右同年貳人之伜當村野山へ罷越相稼居申候然る處此度棟附御取調當村へ住替被仰付旨奉願候處御詮義之上御別儀ヲ致御聞屆被仰付文化五辰年御郡代平瀨所兵衛樣森藏樣より住替御証文頂戴仕當村に罷成候

小　家　御藏掃除初太郎弟　源　之　助　歳四拾四

此者兄初太郎同所御藏掃除に罷成候且享和三亥年より當村野山へ罷越相稼居申候

家數合拾壹軒　自分家

内　九軒　猿　牽

内　貳軒　　掃　除

人數合參拾壹人

内　拾五人　　女

殘而　拾六人

同　參人　　拾四歳以下六拾歳以上

同　拾參人　　拾五歳より六拾歳迄御役員

右者麻植郡東川田村之内野山猿牽棟附人數老若歳數支離者病人等且先年棟附御帳ニ洩居者拾有之ハ今度書戴可申候並御撿知入シ者又ハ御譜代者亦御給人江不相斷小家下人等筋目違帳面ニ相記儀右彼是其外相違之儀仕上追而在相顯其相改候庄屋五人組屹度曲事可被仰付旨重々被御渡奉畏誓紙シ上全無相違相改帳面指上申所如件

文化五辰年四月

麻植郡東川田村庄屋　　原　國　兵　衛　㊞

同人五人組　　惣　兵　衛　㊞

同　孫　兵　衛　㊞

同　久　左　衛　門　㊞

同　大　二　郎㊞

西川田組頭庄屋

住友尉之助㊞

稲田武七郎様

渡部一右衛門様

（備考）　外に猿牽拾貳軒別帳である

これが即ち人形の川田座である、　時上村源太郎と稱し却々盛んであつた川田村の隣保阿波郡伊澤村谷島の人形座は大正昭和の世になつて、四國源之丞と稱し座本に木村多次郎君が居る、同座は明治初頃に同郡柿原村の道具屋爲右衛門の一座を買取つた、又明治卅三四年頃勝浦郡にあつた吉田傳次郎一座を買取り一時吉田傳次郎一座とも稱した之れは傳説であるが同座は三百年以上も引續く人形座であると稱する天保弘化の頃には上村安太夫　座といつた字谷島木村佐吉が座主であつたといふ川田、柿島、谷島の三座は同時に起つたといふが確からしい土成村誌に

操人形は大字成當の人々天保の頃より出來人形衣裳、道具等を漸次に買ひ足し年々興行せしが安政の頃に至り創めて大字成當赤田神社境内に定芝居を建つ、是に於て益々盛に該社秋祭の當夜若しくは其他に於て之れを興行せしかは操り方淨瑠璃語とも其技上達し彼の大字市場の人形と其聲價を爭ひきといふ然るに近年稍衰へたり

とある美馬郡貞光町の人形座は同町史に書いて置いた、只今手許に其資料がないから略するが矢張掃除の業と思つて居る。三好郡は西井川字吉本に古くから吉本座といふのがあつた、其座本は明治十七八年頃に死んだ野田貞一方の襲業であつたが、同家絶家し其株等は笹内儀八に移り、明治卅七八年頃伊豫國北宇和島郡の仙一といふ人に賣渡した。書間村奥森神社では古來人形をしなかつたら凶事があるといふので、六月十七日の夏祭りと、九月十七日の秋祭とには同村原の人形座が自力で村人を招いて一晝夜の振舞芝居をするのが古例となつて居るといふ、蛭子屋忠太夫は古くから書間の原にあつた人形座で、一時は發達して居つた明治の末に座元賢太が池田の峠へ人形道具一切を賣却した、洲津には昔から二軒の三番叟舞しがあつて正月元日に蹈初めて巡業に出て地神祭と荒神祭とには各其社で交代で舞はすといふ先例があつた。今に其名の知られて居るのに利喜藏と島藏の二人がある、三庄村の中庄の掃除屋敷と池田峠の掃除とが組んだ人形座があつた之れを阿波源之丞といつて居つたのは無論であるが池田町の峠の人形座丈けを、阿波源之丞と稱するがよいのか知らん他に出掛けて興行をする書間の京座は其他十三軒といふも實際は一十軒位である、京座は却て遠方へ箱人形を以て營業に行くが節期には二十五六日には必ず皆歸つて來る、而して正月廿七八日位までは家に在つて休んで居る其間に晦の三番叟に正月三ケ日は休みて門開けの正月遊の衣裳人形には近郷へ行て舞す、二月朔日前後に又遠方へ人形擔つて働きに出る秋祭の時にも、　同思ひなしたやうに歸郷して氏神境内に芝居をなし一般の觀覽に供します近藤辰郎氏の山城谷村史には

芝居＝村民に歌舞妓、操人形芝居を興行することあり或は一日より多きは一週間に及ぶ或は祭禮等に地

鎭祭とて名費にて行ふもあり或は興行主即ち請元ありて營利を目的として興行する者あり木戸錢場錢を徵し中賣に課稅す中賣は菓子、果實、うどん、蕎麥、すし、田樂、酒等を販賣す村人は愛顧の太夫操人形遣、俳優、請元等に對してヒイキとして幟、水引其他諸種の贈物をなす。

荷擔きの操人形偶々數荷同時に來る事あれば之れを雇入れて操らしめ村の素人太夫の淨瑠璃にて近隣の老若相集りて之を觀ることあり一荷擔きに各家にて操る、これに三番叟あり、又淨瑠璃の本の　部を謠ひつゝ操るもあり菓子盆にて麥なごを與ふ

とある、勝浦郡地方は大谷には旭源之丞といふのがある之れは、明治維新の際に一宇柳之助等數名が發起となつて始めたので始めは娛樂的のものが後ちには營利的になつた、其組內は拾五人である沼江は山八座といふがあつた、山八は家の印である明治五六年の頃に名東郡和田の人形師より人形買ひ入れ、人形座を組織した後ちに那賀郡長生の本庄へ賣渡し先方では本庄座と稱した、棚野には天保年間より維新前まで祭禮芝居の人形座があつたが、維新後北方の喜市座に讓り渡した、久國の八幡神社に奉納芝居の人形座があつた、坂本には維新前より明治にかけて村持の座があつた、傍示村には天保年間庄屋阿部民助の周施で出來た傍示座がある、福原村田野々には古來素人歌舞伎座があつた、其由來を尋ねると寬政年間武市雲和といふ書伯があつて歌舞伎に趣味を持ち、大坂に上り道頓堀の樂屋に入り道具立を寫し歸つて始めたもので、其座は今に存續し旭座又旭美團と稱して居る、興行に雇はれ相當の收入がある、之れは座といふから書き添へた同村福原に福原座同村生實に共樂座がある。

那賀郡立江町の櫛淵にも人形座があつた、此事は別記してもよい富岡の茅住町には天神座と稱する慰みの人形座があつた明治年間迄數奇者が役者となつた嘗て淡路三條村より山田眼玉といふ人形使を、手附として雇入れた事もあつた、荒田野字岡花には古くから細工人形座があつて役者は皆岡花在所の趣味深い人達であつた近郡等、請ひに依り興行に行き今も共同持ちの座である。

人形廻しなるものは前にも云つた如く、所謂下り者で普通人は緣結は勿論の事で單なる交際も十人揃ではない見下さけて居つた。茲に面白い話がある、那賀郡福井村の某が阿波郡地方へ馬買ひに行き、前々の事こて自動車なごの乘物はないトある民家に宿泊した、夜ばなしに淨瑠璃の事から人形の事に及んだ、福井村の某は特意に福井の人形座の事を語り出すや、其民家の家族は眼を丸くして迚ても不興の體で夜半なるに將に戸外に追ひ出されんとした、其理由は福井村の某を人形座に關係あるから定めて猿牽位の身柄の者と見て斯る下り者に宿を貸すは、家のけがれであるからであると、之れより福井村の某は自分の身上の說明やら證明やら却々の苦心で辛くも追ひ出される事丈けは取留めた。之れに依て考へても人形座に關係するものにも其身柄に甲乙両種あるこごが解る、甲は全く趣味より出發したものこ乙は從來の川原者系統のものとある能く云へば人形座の民衆的具體化したものであらう、既出の土成村誌の記事も甲種に屬するものかと考へる。

那賀郡福井村のは下分、中分、寶屋敷の三座ある下分座は天保六年八月衣裳、頭等を買求める其費用を五月中の中井堰の土木を請負ひ、其七日後指上げ一金貳分代三拾三匁五分と三拾八匁は撿見帳控へ同年九月十日指上げ其要をつへは下分田地稻作撿見免帳を願ひ免除せられた米を、地主よりは取立て之を賣却した

金を以て人形の入費として先是同年三月人形遣の淡州者貞之助、光藏を雇入れた翌年六月十五日人形芝居を開催し明治廿年頃頭及衣裳を新調した中分座は下分座と競爭的に起つた寶屋敷座は岩淺守二郎氏が獨力計營し中分座を合併した其富力に依り諸道具万端完備し優良の役者を養成し全國に巡業し殊に淡州三原郡湊にて芝居を打ち毎日大入好評を博したが、守二郎氏逝去共に衰頽した、時は阿波寶屋源之亟と稱した此頃小川袖香氏が書いて居る吉田金四も阿波人形に關係がある。他に澤山ある人形座は其内に覽表にする。

以上の如く藩制末には人形芝居は大流行したが、和食方面にも人形座が起つて以來秋收獲後那賀海部の方面でも巡廻興行した。或年中山座が請元となつて淡路の源之亟を傭つて興行したが意外の評判大入で多額の純益金が得られた折柄藤林といふ定請林の賣物が出たので、中山座は前記の純益金に積立金を足し添へ其株を買取つて一座の所有となし遂に人形林といふに至つた、明治常初中山上傍示に人形遣の名人が多かつた爲めに協議の上人形座を上傍示に讓與したが人形林は大正年間下傍示の神明神社の基本林になした和食にも和食座があつた、座元は和田清次郎氏である。

昔は一般に定席といふものがなく、人形芝居でも催す時には野芝居と稱して假小屋を掛けて興行したもので、若い者等は夜中の興行などには暗みに紛れて種々の不都合な行爲をしたので、弘化中操芝居は早朝より始めて七ツ時即ち今の午前四時限には仕舞はし若衆連の猥の所行喧嘩口論等を防遏し、棧敷の懸方老幼婦女の見物保護に對する方法などを示して、郡代奉行高木眞藏、淺田久米之進より村役人に對して村中の者等に嚴守せしめた次に掲げた文書はそれである

郷中　日操之儀ニ付不都合之仕向も有之ニ付卯年七月別紙之通取究候事に候然る處其已來取究通相替候郡も有之中には以前へ立房り候村方も有之哉に相聞如何之事に候條兼而御究通相守候樣其方共組村浦尙又不相洩樣相觸可申右申渡の趣意に引違之儀相聞へ候得は相儘候もの其勿論村役人共迄も此旨申付有之事に候條少しも不心得之義無之樣重々取究其方共組村浦取揃可指出候尤此狀披見御形折かへし無滯會順達廻濟村より可指戻候已上

九月十四日

高木眞藏

淺田久米之丞

一郷中一日操之儀是迄は相始り候儀遲く夜分迄も相迫り候ニ付若ものなどは猥み所行も有之又は喧嘩口論等出來せしめ候ニ付此後早明より相始め七ツ時限ニ相仕舞可申候右取究相背夜分に相迫り候におゐては村役人共は勿論若もの共屹度咎可申付候

但し本文之通に付願紙面に日之內仕舞之儀且又相雇し操師共も日之內仕舞候樣住居受持之興頭庄屋より申付置候樣可仕事

一右共操見物之儀左右に圍仕右に引添棧敷懸候村方も有之事に而不都合立設向も有之趣此後棧敷通候儀不相調候尤左右に何之圍も無之候而ハ多人數相集候得ハ自然芝居小屋へせり通り操興行難相調樣相運且又老體幼婦人などは見物左右之圍迄に而は今難澁之趣ニ付而は右圍は引添低き腰懸け樣之品指置老幼婦人之見物場處に仕候儀は不苦候右取究相背棧敷等相懸不都合之義向仕候村方之候得は村役人は勿

論不都合之設向仕候もの共屹度答申付候但支配外のもの共へも本文同斷に候棧敷等相懸け不都合之設向相調不申候條村役人共より兼而右樣想得可罷有候以上

右之通被仰付御取究之御趣意村中壹統奉畏候ニ付仍而連判御受書仕奉指上處相違無御座候以上

弘化四未年十月　　小仁宇村　重吉㊞

（外五拾名略）

小仁宇村は今は那賀郡鷲敷町の一大字となつて居る、座は足利時代に能樂が大成せられるに及んで、觀世などの四座が定められ是より更に變じて、江戸時代には劇場を何々座と稱することになり、今に至つたが其間に座を相當の資格と特權を附帶した團體又は組合と解したもの　つに人形座もあるといへはよいかと思ふ、德島市新榮町淡路人形座の引田氏所藏文書中に

良寒氣に御座候座中御壹統御揃被成益御機嫌能彼爲入候乍去阿淡野芝居之儀に付右者三味線壹統之咄儀出語一切不仕此段座中御壹統へ御通知に相及候也

明治八年十一月十八日　　南方因連㊞　德島因連

淡州座本御壹統中

斯の如く人形芝居界に嚴然と內的に統一されたものである、此所に淡路源之亟の座が魏然たる分け柄であ

る以上の文書の『印』には『因講阿州德島行司』とある因講は無盡講的のものではあるが淡路人形座の其内面をうかゞふに足ると思ふ同家に次の文書がある

覺

一、國停止　先年之通日割曳斷

一、中國行　給銀二割增

一、九洲行　給銀三割增

並ニ中國九洲行之節は番上り十一月限り

一、他國行　歸り節は泊り晝仕度渡し錢座曳受之上番上りは撫養岡崎之事

一、興行之度々床壹統へ上草履足袋一足づゝ相渡し可申事

一、芝居大入出語り並に　日操り出語り斷之事

一、蒲團並に蚊帳座成之事

一、渡し錢晝仕度座受込之事

一、近年座本手元にて太夫名勝手を以名仕替り事斷

右之條候事

阿波因講印

それで届書を出す又同家所藏文書に

讃州高松豊竹已太夫門弟　芳太夫

阿州北方竹本筆太夫門弟　桂　太　夫
阿州德島竹本播磨太椽門弟　雛　太　夫

右三人者衆中講外

阿州南方小松島豊竹湊太夫　新太夫講外印(因講)

淡州御座元衆中

阿波が人形の盛んであつた事が解る、之れを關聯する淨瑠璃も却々盛んであつた事は前々にも述べたが他府縣人は今でも阿波國人は何人も淨瑠璃を語らぬ者がないやうに云ふ位である、で國外不出の淨瑠璃が六七種もあるので解ると思ふ此時使用した古淨瑠璃本は六、七行のものが多く殘つつて居る十一行ものを名西郡山分で見たことがある一　度德島市の古本屋に繪入九行物が出て居つた。既出の土成村誌にある如く神社の境内に定舞臺が各所に出來た、今では南方に多く保存されて居る其芝居の概況は既出の山城谷村誌(先達德島毎日新聞所載の拙著阿波に於ける宮座參照)に云ふ通りである、此定舞臺に各地の人形座が結び付くのである明治維新は何事もお解き放し今まで德島城下では斯る興行物は御許可がない二軒屋街の新地(町はづれ)などで小屋掛興行であつたが、維新後紺屋町の長濱、坂崎席(富田秋田町の新富座の前身而して又此座は富田大芝居といつた事もある)藤見座(寺島)常盤座(新榮町稻荷座の前身)竹席(大岡)歌舞伎座(富田仲ノ町)横土手のサカヘ座佐古町九丁目の何と新町の杉屋裏のそれや大道の一樂座塀裏の蛙子座は半落成で時化で倒されたと、等と、算へ來らはマダ澤山ある此の定席に歌舞伎の來演が出來した、藍作は

昔の如からず文樂式の淨瑠璃が濃厚になる田舍に定席の建築は、神社境内の定舞臺にも大に影響した、世人の趣味も變化し人形芝居の隆盛も峠よりすでに下り坂となつた、但し斯る傾は阿波丈けではあるまい。

此の次は人形其物は如何であつたかと云へば、何故に阿波では歌舞伎はなさなかつたかと云へば、藩より禁制であつたからである、豊年祝などの時は人形芝居がチョンガラ節位であつた、而も引田源之亟などが御得意として恒例的に當國に來た、阿波淨瑠璃と相まつて遂に出稼の時代の要求となり、各地に人形座も出來たのであることは既述した通りである、以下の話は一度雜誌『阿波之友』第十一號に吉岡久吉翁の談を中心として書いた事がある、元々阿波の人芝形居に使用した人形は大阪物であつた、其中で知れるものは大江治平や其の關係の萬歳の作品であつた、所が阿波物の古いものに馬の背物といふのがある、其作者の名前は解らんが元は淡路座の役者で却々の器用者であつた、此の人が人形を德島城下の大岡馬背で製作した此れが馬の背物である、此の作者が逝いて百八十年以上になる、此の馬の背物系の後は不明である又今より百余年以前阿波南方(と傳へる)出身の鳴洲といふ壽伯が德島塀裏で人形製作に打ち掛つた此人を中興の祖と云ふ、此の鳴洲の甥に宇之助が市古物町に住して、其弟某とがあつたが宇之助は十四五年間か製作せず三拾歳代で逝かれた、名東郡和田人形といへばデク忠といふ本名は忠三郎である、忠三郎の父は義三郎(久吉翁に斯く聽いたやうに思ふ)といふが、德島佐古大谷の玩具師佐平といふに學び人形製作しつゝあつたが故あつて追放となつたけれども、ひそかに歸り矢張製作を繼續したが隱れ人なれば、表面其名を出す譯にはゆかぬ、依て赤兒の忠三郎の名で廣告宣傳した。故にデク忠の名は大に世に知られたので

ある、實際を云へば忠三郎のデク忠は父子二代の代名詞である、今は其製作系は絶えた又別系統として揚げなければならんは川島富五郎である、此の人は特に師匠といふものはない、數奇にまかせ甲に尋ね乙に聽きつゝ研究し後ち上洛して其塗方なぎを稽古したものである、源之丞の國五郎が隱居座を創むるに際し之れに隷した、此富五郎の弟子が即ち斯界の權威者國寶的の天狗久の吉岡久吉翁である、富五郎は松葉屋と呼んだ、久吉翁と同じく國府町人の矢野の青年作者近藤辨吉氏は久吉翁の甥で現在活動して居る。

以上につき其技工の優劣を云へば鳴州には時々銘があるが他はない馬の背物を以て第一とせなければならん鳴州以下には餘り優劣がない第　と云ふ馬の背物を大阪製の治平物とを比較すれば其手腕は伯仲の間にある或物になると寧ろ馬の背物がよい場合がある而して各人の特長を能く發揮するものは耳である大阪文樂の人形を見ても小型である、何時頃から大型になつたかといふと明治十二三年頃より段々大きくなつた、以前は高さ三尺以下で頭は四寸二三分女形は四寸足らずといふ所である、源之丞であつたか志樂座（井上源左衛門）か名東郡藏本に至り興行したが其出し物が、西郷隆盛の西南騒動であつた、其時久吉翁七ツ程人形頭を受取り之れを手本として製作したが、頭形大なりとし返却せられたものゝ寸法は四寸八分のものであつた、只今となつてはそれが少さいとて使用せず現時製作しつゝあるものは五寸八分より六寸である。

何故に四國が人形の本場のやうになつたかは阿波の出稼も一原因であるが伊豫に『面幸』の現出も一つの動機かと考へる茲に於て一考察を挿入せなければならんは馬の背物の作者である此の作者の彼の髪毛の植え方は一々植込みである大阪物の治平作でも只今久吉翁のなすが如き釘止めである此技工上よりして馬

の背物が古式のやうに思はれる、而して翁の談に依れば馬の背物の作者の逝去年暦は少なくとも百八十年程前であるといへば元文の末か寛保の初頃に當る、而して土偶や木偶の起原は既述した淡路座は斯界の權威であるが之れが攝津西宮の傀儡師に代つたは、寛延寶暦の頃である、此間に淡路座の發達を認めなければならんと思ふ、而も馬の背物の作者が淡路座の元役者であつたと云ふそれのみにても淡路座のすでに斯界の權威者であつたことを證明が出來ると思ふ、殊に竹本文三郎が人形の局部的活動を工夫したは、寶暦頃で文三郎と馬の背物の作者と何れが先かは大問題は殘させる、けれども云ふことを附記したい、當時藝術家が其作品を公示する機會と機關がないことなれば田舍よりは有識者の多い都市は早く廣く公認せられると思ふ斯くなつて考へば馬の背物の作者が治平なごより其時代が古いかも解らん、これは馬の背物の作品を見て其技工論の上より何人も批判を加へるより他に手段はあるまいかと思考します、擱筆に際し世界的國寶的本縣名東國府町大字和田の天狗久「吉岡久吉翁に謹んで茲に敬意を表し併せて翁の健康を祈ります。

（附　記）

縣立德商福田芳明先生に　寸申し上げます、これは文字にのみに據れませんが團の原と何に書いてありますか、阿波誌でも南海治亂誌でも壇と書いてある、又城ケ丸經ケ丸の問題は再調の上申上げます、地方にある系圖は岩崎史料編纂官なごもいふ通り見るのに餘程警戒を要します迚ても丸飲みには出來ません。

（昭和七年六月十八日記）

淡路と西宮の人形座

吉井太郎

一、淡路三條の操

淡路國三原郡市村三條には往時から人形操を職業とする者が尠からずあり現在に於ても余孽の存ずるものがある。その中でも上村源之亟が最も名高い。然るに源之亟は今徳島市新榮町に轉じ同地に於て稲荷座を起して家業を繼承して居られるが淡路とは當面の關係かないように思はれる。他に中村久太夫、市村六之亟、福永蔑太夫、吉田傳次郎の各座が有名であるが近年相繼で廢業するに至り僅かに豊田氏が市村六之亟座を繼承し、錦玉吉川安五郎其他數家の存在によつて古昔の俤を止めてゐるの現狀である。

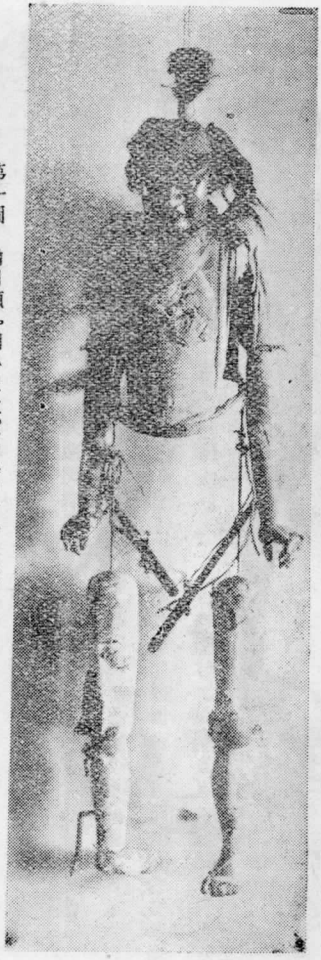
右の如く現在に於て衰微の風調を呈するに至つたのは此等多くの座が聯立して小地方に經濟的存在の使命を全うすべく世は余りに物質文明の進歩發達を來たしたが爲である。此の趨勢は或は當然の傾向かどうか分らないが古來の傳統的鄉土藝術の漸次衰微に向はんとするのは哀惜に堪へない。然し阿波地方の雰圍

氣は是か鞠育に相應する醱酵素を多分にもつて居るらしいのは稍人意を强くするものといはねばならぬ。

往年私は淡路に出張して是等を調査したのであるが三條の操師の大部は阿波讃岐伊豫又は九州方面に巡業中の者多く、近時廢業の吉田傳次郎家に付き聊か材料を得たので今左にこれを叙述しやうと思ふのである。

當時吉田氏は同村の操師不動安吉君をして殘存する人形について實演せしめられた、其操法は大阪文樂座等に於て行ふものと同一であるように思つた。

人形(木偶)を大別すれは胸胴手足の四大部に分れる。



第一圖　角目頭を用ひた立役の姿、市村三條人形操　胴の長サ33.5CM

第一圖は角目頭を用ひた立役の姿で豪壯なる男性の所作に使用する手の指を活動せしむる機關かあるのに注意。第二圖は其頭部の廓大圖である。下部の裁置によつて眉、眼球、口を動かすことか出來る。第三圖は

第二圖　角目頭（廓大）

娘顔で所謂女性の面であるこれ等に相當の扮飾を加へ衣裳を着用させるのである第四圖は即ち舞臺に於て實演の光景である。此の出し物は『奥州秀衡有髪の花婿』と云ふ題目で『秀衡館の段』である。四個の人形の背には夫々操師がゐて分担して演技に任ずる。寫眞前面の下部は一般の觀衆である。以て實演

の大概を察すべきである。

二、淡路操の沿革

さて進んで此地に於ける操の沿革について叙述せう。三條の操の沿革は極めて傳說の香高く　種の藝術的感興を覺えるのであるかこれと共に事實の眞相を把握することか可成むつかしい。劈頭先つ左の傳說に就て記して見よう。淡路名所圖會(第三)に

道薫家傳曰蛭兒神滄溟に漂ふこと多年にして和田の崎にて光神となる。時に漁人ありて邑君と號し百太夫と稱す。姓は藤原、名は正清といふ。海上に兒童あり貌神の如し託宣すらく我は蛭兒なり我宮殿なし汝海濱に假宮を立よと即ち西宮戎三郎殿これなり。こゝに道薫坊といふ者ありて神に給仕よく神意に合へり道薫身沒て後は神を慰むる者なき故に風浪起りて海陸ともに大に困しめり仍つて百太夫此事を朝廷に奏し勅をうけて道薫人形を造り舞せけれは神よろこび給ひて海陸ともに謐になれり夫より百太夫は國々を巡りて此術をもつて衆神を祭り神慮を慰むるを業とせり後に百太夫淡路國に止り此三條村に住し其業を傳え來るとなり。或云攝洲西の宮戎社の邊りに三條といへる地あり此なんもしや百太夫の住居せし舊地にやあらんか其舊名をもつて此淡路に來りても三條と號にならんかとも云。傳ていふ上古此地に道薫坊といへる翁ありて大神につかへ神慮を慰め奉るに木偶を造りて是をつかひ舞せしこそ是世に傀儡師といへる者の濫觴也俗に木偶をでくの坊といひ木偶をつかふ者をでく遣ひといふは此道君坊のよこ訛れるなりと云。

第三圖　娘頭　市村三條人形操　胴の長徑22.5CM

里老の傳說に往昔西宮に百太夫と言ふもの木偶を携へ淡路に來り此村の廡續堂に長く寄宿せり時に此村の木偶師菊太夫なるもの百太夫を伴ひ歸り留めける內菊太夫か娘に契りて懷胎す。然るに夫より幾程なくして百太夫は病歿す。其胤の男子は菊太夫か家を嗣で血脈および木偶師の業をも連續す。又百太夫か綸旨を珍藏せしかこれも菊太夫が手に渡りしとかや。後年に至り西の宮の傀儡と淡路の道薫坊と鬪爭の事ありて京都

の裁許に預りけるに命して云菊太夫は論旨を傳持すれば彌淡路の道薫坊を以て本朝の最上と定められたりと云。

斯の如き說話は今も同地操師の口述する所であるか操師の最盛期は享保元文の頃で當時座は四十余株を數へたのである。文政八年藤井彰の著はす所の『淡路學』によれば『今十八組殘れり十八座本と稱す』と記してゐるから享保年間よりは漸次減少せることを推察せられる。

十八座本の氏名並に現狀は左の通りである。

氏名	現在の狀態（早瀨和一氏の調査報告による）
上村日向椽	引田源之亟のこと德島市に現住
上村平太夫	五十余歲の老婆一人現存するも座はなし
喜右衛門	絕
金右衛門	絕
市村六之亟	岡本澤二郎氏現存せるも座はなし。技藝の方は豐田直太郎氏之を受く
吉川十平太	菊太夫の別家　絕
久太夫	絕
吉川安五郎	錦玉氏此技を傳ふ座絕
久保田勘右衛門	浪花伊右衛門氏あり座絕

小林六太夫　現存（但鮎原西村）
市村金四郎　絶
市村政之助　絶
吉田傳次郎　現存　近年廢業
髭福八太夫　福永國平現存せるも座は絶
磅示川彌三郎　絶
戎屋久右衛門　絶
福永幾太夫　絶
龍助　絶（因に菊太夫といふ者の跡は吉美氏これを繼げり）

次に史料通信叢誌第四編後帶によれば右の淡路學を拔抄して左の記文かある。

一書云京都に瀧野檢校淨瑠璃を作り四條東洞院彫金工某淡路の傀儡を誘ふて木偶を廻し三絃に合せたり後陽成帝禁廷に召されて叡覽あり。御感ありて木偶舞に受領を賜ひ引田淡路椽に任せらる。

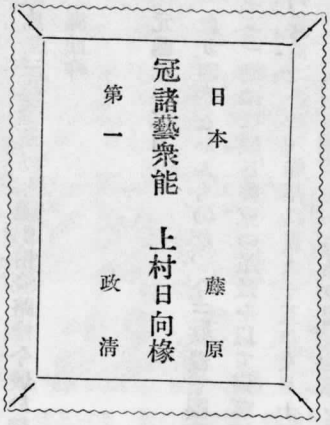
○三條村戎屋某名久右衛門曰往昔御綸旨燒失の時、當村の老叟両人上京し再賜の事を願ふ。宮庫にも御控とも見へかたきにや大に月日を重ね漸く今の一軸を下されしと云ふ今是を見るに一書の斜め迄は日本紀の文其儘也渾て論旨の式に違へり。奥書の坂上入道不審也綸旨に入道せし人は書入べからず。間に合に作り與へしなるべし。

右の眞書○綸旨を指すは村の寶庫に納置祭禮虫干の時ならでは是を出さず、余座の傀儡師各寫しの書を捧けて他國に出る也又同村大御堂廡續堂とも云の傍夷の社内に道薫坊及百太夫の像を安置す毎年正月六日百太夫の祭ありて右の眞書を像前に備へ座本各通夜なし拜禮の式ありと云近年浪華松好齋か著はせし樂屋圖繪に載る所は全く右の書によれりと見ゆ。圖繪中に狂歌二首を載す。

傀儡師足も淡路を胞衣にしてうみにし國や筑後越前　（鐵格子波丸）

首かけの人形廻しのほつたんは西の宮から始り始り　（天王寺蕪坊）

一芝居舞臺に掛る相傳の額



傀儡師等受領のこゝ中頃より止められしに源之亟に限りて日向掾と稱しかゝるいかめしき額を掛國々往來して障る事なきはいかさま故ある家なるべし

右に依て略其傳說に彩られたる沿革を知るへきである。吉田傳次郎氏所藏の綸旨寫といふものは檀紙に

書し禮紙を附してある。

磯馭盧島三條道薫坊相繼引田淡路椽今般於禁裏節會之社神樂之式奉棒依之從四位下被叙者也

天氣之處如件

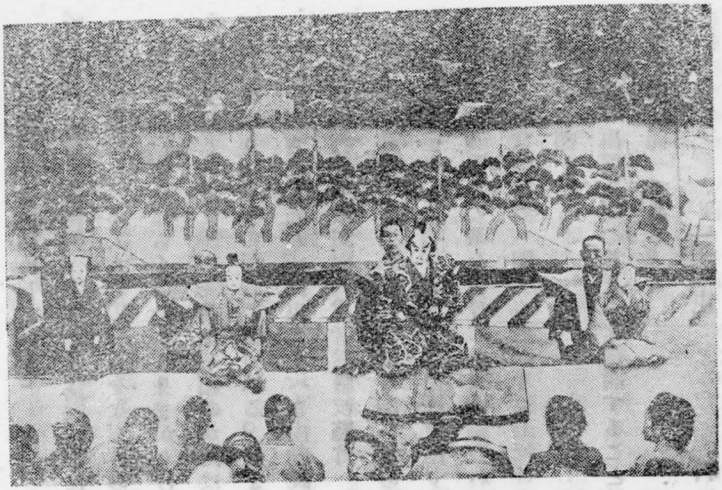
中院大納言執達

元龜元年二月　　花　　押

とある。此か原本といふものは、今三條農業圖書館にあるさうだが見なかつた。また吉田氏藏『道薫坊傳記』といふ一軸には頗る齒玄の筆致を以て道薫坊の傳記を記してゐる。其內容は前記淡路名所圖會の說く所と同巧異曲である。卷尾に寬永十五年文月十二日坂上入道とある。綸旨の年代の元龜なると此の由來書の記年か寬永十五年であるとは操の起原沿革を論するに主要なる左券ではあるか史料討究の見地から見て確實なものでないことは明かであるから多くを言はない。併しなから其起原に就いて考察するに大凡慶長元和位までは溯原し得べきか如くである。

阿波の藩主蜂須賀氏か封を德島に受けたのは天正十三年で家政(蓬庵)の時世であつた。其子至鎭の時元和三年淡路を併せ領した。其子忠英に亘る三代の間、人形操師を保護したる事實は今も世に傳ふる所であるがこれも操の年代を察する　つの據とすることが出來るであろう。猶淡路における百太夫に關する傳說については別つて一つの系統とすべく即ちそれを揭記して代表たらしめよう。

音曲道智論に



第四圖　人形操座　奥洲秀衡有髮の花婿　秀衡館の段　市村三條ニテ所演

傳に曰く攝州西宮惠比須大神宮の神主に森丹後といふものあり。同社家に森兼太夫といふもの両家爭論の事ありしに公事の兼太夫負になりて男子一人同所へ養子に遣はし其身は同國尼崎稱念寺といふに便り渡世の爲に工夫のうへ古き經箱をしつらひ少き人形を拵へ自作の文句に平家に似よりし節をつけ人形を舞しけり。町在ともに見物賞しけり夫より京都に登り登世せしに大内炎上の節抵板築土のひまより此箱芝居を若宮樣御覽覽あり堂上堂下御見物なされいろ〳〵御ほうびをいたゞき其上日本諸藝(操座宗匠)諸能冠　勅免

上村兼太夫　(山本とも)

淡路國三原郡三條村住人　當時元太夫とよぶ

後受領して、上村日向少掾藤原百太夫淡州產所村に所緣あつて立越困窮の百姓へ人形を拵おしへ城主御免にて四十八座操取立これあり。國々へ銘々所持の口宣は右の寫しあり西光寺といふに納あるゆへ右芝居にすむ

太夫三絃西光寺へ納めしといふ。

今一說は　淡路座秘書（南水漫遊拾遺所引）に

西宮に道薫といふ人大神の御心をなぐさめけると。是より海上風波靜かにして獵舟多くの魚を得る事久し。時に道薫しばらくいたみて身まかりければまた風起り波高くして猶更獵もなかりしかば百太夫といふ人人形を作りて神の御前なる箱のかたはらに身をひそめ人形を以て、我は道薫なり尊の御機嫌を窺はんため來りたりとて神心を慰めける。是よりまた波風靜まりて獵もありけるとなり。其後時の帝此の事を聞し召され禁廷の政に出勤すべき由勅諚有ける故百太夫都に登りて此儀をつとむ。是によつて

大日本者神國故以慰神慮者爲諸伎藝首

かくの如き號を下され諸國諸社の神いさめの事勅免ありしより胸に箱をかけ人形を以て神をいさめしなり。是傀儡師の始也。百太夫は諸國を巡りて淡州三原郡三條村といふ所にて身まかりけるに何某の四人百太夫に傀儡師の業を習ひて此後傀儡のわざをなせり。是淡路座操の權輿なり。右淡路座の操凡四十余座あり。當時諸國へ聞えて名高きは上村日向椽を最上とす。往來帶刀御免にして芝居の表に大日本諸藝首といふ額を懸る。

右の二說の出所を究め其正否を檢討することは一寸難かしい。されど何れも其起原の西宮から發せることを說く所は同　である。

市村役場所藏の『文化八年三原郡三條村棟付人數御改帳』を檢するに左の記事を見ることが出來る。

御藏道薫坊廻百姓

一壹家　日向　歳二十五

此者先祖源之亟義延寶元丑年棟付御帳左書ニ

棒　役　三　本

御代々御赦免被爲成御書付御座候右之内菊太夫佐太夫は源之亟役者に而御座候得ども佐太夫菊太夫跡目慥成者無御座候に付只今は源之亟座に居申役者之内に而引來申旨付上肩書無御座代々道薫坊廻仕居申此度棟付御取調に付右有姿申上候所彼是御詮義の上延寶度棟付御帳に右の通相記有之儀に候得は右御引合を以此度の儀も夫役三人御引被下且肩書の儀は道薫坊廻百姓と附上候樣被仰付候

壹人　日向妻つち　同貳拾五

牛　一　疋

また

御藏道薫坊廻百姓

小家　日向伯父　吉之助　歳五拾八

此者前書日向祖父政七事、源之亟惣領にて御座候處親跡の儀は勝手を以、弟清太郎事源之亟に相讓寛政七卯年別家仕、道薫坊廻仕居申、此度棟付御取調に付本家同斷道薫坊百姓と附上候樣仰付候

壹人　吉之助妻きん　同五拾貳
壹人　同人養子清藏　同貳拾八

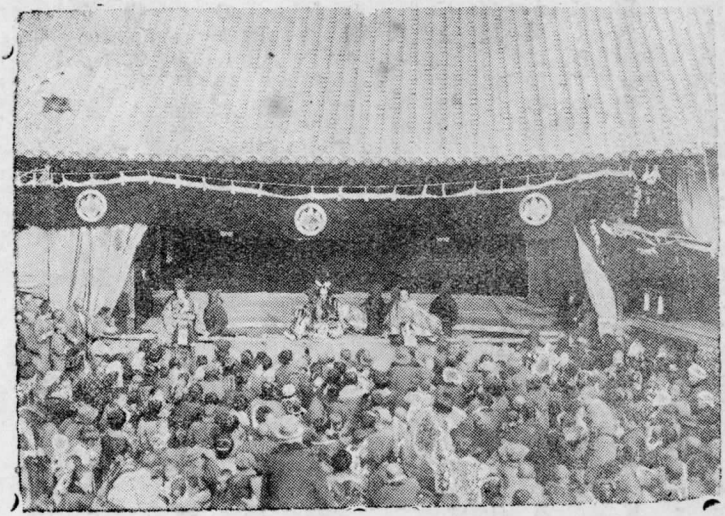
これらは誠に重要なる史料といふべきである。人形操を爲すことを『道薫坊は廻はし仕居申』と唱へてゐるのは頗る興味がある。而して此の御改帳を檢して文化八年に於て本家たる上村日向(源之亟)に拾七軒の分家(小家)かあることか明白となつた。これらは以て當時上村氏か如何に絶對の權力と威勢とを支持して斯道に臨んでゐたかを考察する上に有力な資料であるといふべきである。

猶此帳を精細に檢索すれば當年に於ける從事者の總數其他幾多の事柄をも窺ひ知ることか出來ると思ふ。

三條の氏神は八幡神社(大御堂又は廐積堂といふ)で其境内社に事代主神社かある。御木像四基を安置し即ち鯛を抱へたる戎神の外羽織姿の道薫坊座像及烏帽子狩衣の百太夫と其配偶らしき女體(又秋葉神社とも申す)の四柱である。何れも德川期の製作と拜せられる。三田村鳶魚氏の記述によれは百太夫御木像の臺坐には

奉彩色四尊　再建寄附　當村中三ケ村座本中
細工人　當村住大谷松次藤一將
維時文政二卯五月吉日

と記されてあると。即ち文政二年五月これを修補したことかあつたことを知られる。三條の產土神に百太夫及道薫坊の合紀されたのは此技藝の祖神として尊敬されたことを物語るもので甚だ意義深いことゝせね



第五圖　淡路岩屋の操人形

ばならぬ。又境内本殿の前には

蛭子大神宮

天明五年乙巳十一月吉日　　村中

願主　源之亟　同座中

の灯籠があり維新後も明治五年引田日向掾座中献上の掛額、明治一十三年吉田傳次郎座中修繕奉納の鳥居、明治三十七年中村太夫座中奉納の掛額、明治三十七年隱居上村源之亟座中奉納の額等かある。以て蛭子大神又百太夫社等に致したる操座中の崇敬史實を察すべきである。

四、三條以外の淡路操

津名郡中田村には片山氏を稱する操師か多く住んでゐる。三條の支流たることを肯定してゐるか其起原は約二百年の昔、利平なる者上村源之亟座から出で上。の源の字を襲ひ上野源左衛門といふ操座を組織

し明治三十七八年の交これを淡路源之亟と改稱したといふ。人形は德島から供給し各地に巡業をする。其方面は兵庫、和歌山、大阪、岡山、京都、香川、德島、愛媛各府縣並に九州方面各地である。（中田村役場回答）

津名郡鮎原村には小林、若竹、桐竹、上村、濱田の諸氏等の操師あり。座名は小林六太夫といふ。文政の十八座本の後なることが察せられる。

百太夫道薫坊を祭祀し正五九月に祭事を行ふ。これも各地を巡行する其方面は紀伊、和泉、河內、伊勢播磨、美作、但馬、四國、九州地方等である。初め源之亟より分れ日本第一諸藝能司小林六太夫藤原正淸の稱呼を許されたといふ。（鮎原村役場回答）

六太夫座中は安政三年二月に西宮戎神社に於て操を催したことかあり同社に扁額を奉納してゐる。それによれば桐竹、若竹、花房、吉田等の人形座かあり細工師に鳴洲の名か署せられてゐる。また淡路北端の岩屋町には每年舊二月十五日に氏神の境內で大仕掛の操を行ふ恒例となつて居り、或は小林六太夫一座とか又は他の座の者か雇はれてこゝに來るのである。岩屋の町民は春の一日を辨當持參でのどやかに操見物にくらすのであつて此光景は德川時代の民衆の同種の行樂を今に傳へてゐるものとして眺められると思ふ寫眞第五圖は其光景であり第六圖の人形の方は其時の大閣記の明智十次郎である。

五、西宮の百太夫及操

西宮の傀儡師及操に關しても其起原は詳かでないのは頗る遺憾であるか其由來は中古に溯原することか

出來るであろう。西宮市西宮神社の末社に百太夫社がある。祭神は道君（道薫坊又は百太夫とも稱す）である。

此社は元本社境外北方の小林字産所にありしを天保年間今の位置即ち境内本殿の西方に移したものである古く記錄に見ゆるは　本伊呂波字類抄廣田社の條に

百　太　夫　　文　　珠

とあるを初見する。降りて傳說の典據ともなるべき記錄には『名所西宮案内者』に（亭保前後の著か）

境内を北へはなれて半町はかりに祠あり。磐楠船の神代氏浦にすめる翁道君と名づく。大神の三歳脚立給はぬと申すころにや人形雛形を作り慰め育て奉りし翁とて今も生れ子の百日に當る日は皆此神前に連れ詣で名を定め壽をいのれる也。そなへものには五つ貫の團子也。是も神代より傳へ來れる習はしと見えたり。世の諺に西宮の人形廻し亦人形を道薫坊と申すも此神のいはれにや今は生れ子の壽をいのれるよりして百太夫の社と申す。

また攝陽奇觀卷一に

山　　上　　村

西宮の北に山上村といふあり此處に百太夫の末孫笠井氏なるもの家數六軒にして枝葉數家に分れ共株は六軒の外に增ることなし往古は西宮の民家の婦女此地へ來りて平産をなす所ゆへ産所と唱へしか今は其事も絶て地名も山上と文字を改む百太夫の宅へ産札子を參詣させるも産所の忌明のならひ歟。平人笠井

氏を厭ひて緣組をなさずとぞ。

また『攝陽落穗集』卷三に

西宮百太夫の事　西の宮惠比須の北に小宮あり。內に納る像は三歲計なる小兒の坐したる人形なり。是神にあらず。每年正月白粉をもつて厚さ三四分ばかり顏にぬりおくなり。此邊に其年生れたる小兒宮參りの時此人形の顏を撫でゝその白粉を小兒の顏にぬるなり。是ほうそうの惡病を除くといふ。又曰く是日本人形の初めなりとて此人形あるを以て西宮に笠井氏といふ人形芝居の株あり。浪華人形芝居の株も此所より得たるか。淨瑠璃かたるもの皆百太夫と名を付るは此人形百太夫と稱する其由緣なるべし。

また喜多村信節の『筠證錄』に

百太夫はおのれ文化八年の春、津の國西宮に詣でしに御本社に向ひて左のかた半町余り奧に小祠ありて扉開きたり。その內にいと古き雛のやうなる人形あり。冠衣にて坐する形、面は新しき紅白粉をきたなげに塗たり。これ百太夫の神像なり。

以上の說話記事を綜合敷衍するに傀儡師の祖先なる百太夫と稱する者古く此の浦に住みて人形の技藝を開始し蛭兒大神に因める事とも又は種々の技藝を演じ神前にても俳優を仕へ奉り自ら妙所を得たれば世間に賞讃せられ隨ひて此技を學ぶ人か多くなり相傳へ相敎へて後世にも其開祖を慕ふ者多きを加へるにつれ遂に一祠を建てゝ祀るに至つたものと考へられる。現今でも土地の人は皆斯く信じてゐるのである。

攝津名所圖會にも『傀儡師は末社百太夫を祖とす』とあるが如く人形遣ひの祖神と崇められるのは頗る

由緒ある事に屬するので今神主家日記によつて其消長を試みに述べて見やう。元祿の頃には産所村の戸數は三四十戸もあつて皆人形廻しを營み正德年間に笠井治兵衛がある（落穗集所謂笠井氏か）享保五年三月二十七日には尼崎領主松平遠江守忠喬の姫君の操芝居見物があり享保八年十月十九日には産所村の八郎兵衛といふ傀儡師が神主に對し同村困窮の次第を訴へ爾今境内にて人形あやつり興行を許可せられんことを請ひし旨が見えてゐる。尋で享保九年四月二日には再び尼崎領主姫君の芝居見物を記し、享保十二年には同村に座本四郎三、同年寄八郎兵衛、上るり太夫茂太夫なとかあつて廣田神社遷宮にあたり操人形の一段切追出し興行の許可を得るため當社の神主吉井宮内に一札を納めてゐる。其文即ち左の如くである。

一　札　之　事

今度廣田御遷宮には今月十七日より來月朔日迄私共御受合少々人形を入、一段切追出し仕候に付御役所より被仰出候常々被仰付御法度之趣相守可申候、勿論見物人其外ミも慮外成儀仕間敷候、尚又本人も大阪者二三人も相交り申に付當社御法度の儀屹度相守候樣に可申渡旨奉畏候万一不届之儀仕候はゞ私共如何樣共可被仰付右之趣從御役所被仰付候に付私共一札被仰付差上申候爲後日仍如件

享保十二年未三月十六日

産所村座本　四　郎　三㊞
同　年寄　八　郎　兵　衛㊞
上るり太夫　茂　太　夫㊞

吉井宮内様

然るに夫より十二三年を經たる寛保元年十一月五日の條に『產所村之義近年退轉同前に困窮云々』とあるも猶同月十七日の神事の日に同村の者稽古淨瑠璃をしたことか見えてゐる。此時代右部落は大體衰微に赴けるものと察すべきであるか猶殘留せる者にあつては文化十三年三月廿五六日に產所村の吉次郎、吉田小六の寄進に係はる人形芝居催され上り高を百太夫社に納めた記事か見受けられる。猶百太夫社殿の記事としては天和四年二月調廣田西宮本社末社並境內間數付の中にも『百太夫殿』と載せられ正德四年八月十六日夜修繕相濟み遷宮を行ふた由も見える。文化八年十一月には大阪の芝居人形屋じようるり語りなど百太夫社の講を組み加盟者には豐竹卷太夫、竹本染太夫外七名、人形方頭取芳澤福右衛門、人形方吉田小六其他の名か見

第六圖　太閤記の明智十次郎（岩屋）

ゐる。是を古老の言に徵するに嘉永の頃には全く廢絶して一戸をも留めずなり明治に入つて後は町内今在家に嘗て操座たりし小屋を移し(後は普通の劇場となつた)附近に役者の子孫なども住んだと云ふ。產所村は所謂さがりで良民より幾分賤視せられたといふ。現今全く跡方を絕つた。

溯つて元祿以前に於ける西宮傀儡師の狀況を記したるものを見るに御湯殿上日記の文祿四年二月廿三日の條に

菊亭よりめいじんのゑびすかき參りて小御所にてまわさらるる。七番しまゐらする、万里小路よりまゐりたるにも劣り候はぬめいじん之事候おもしろく思召す三百疋下さるゝ。

とあり。平時慶鄕記慶長十九年九月廿一日の條に

雨天。院參飯後、阿彌陀胸切と云曲を夷舁の類の者推參として於御庭假の幕等を引廻して有曲、奇意のこと也。

とある。『夷舁の類』とは即ち西宮の產所から出た傀儡子の類である此等の文によつて當時人形操及淨瑠璃か盛に行はれ遂に禁中にまでも出入して新上東門院(後陽成天皇御母)其他の叡覽に入つたのであることか分る、西宮傀儡師の爲天下に誇るべきものである。

雁州府志に

淨瑠璃太夫、文祿年中及慶長、監物某並次郎兵衛某、招攝津西宮傀儡師相共經營元監物並次郎兵衛淨瑠璃、西宮人舞人形

人倫訓蒙圖彙に

津の國西宮より出るゆへに夷舞し。と號す。西宮のさしむかひ海をへだて、淡路島にも此流れ有り。昔はゑびすの鯛をつり給ひし處を仕形にして春の始に出けるとなり。今は能のまね踊のまね色々をつくす。浮沈あり音聲一風ありてかくれなし。世に傀儡師といふはこれなり。

傀儡師に關する文獻これを求むれば夥しき證徵を得へきもあまりに煩はしいから凡てこれを省略する。

傀儡師操る所の人形操の種類は島文治郎博士の說によれは左の四種に分つを得る

1、木偶の內部に機關を具へて動作せしむるもの

2、簡單なる人形を片手に携へて一三の絲を以て手首をつり人形遣ひは人形を持ち手と他の手とにて之を操り之によつて所作をなさしむるもの

3、右のものより追々進步して人形の首、眉、口、手等を動かし又微細なる表象をなさしむるもの

4、上方から細糸を釣つて手足にかけ絲を引いて働かすもの

の四つとすべきである、『淡路名所圖繪』に載する所は2に當り攝津名所圖繪の繪圖も同じく2に當るもので人形を廻付した後山猫樣のものを箱中から出して兒童を喜ばしめるもの所謂『山猫まわし』と稱せられるものである。

聲曲類纂に載せてあるものは3に屬する操の圖樣で普通の人形操芝居である。何れも舞臺內部から描出したものであるか以て其一般を察すべきである。

操の技は右の如く已に早く慶長の頃京に行はれ、江戸に於ても正保頃盛に上下の歡迎を受けた。黒川道祐か雁州府志に記する所は京都四條河原に於ける操座の記である。林羅山か正保頃の實見の記は羅山文集卷七十にこれを記してゐる。以て東西両京に於ける盛行の度合をも察すべく以て此間西宮の傀儡師か活動をも想像するに難くないであろうと思ふ。

六、結　語

以上述べた所を綜括するに、淡路操の一般鄕人に認めらるゝに至つたのはこれを天正以降慶長の間に求むるを得べきものゝ如くである。爾後幾多の變遷は幾多の發展を生じ發展は更に進化を產むに至つたことは論を俟たない。西宮に住居した傀儡子の徒か木人を舞はしめし過渡の時代から大江匡房說く所の『傀儡子記』『遊女記』の趣を經て此徒百太夫を尊信することを形容して『男の愛祈る百太夫』と謠はるゝに至つた時、操の技も稍觀衆の興趣をそゝるような時節か到來したと思はれ更に慶長に及んで昨の鄙藝、今は花の都に觀客を集め鄕土藝術の粹として臺覽の光榮をさへ辱くするに至つたものであると察せられる。

此の順次的發達の跡は遂に西宮の技藝淡路に傳はると稱せらるゝに至つた。蓋し又當然の推定であると思ふ。然りと雖其相關關係に至つてはこれを明瞭に證する文獻今日に及んでも世に出づるに至らないのは遺憾である。

西宮の操全く跡を絕てる今日。其殘蘖の淡路に殘存するのは宜しく保存を加ふへきものと考へる。〔完〕

淨瑠璃の間の物

三田村鳶魚

淨瑠璃の間の物は何故か餘り顧みられてゐない、『聲曲類纂』の『これより前の淨瑠璃は皆短く、間の物にのろま人形の道化、或はからくりありしが、國姓爺以後此事なし』で、手もなく片附けられて了ふ。是で一概に淨瑠璃の間のものがなくなつたと云はれやうか、此本文で見ても竹本座だけの事なのが知れる決して正德五年十二月『國姓爺合戰』の興行限り、總べての操座が間の物を廢したとは請取れぬ、それから追々に諸座が間の物を廢したのではあらうが、『國姓爺合戰』を限りに打揃つて間の物を廢したのでない

ことは、證據を尋ねる迄もなく、『攝陽奇觀』の享保三年の處に

今年道頓堀大坂太左衛門芝居にて、淨るり間之狂言に物興似興行

名代　淨るり太夫　木屋七太夫

一淨　る　り　都太夫一中

ワ　キ　同　三中

ワ　キ　虎屋喜元

一三　味　線　難波利三

一間の物眞似　守口屋喜右衛門

一同　板屋喜右衛門

一同　板屋彦右衛門

一同　よし川三郎兵衛

一淨　る　り　木屋七太夫

一ワ　キ　表具屋和三郎

一三　味　村井吉左衛門

とあり『尾陽戲場事始』にも

享保七壬寅古渡りにて操芝居興行

双子隅田川　大友王子玉座靴

此の砌迄一段々々に幕は引ども、太皷はうたずして、幕引ながら今口上言の出る如く、幕の中よりそうまといふものを出して遣ひし也、其文句は今大津屋が傳こて、もてはやしぬる地獄廻ぐり舟に似たるもの也、

とある、木屋七太夫は都越後掾の門下、相摸掾は山本角太夫の受領、此の両者は共に京都の操座なのだが、享保になつても間の物を棄てずにゐる、探したなら斯うしたなら斯うした事例は出て來さうに思ふ。

淨瑠璃の間の物は何時から始つたのか知れない、又た何時廢棄したのか慥でない、其の廢棄が『聲曲類纂』にある通り、淨瑠璃の文段が長くなつて、間の物を演ずる暇がなくなつたとすれば、文段が短かゝつた爲に間の物が生れ出たものと解せられる、果して左樣であるか否かこれを吟味するには間の物が如何に行はれてゐるのかゞ知りたい、けれども從來間の物などは一向に顧慮されてゐないから、その總べてが閑却されてゐる、暫く誰も知つた資料を並べれば、

我淨瑠璃のもとひをたづぬるに、奥州矢はぎの長者が娘淨瑠璃御前といひし、牛若君のおもひものゝ事を作り、十一段にわけ、今は知仁勇の三を第　の主意とせり、利欲を欲としりて、ゆへなき謀反をたくまず、惡をあくとしりて善に歸するは知の德なり、たゝかひを好まずして、人の無事ならん事をおもふは仁の德なり、主君の敵となりて、邪道暴行なるをば、一命を君にゆだね、かたきを誅罰するは勇なり

此三の心をふまへてかたる事なり、淨瑠璃の間々の狂言は、人の愚癡をいましめ、利發をたつとぶ敎なり、されば狂言はこれ敎言といふ音義あり(慶安元年『よだれかけ』)

大體に淨瑠璃を以て諷諫の敎だとする主張であつて、差當り是は詮議の外だが、それと引比べて間の狂言は道化人形と見へる、此の前文にも『祖褐程のおどけ人形』又は『奴にんぎやうの放辟邪侈』ともあれば、旁々以て能と狂言との樣子に請取れる、『天和笑萎集』にも堺町の淨瑠璃說經を概說する中に、

人形のつかいやう、やあら目出度や、今日の御祝儀いはふ三番叟、御代は千年ところはんじやう、おきなわたしの秘事口傳、それ過ぎ是おはつて語出せる、さても其後、大將臣下のいぎをたゞしく、殿中の式方、國家のせいひつのひやうじやう、軍のうへには、魚鱗鶴翼武者ぞなへ、ちかづきせむる矢あはせ太刀合せ、大手からめて時の大將、馬上につゝ立けみよう實名なのりことば、勇士のはたらき、がうりきの手がら、くもでかくなは十文字、東西南北かけ引の達者、まづかうひたい、左右の小手、てへんのすき間、わたがみのはづれ、しやうぎだをしに拂切、あるひはきこふ弓勢、すき間かぞへぬ手だれ者、矢づほをこのんで、引手あまたにいとほすたゞ中、やぐらおとし、もんやぶり、さかも木、らんぐい、ひらく道よけ、先がけぬけかけ、一きうちの一大事、組打の秘曲、亦は道行能掛り、きいたか〳〵の間狂言、

是も眞面目なものでないのは知れる、此の前文に淨瑠璃說經の外題は澤山書いてあるのに、間狂言の外題は一つも書いてない『牟藝古雅志』にある延寶、天和の頃の操座の名代看板を見ると、土佐に與太良、ふく

太良、若女、彌藏、丹波にけんさい、とろ平、やつこ、彌藏、薩摩に與九郎、太良ま、助惣、石見にどんつう、さん七、ちや平等の道化人形と見るべき名代がある、間狂言にも外題はある筈だ、しかし能の狂言でも太郎冠者が、お馴染になつて了ふやうに、道化の場合は例の野呂間のみならず、其の人形の名に托して行はれたらしい。

のろまは江戸和泉太夫芝居に野良松勘兵衛といふもの頭ひらたく色青黑きいやしげなる人形をつかふ、これをのろま人形と云、野良松の略語なり、又縑齋左兵衛はかしこき人形をつかひ、相共に賢愚の體を狂言せじなり、それより鈍きものをのろまといへり、其後そろま、むきまなごいふもの出來たり。(『世事談』)

縑齋左兵衛、縑齋は人形の名で、左兵衛は遣ひ手の名だ、野呂松の名は『牟藝古雅志』の名代に見へないがけんさいの方は薩摩と丹波とに見へる、遣ひ手は左兵衛に限らぬ、人形の名で往くのだから、誰でも利口らしい處を遣へば縑齋つかひの上手なのだ、

野呂松氏を祖として、京大坂の操芝居に、鹿呂間そろ七麥間なご名を付、道外たる詞色なし、淨るりの段物の間の狂言をなしたり、近來はかようなることは捨たり、知れる人も稀になりたり(『竹豊故事』)

斯ういつてもある、間に出る道化人形が、野呂間より以前になかつたのでない、思ふに幾分か趣向立だつたものになつたから、自然他の道化人形と違ひもすれば、其の特徴の青黑いかしらと共に、格別な興味を惹き、盛に喝采もされ道化人形の開山にもなれたのであらう、

手柄岡持の『後は昔物語』に土佐ふしの昔話を書いて『淨瑠璃の間々にあひの狂言といふあり、是近來とり出たるのろま也』のろま米平なぞ人形の名にて、のろまに治兵衛といふ男の人形、米平は甚右衛門といふ男の人形也とぞ』とある、のろま、米平は人形の名、治兵衛、甚右衛門は遣ひ手の名だ、此の両人は其の人形と共に、古山師重畫の『役者繪盡』(刊行不詳)の内にある、是れものろま、米平がカシラの名稱であるのを證明するものだ、又は『近來より出たるのろま』といふのは『牟藝古雅志』の名代看板や『後は昔物語』の昔話で傳へた古い野呂間人形と云ひ別けるためで、何時からと明白に云へないが、享和三年の自序ある『後は昔物語』が、近來といふ程合に起つた新しい野呂間があつた、一度衰へたのを安永、天明の際に再興したのだ、總計では二百番以上もあつたといふが、『甲子夜話』に四十六番の外題が出てゐる、其の大概は能の狂言から取つたものらしい、昔の野呂間は趣向立つたといつても、これ程に出來てゐたと思はれぬ、勿論古の野呂間の趣向を書いた物もない。

淨瑠璃の間の物は道化人形に限つた事はない、色々と興味のまゝに採擇された、それは諸座とも同樣であつたが、元祿度の土佐座は間の物に野呂間を專用したらしい、專用する程であつても、外題が傳はらぬ道化でない間ならば外題が知れる、尾濱士某が名古屋の話を書いたものゝ中に

二月十八日彼岸に入、晴天、余眞福寺へ行、操りおさな曾我＝又伊豆日記共＝太夫越川權太夫、札錢十六文、三味線權九郎、間狂言牛若千人切、大森彦七物語、伽羅物おどり、『京にはやる女郎衆の賣物ころりん〳〵こんころりんのこの化粧道具はめすまいか、浮世山崎白胡麻黑胡麻しらしぼりや、同本の

實柏の實、揚油丁子香龍腦兵衛鄕伽羅の油、鬢に取ては上鬢、下鬢、天神鬢、備中鬢にもらず、お女郎衆の手具足二端三端四端五端はげに指櫛かうがい、いよこまくらなどへ、京べに京針京白粉めすまいか』

（『鵡鸚籠中記』元祿五年）

淨瑠璃が五段、間の物が三幕、其の中の一番が踊で、其の唱歌が書いてある。

九月廿一日、今日江戸にて操あり市飼の御屋敷淨瑠璃鏈倉管頭九代記、丹波少掾和泉太夫、初段鹿島の新市＝附たり＝米藏めつたさゐもん、鹿島彌勒おどり、二段紫式部、四季の曲太鼓、うぐひすの絲、三段五尺手拭、中染のゐん奴、物眞似おどり、お好咸陽宮羽衣の段、筋分の鬼、比沙門の利生、四段二人男二人女、御好宇治川先陣物語、五段出世のはちの水、おやま太夫おどり、六段祝言高砂、千秋萬歲

（同前）

是は江戸の尾州侯上屋敷での催しだが、我等は丹波の正本を見てゐない、まして お好みが二番もある、間の物に祭文もあれば踊もある、一段の淨瑠璃は二つ或は三つの間の物があつたやうに見へる、斯うなつては我等などに明快な分別が附かうとは思はれぬ、只だ間の物が多種多樣でであることを知るに止まる。

淨瑠璃の間の物は深いお馴染になつてゐた、『御成記』（綱吉將軍が牧野備後守成貞邸（往かれた記錄）にも、

貞享五年四月廿五日

公方樣（綱吉）三丸樣（お傳の方小屋氏）七ツ半還御爲御慰土佐太夫御呼、操被仰付、淨瑠璃尾州熟田本

地一段づゝ狂言三番づゝ、其後富士まき狩三段有之。

此の狂言は間の物の道化人形であらう、又た、

元祿四年五月二十二日

公方樣、御臺樣(夫人鷹司氏)七ツ半還御……操被仰付、土佐太夫畢而手前之踊被仰付御臺樣よりおどりの者え銀子三十枚被下之。

是は牧野家の小姓が踊つたのであらうが、間の物のない淨瑠璃のなかつたのが知れやう、更に喫緊なのは『色縮緬百人後家』(享保三年刊)に、筏屋といふ商家へ呼んでの坐敷淨瑠璃、素語らしいのにも拘はらず、

淨瑠璃の用明天皇の鐘入、間のものには歌ざいもん、京のおしゆん傳兵衛、しやくぢやう、小弓、しやみせん、あわれにおもしろく……

とあるのでも知れやう、何故に斯く間の物がお馴染になつたらう、是は各座が必至と慣行したからである。自體間の物は淨瑠璃の長い短いなど、いふ邊から、必要を來したものではあるまい、實に局面轉換のために發生したものらしい、故に變化の乏しいカラクリの方では、淨瑠璃以上に間の物が行はれ、又達發もしてゐる、或はどちらが間の物か分らない場合もあり、或は連鎖興行とも見へる程であつた『野傾友三味線』(寶永五年版)が木曾の秋祭を叙して、

扨はやるべき芝居には、相撲か、あやつりか、歌舞伎かと、とり〳〵に沙汰する中に、いつても公平

人形の出る淨瑠璃ならではといふ、これはめづらしげなし、歌舞伎よろしかるべしと、論談一定したがたき處に、物なれたる莊屋、竹田か大からくりに、間々に子供の仕形舞を入、道行には淨瑠璃賴光山入、酒呑童子も朝比奈もあれば、両方相兼たるに一座同心して、九月節句よりはしまりじや〳〵……ある日からくりの間に、梅屋澁大踊を子供立そろひてはじめけり最中に、堅木村の者二三十人、一度にはらりと立さはぎ木戸の札賣につかみつき、錢をかえせと喧嘩になり、仔細は今踊る子供は常の人間なり、田舍者と阿房にして、人形と嘘をつきたり、札錢をかへさずば芝居を崩せと、口論するを肝煎中間よりあつかひ、なるほどこれは、みやこ方にては、歌舞伎といふは舞事なりと、漸と合點させる、

後々はカラクリ座は子供役者を抱へるのが定式にもなつた。芝居にしても今日に於いては仔細に知れないけいけども多種多樣な間の物をムザと使用してゐないだらう、淨瑠璃と參照して局面轉換の効果を考へたに相違ない人形は突込であり、道具も見られない時分の淨瑠璃、まして六段だつた頃は、如何にもお察し申される、五段になつて正本組織が全く變章され、各段の布置も極つた、

『豐竹故事』は五段が能の番組を移したものといひ、脇能、修羅、葛事、脇所作、祝言も、それ〳〵配當したいといふ、此の新組織は寛文に播磨掾が始めて、加賀掾が集成したのだが、偶々二三の加賀掾の正本を曾見した處では、五ツの配當は慥に遵用されてゐる、具には、播磨の正本から當流まで詮議しなければならない、處で能の番組にすれば、神男女狂鬼といふ順序で、祝言は五番の外になる、それに能には脇所

作といふのはない、しかし能移しといつても慥なのは番數だけで、配當布置は必ずしも率由したか否か脇所作はワキが働いて見せる場だ、ワキが其處だけのシテだ、能の狂を斯う扱つたのは、俳諧の手段らしく感ぜられてならぬ、切の祝言も能の附祝言といふのと見比らべれば如何にも淨瑠璃の末段の終に、お極りで若干の目出度言葉が書いてある、切能の後で祝言小謠、大概は例の『千秋樂には』を謠ふのと違はない、五段淨瑠璃は斯く一定の布置結構があつて、我儘勝手が働けないから自由自在でもないが、窮屈を感ぜしめる程でもない、しかし大體が膠着しないとも云はれぬ、紋切形になる氣支もある、只だ六段に比較して當然の變化がある、布置結構に負着しないよりも遙に立勝つて居やう、六段組織は布置結構について大なる缺陷を持つてゐた、その調節のために、間の物は大切な役目を勤めた、五段組織になつて面目を一新したが、一定の布置結構の下にあるので見れば、上手な俳諧に月花の定坐が、窮屈なものにならずに、却て適當な風情風姿を見せるやうにばかりは往かない、未だ俄に間の物を排除して、其の作用を無用とするに至らぬ。

卒先して間の物を棄てた竹本座の如きは、寶永二年竹田出雲が筑後掾に代つて座元となり、『晝夜用心記』が『竹本筑後が淨瑠璃に、竹田近江が細工を、一芝居に仕組みければ、柳に櫻咲き、梅が香誘ふ』といふ有樣、カラクリ侵入の効果も著しく、又た其の年から出語り出遣ひも始まつたいふ、特に注意すべきは、世話物を切へ出すことが、此の頃頻々として行はれてゐる、世話物は別箇の型式で發生し發達して三段組織になつた、時代物にしても『用明天皇職人鑑』以後、近松の筆にも變化がある、近松の研究につい

ては、諸家の發表されたものが乏しくない、しかし此の邊の研究については未だ聞く所のないのを遺憾とする、以來五段組織と三段組織とが交雜して、淨瑠璃組織が脫體するのであるが、それに先立つて間の物撤廢が問題になる、それを問題にしないのは、淨瑠璃組織の研究が未着手であるためであるまいか。

竹本座は間の物撤廢の理由を淨瑠璃が長くなつたことしたとしても、それを其の通りに請取るべきや否、寬永二年以來の新設備に依據し、演出時間の不足もあるので撤廢したのでなからうか『國姓爺合戰』『雪女五枚羽子板』『曾我會稽山』が近松の三傑作と云はれる、それを『用明天皇職人鑑』カラクリ侵入に點頭して書いたものから仕切つて、三名作を中心に吟味して見たい、竹田出雲が座元となつて十一年目に『國姓爺合戰』を出した、此の間に何程道具が進步發達したらう、出雲の才覺を又た一々に近松が飲込んで仕立てなければならない、なか〳〵趣向趣向で勾欄は見目苦しい程忙しい、見物の目先は何時も替つて往く、アツと感心するやら、新しいので目醒しくもあるやら、それを好んで時間を惜んだのであらう、間の物の時間を淨瑠璃の方で遺つて了つても、存分に淨瑠璃だけで仕盡せる、間の物の効果に待たずとも差支ないと考へた、さうなら間の物の効果を淨瑠璃人形道具等の綜合が包有する譯である、尠くとも竹本座の新施設は、さういふ自信を持つたと見へる、けれども元文以後に於て、間の物の効果であつた道化を淨瑠璃の上に認め、踊を人形の別段な動きで見せるなど、明白に自足自給の形跡を現し、其の包擁する所を暴露した、我等は思ふ、正德の間の物撤廢は、新しい新しいに紛れてゐる見物の隙に乘じたので、それに目馴れて來たなれば、目先の變化が頻に催足され、久しからずして又た間の物が必要になる其處で淨瑠璃

の外にあつた間の物が廢れて、淨瑠璃の中に間の物が發生するやうになり、元文以後の情況を見るに至つたのであらう。（完）＝藝術殿＝

德川初期に掘鑿した別宮新川の由來

第三輯の本誌に「有史以前の川內村」と題せる項中川內の姿相として今吉野川の本流となり居る別宮川が、寶曆年間蜂須賀重喜が掘鑿とあるは此間字句の脫漏あり、右は寬文年間に蜂須賀光隆が德島城の防備と城下の水運に開鑿せるものであつて、重喜公は其後舊本流今切川の治水問題から第十、名東姥ケ島に及ぶ二百數十間の堤防を築いたものである。要するに德川初期に溝の流れに比しい別宮川を六間乃至九間幅に擴げた文獻がある。其れ丈け川內の上代は今日と餘程に地相の色彩を異にし居るから、現代の川內を古代よりの大三角洲として地盤を研究すると大いなる錯誤が生ずる。兎もすれば地質、地理學者は文獻のために蹉跌をする、こゝに年代の相違に新川の由來依つて件の如しである。（小川國太郎）

人形の魂

文　吉田榮三
樂　吉田文五郎

足のない女人形の難しい坐らせ方

坐るこゝですか、何？そう堪らぬといふほど窮屈でもないんですが――。

なんせ、人形遣ひといふ職業は立ちづめの、それもたゞ立つてゐるのと違つて、時には三尺もある高い舞臺下駄を履いて、立身で重たい人形を遣ふんでせう。立つ辛抱なら、一日中立ちづめでも平氣なすです

が、どうも坐るのだけは……。（榮）

坐る話なら人形の坐らせ方ですが、人形、殊に女の人形を坐らせるにはなか〳〵技巧がいるものでしてね。

御存じの通り女の人形には足がありません。なぜ女の人形に限つて足がないか、足、足、足と足が顏以上に幅を利かしてゐる今日、女の人形に足がないなんてけつたいな話ですが、とに角女の人形には足がありません。足のあるのは役柄上どうしても足を遣はねばならぬ特殊の人形ばかりでして、――例へば鏡山のお初、これは草履打ちをしなければならぬから足がある。中將姫の岩根御前、これは庭へ下りて中將姫を雪の中で折檻しなければならぬから足がある。その他日向島の絲竹、白石嘶の信夫、戻りかごのかむろ――これは駒下駄を履いてゐます――など足のあるのはまあざつとこれ位で、その他の人形には全然足がない、足がなくて坐らうといふんですから土臺が無理です、達磨さんなら知らぬこと、何とか工夫して身體のすはりをよくせんことにはきまりがつきません。で考へついたのが『きんだま』です。

女にきんだま、けつたいな話ですが、このきんだまあるがために女は、位置の安定が保てる。――つまり坐り格好がつくのです。きんだまと申しますのは、例へば、この初菊を眞裸にして御覽になるとよくわかりますが、胴の下からぶらりと下つてゐる大きな袋のやうなものでして、この袋には綿がつめてある。これが眞中にブラ下つてるために、立つ時にも、坐る時にも膝の格好がつくわけです。しかし何といつても無い足をあるやうに見せて、きちんと坐らせようといふんですから、そこのコツがなか〳〵むつかしい

んです。

こんな何でもないやうな——人形からいや、極く初歩の技巧一つでもよほどの修練が要る。まして無表情な人形に表情を與へ、人間すべての感情や生活をつかひ生かそうといふにはなかなか並大抵の修業ぢや追つきません。(文)

伊達娘戀緋鹿子、娘お七……文五郎

見習修業だけで八九年もかゝる

御承知の通り、今日の人形は三人遣ひでツメ——端役のチヤリ人形——以外は三人で一つの人形を遣ふ。足は足づかい、左手は左遣ひ、胴とカシラはその首位者とチヤンと役割がきまつてゐて、この三人の心と心、呼吸と呼吸がぴつたり合はなければ人形一つつかふことも出來ないのです。のみならず人形遣ひは太夫にも三味線にも呼吸

を合はしてゆかねばなりませんから數等厄介です。

足だつて樂なやうに見えて、なか〳〵樂ぢやありません。遣ふまでに八九年、一人前になるのはなか〳〵容易のこつちやない。昔は一生足ばかり、左ばかりを遣つて、肝腎のカシラに手もつけられずに死んだ人さへたんとありました。

それが今はどうでせう。やつといろはのいの字を覺へたか覺えぬかに早もう一廉の人形遣ひになつた氣でゐる。イヤふけや女形はぢみだからいかぬ、初菊や八重垣見たいな、パツとした振袖ものが遣て見たい——なんて贅澤ぬかす。昔なら、ひどいこと毆られるところですが、この節の若いものは一寸手荒なことでもすると、『ぢやもうやめさせて貰ひまつさ』とあつさり出よる。腹が立ちますが、出てゆかれちや無人のこの際忽ち弱るからへイへイいつてゐてもらつてる、といつた始末でごつちが師匠やら、弟子やらわかりません。情ない話です。(文)

わたしらの修業時代は、今と違つて、そりや嚴しいものでした。體に生疵の絶え間がない位に師匠から手嚴しい折檻を受けたものです。わたしは明治十七年、十二の春はじめて澤野席——日本橋北詰にあつた——といふ人形座へ入つたのですが、忘れもせぬ、入つてから十日目、當時評判の豊松東十郎さんが三番叟を遣つた。その時舞臺下駄を揃へる役をさせられましたが、うつかり右と左とを間違へて出したものと見えます『このぐんげつめ』といふなり、あの大きな舞臺下駄でウンといふほど向脛を蹴られ、氣が遠くなつたことを覺えてゐます。

それからこんなこともあります、彦六座にゐたころ、吉田辰五郎さんが『貞任』を遣つた。私は傍にゐてチョンチョンとそのツケ――柝――を打つ役でしたが、ごうした拍子か、スカタン打つてしまつたのです案の定舞臺下駄で向脛をやられて大怪我をしたことがあります。今でも貞任をつかふたんびにそのことを思ひ出し感慨無量です。(榮)

ゾッとした血ぞめの人形の片足

無暗矢鱈に人の子を傷つけるなんて、一寸考へると無茶な話。何ぼ今ミ時代が違ふといつたつてあんまりやないか、さうも考へられますが、人形といふものは一藝一代、一生涯かゝつても覺えられるものぢやない、それを仕込むには生優しいやり方ぢやいけないのです。あゝ遣へ、かう遣へ、と手をとつて、撫でつさすりつ教へたんぢや、シンから腹に入らない。毆つて、蹴つてピシ〳〵鞭を加へてから、ひとり合點ゆくやうに仕向けてやる――といふ仕込み方でした。(文)

初代吉田玉造さんといへばわたしの師匠ですが、そりや嚴しい人でした。ズウツと以前、文樂座が松島にあつたころです。玉造さんが『戻りかご』で浪花次郎作を遣はれた。その足をわたしが遣つたのですが、どこがどういけなかつたのか、初日にひどいこと向脛をやられました。けれど自分にや、どこがどう悪いのか合點がいかない。一生懸命遣つてるはずなのにウンといふほどけり飛ばされたんでせう。腹が立ちま

す。それが一度きりならまだしも、次の日も次の日も、またその次の日も、四日續けてけられ通し、血の出た上にも血を流し、二重にも三重にも怪我させられてたまつたもんぢやない、ようし今に見てをれ、今度けりやがつたら、何ぼ師匠でも容赦せぬ、毆り飛ばして逃げてこまさうと幾分殺氣立つてもゐたのでせう、凄いほどの心もちでウンと力を籠めて遣つた。と、意外にも『ようし、出來た！』と一言、眼に微笑んで褒めてくれました、その時のうれしかつたこと。

後からわかつたのですが、あれほどの名人になると違つたもので人形を支へてツ、ツ、ツウと舞臺へ歩いて來て、キッと極まる時の勾欄の位置が毎日寸分違はない。物指しで測つたやうに、キチンときまつてゐる。それがわからないものだから、いゝ加減なところで足をきめやうとしたのです。それならそれと教へてくれゝばいゝやうなわけですが、それを前以て教へて了ふと、藝が生きない。そこで教へずに、身を以て會得させやうと仕向けられたのです。その心遣ひ、その思ひやり、それについてわたしには一生涯忘れることのできぬ記憶がある。

わたしはこの話をするたびに、今でもひとりで泣けて來ます。人形道に入つて四十七年、いろんな話を聞き、いろんなことも見て來ましたが、これ位私を感動させた話はありません。

玉造さんといふ人は大變な稻荷さん凝りでして、庭さきに大きな稻荷さんが祭つてありました。そしてその扉の中へいつも舞臺で遣ふ狐のカラシをいれて置いて玉藻前だの、廿四孝だの、出し物によつて、狐のいる時にはいつも恭しう禮拜して取り出すといつた風に大切にしてをられました。

朝顔日記宿屋の段、みゆき……文五郎

それからもう一つ大切にしてゐられたものがある。それは黑塗りの大きな長い桐の箱なんです。それをチャンと床の間に祀つて置いて、時々その前にうつむいて、合掌瞑目されてることがある。ハテ何だらう。位牌だらうか、位牌なら、佛壇にチャンと祀つてあるはず、けつたいやな、何やろ、一ぺん見てやれといふんで留守の間にこつそり開けて見ました。と、それは何と、べつとり血の着いた人形の片足ぢあありませんか。つけ根の所を綿で包んでありましたがその綿にもべつとり血の痕がある。それもよほど日數が經つたと見えて黑くなつてゐる。奇怪な人形の足、血ぞめの片足、それを見た時、わたしはあんまり思ひがけないのと凄いのとでゾーッと身うちが寒うなりました(文)

荒い一面に優しい師匠の情け

なぜこんなヘンなものが、親のかたみか何ぞのやうに大切そうに藏はれてあるのか、――それについて玉造さんはかういつて語り聞かせてくれました。

「見てしまつたこありや仕方がないからいふが、これはワシに取つて忘れやうと思つても忘れられない記念の品だ。ワシがまだ足を遣つてた時分、吉田金四といふ師匠が、阿波十郎兵衛を遣つた。その時ワシの足のつかひぶりを見て、「いつになつたら覺えやがるんだ」といふんでその時遣つてた十郎兵衛の人形の片足で頭を叩き割られた、これがその時の人形の片足だ。記念に納めて置けといはれたので頂いて、こゝにかうして藏つて置いたのだ。ワシは今にその時のことをよう忘れない。思ひ出し、思ひ出して、いつでもわれとわが心を鞭打つてゐる。ワシが今日かうして兎も角人形遣ひになれたのも、師匠にこの足で頭を割られたゝめ、いはゞこの人形の片足のお蔭だ、その折檻がどれだけ藝道のはげみになつたか知れない。心に緩みのできる時、藝道に弛みの出る時、ワシはいつもその人形の足を押し頂いて泣いた。泣きながら勵まして來た。ワシがこんなになれたのも師匠のお蔭、その嚴しい折檻の賜物だと思つて、時にふれ折にふれ合掌禮拜してゐる。

師匠が歿くなる時、ワシはその臨終の席に呼ばれたが、今息を引き取らうといふ際に、ワシは師匠の枕許近くすり寄つて頼んだ。「どうか左のお手を頂かして下さい、どうぞこの手を—この立派な腕を—あの世へ持つて行かないで、わたしに殘して行つて下さいまし」と泣きながら左の手を押し頂いて頼んだ。この人形の片足は師匠の御位牌も同然、亡き師匠への追慕のしるし、感謝のしるしとして毎日忘れずこうして合掌するんだ」と

——この涙の述懐を聞いて、わたしは身がジーンとしました、そして心の中に、あゝなるほど名人と呼

ばれる人の心がけは違つたものや、ワシもその心にあやかつて、一生懸命藝道に精を出さう、さう思つて何べんも〳〵逃げ出したいほどの苦しい目をぢいつと耐へ忍んで來ました。飛びぬけ愚者の私が名利にも迷はず、外れ道もせず、とにかく四十何年間藝道一筋に生きて來られたのも、この師匠のこの教訓あつたればこそこありがたく思つてをります。(文)

兎に角吉田玉造さんといふ方はかういふ苦勞をして育つて來た人だけに、荒いこゝも荒かつたが、また一面優しいこともありました。一緒に街を歩いてる時など、『俺に一尺離れてついて來い、一尺以上を寄つてもいかぬし、一尺以上遠のいてもいかん、キチンと一尺の距離をきめて歩くんだ、でなきや、一人前の人形遣ひになれぬぞー』といつて、人ごみの中をすりぬけすり抜け窮屈な思ひで歩かされたことがあります。

新町などを歩いてると、色町のことですから、美しい女が、長い華麗な着物の裾をひるがへして通る。『ごうや、あの裾のさばけ工合は？よく〳〵見て置けよ、人形の裾もあんな工合にさばくのや、着物のふきの裏返り工合だつてあゝいふ風にならなけりやいかんー』などと一々こまかいところまで教へて下さる馬に乘つた兵隊が來ると『あれ見い、洋鞍の時は騎り手の足はあゝいふ工合に眞直にのびてるやろ、和鞍の場合は反對に脚がかう曲るのや――』といつた工合で、わざ〳〵天滿の天神さんへ流鏑矢を見に連れて行つてくれられたり、それは〳〵涙のこぼれるほどやさしいところもございました。(文)

玉造さんにはわたしも一方ならぬ世話になつてをります。稻荷座から初めて文樂へ加つた時、二十七の

春かと思ひます。傾城阿波鳴門が出て、淨瑠璃が越路、――後の摂津大掾さん――人形は十郎兵衛が玉造さん、お弓が先代桐竹紋郎さんそれにわたしのお鶴です。はじめて振られた役が、子役ぢや始まりませんこれでも稲荷座ぢや一座の花形として、重次郎や勝頼を遣つてのけた自分だ、それに役もあらうに子役を振るなんてあんまり人を見くびつてる、と不平やる方なかつたのですが、ごうも仕方がない、母はお弓と申します――十郎兵衛浪宅の母子對面の場をすませて引込まうとすると、玉造さんが、『榮コ、一寸待てこれを遣へ』といふ。まだもう一場お鶴が殺される場が殘つてたのですが、『そんな端場は誰かにつかはせ、お前はこれを遣ふんだ』とあつて無理矢理につかわされたのが十郎兵衛の足でした、いろはのいから叩き直してモノにしてやらうといふ思ひやりそれが今ごれだけためになつてるか知れません。(榮)

見物席へ人形を投げられる

ですが、とに角あの時分――わたしらの修業時代の人形遣ひは亂暴で無茶なことも平氣でやつたもんです。今でもよう忘れませんが、わたしが堀江座にゐたころ、日蓮記で吉田兵三が勘作のばゝ、私が勘作の女房を遣つたことがございます。その時わたしの女房があんまりばゝの傍へ近寄り過ぎてたゝめ、婆が自害する邪魔になつたものと見えます。『コラッ!何さらしてけつかる!』といふなり、わたしの人形をひつたくつてぽんと見物席のごまん中へ放り投げて了つた。人形遣ひが晴れの舞臺で、人形を放り投げられる

なんて無細工な話です。判官さんぢやないが、おのれやれと思へども、こゝは大事の殿中、ぢやない舞臺手向ひもならず黑んぼを着たまゝスゴ〳〵見物席へ下りて行つて人形を拾つて歸つた間の惡さ、今思つても冷汗が出ます。

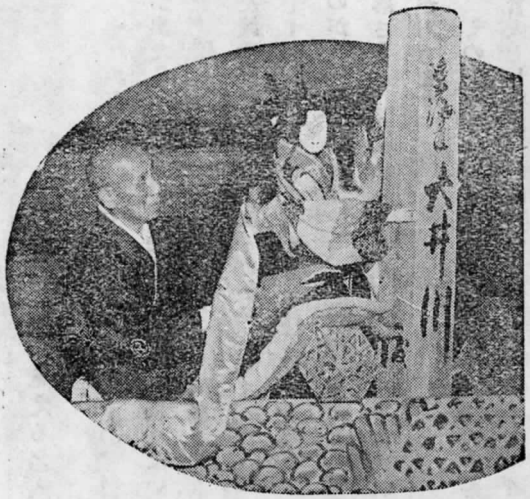
故人玉七のやうな名人でも、大念佛の景淸の立ち廻りに、『追手のつかひぶりが生ぬるい、そんな手ぬるい追手ぢや、惡七兵衛景淸、見えが切れぬワイ』といふんで、景淸を遣つてた玉助さん—初代吉田玉造さんの息子さんで私の最初の師匠——のために人形を見物席に叩き投げられ、拾つて歸つた時は幕がしまつてたといふやうなこともあつたそうです。(文)

舞臺は戰場、眞劍勝負の晴れの場だ、なんてよくいひますが、實際あゝなると、白刃の勝負もいつしよですな、一寸でも氣合のゆるんだものが負け、氣合で押して押して押し切つた方が勝ちといふわけです。ですから偉い遣ひ手と相對した時には、實際息づく程苦しい。

忘れもせぬ先代桐竹紋十郎——この人は古今無隻の女形遣ひで、しかも荒物づかひ、チャリづかひ何でも出來た名人ですが、この人と夏祭浪花鏡で、紋十郎さんが義平次、わたしが團七九郎兵衛をつかつたことがあります。『駕返せ、〳〵』からいよ〳〵『殺し』となつて、義平次が泥田の中から手をのばしてぐつと團七の左の腕を摑む。そこのところ、人形ではたゞ摑む恰好をするだけでほんまに引張らない、芝居のやうに寫實風にやらないのが人形の常道。

それを承知してゐながら紋十郎さんは意地惡く眞實力をこめて引張らうとするのです。あの時はほんと

に弱りました。何しろ紋十郎さんは堂々たる體格ですし、わたしは御見かけ通りの小男、おまけに自分のつかつてる團七九郎兵衛の人形は人形中でも一等大きい。そいつを脊の低い自分が遣ふんですから、大一番の三尺もある高い舞臺下駄を履いてゐる。義平次を引張り上るのにスル〳〵と素直に引張られてくれるとワケないんですが、今申したやうに紋十郎さんはどうしても素直に引張られてくれない、力いつぱい引かうと思へば形が崩れるし、形を崩すまいとすれば引張れない氣合と氣合、ウム、ウム、ウムでやつと引きあげたが、それが毎日、しかも眞夏のことでせう。暑さは暑し、二十日間の興行をすませた時は、げつそり痩せて、眼が落ち込み、顏も嶮しうなつて凄い位でした。



朝顏日記、み雪……文五郎

考へて見ますに、あの場は役の性質からいつて團七をカンカンに怒らせなけりやならぬ、殺す氣でなかつたのに、義平次があんまり疊みかけて惡口雜言するので、ツイ赫つとなつて舅殺しの大罪を犯す——といふのが淨瑠璃の本意ですから、團七役を引き立てるために紋十郎さんがわざと私を怒らせてかゝつたのです。(文)

人形が三倍に見える名人の力

それからも一つ、ずつと昔のことですが、何でも文樂の七月興行に釋迦如來誕生會といふ、釋迦一代記が出たことがある、太夫は誰だつたか覺えないが、人形役は相十郎さんの阿羅々仙人に、わたしの悉達太子。難行苦行の太子を驗さんとして阿羅々仙人が靈杖をもつてピシ〳〵打つところがありますが、今いつた流儀で紋十郎さんは型ばかりでなく、ほんまにピシピシ人形を打ち下すのです。人形の衣裳が薄いもんですから、その脊中へ手を入れてぐつと構へてる私の左の甲へその杖がピシ〳〵こたへる。折檻されてるのが人形やら、自分やら、お釋迦さまやら、惡魔外道やらわからぬ。手の甲がしびれて何べん人形を取り落さうとしたか知れません。たうとうへコたれて、次の日から雜巾で手の甲を二重三重に卷いて出たことがあります。（榮）

その紋十郎さん――先代桐竹紋十郎さんの前に一字違ひの桐竹門十郎といふ人がゐました。荒物遣ひの名人でしてな、この人が初代吉田玉造さんの評判を聞いて、道場破りの恰好で玉造さんの出てゐられた座へ乘り込んで行つた話があります。

『――玉造、玉造つて、評判ばかり高いが、一體どれくらゐ遣へるのか、手の內を見てやれ』といふんでやつて來たのですが、門十郎としては『何、玉造ぐらゐきつと壓倒して見せる』といふ自信があつたのでせう。その時の語りものは皮肉にも敵討龜山道中噺で太夫は長門さん、人形は敵役の門十郎さんが敵水

右衛門、玉造さんが石井兵助。

水右衛門と兵助とが戸口でばつたり出會ふ、兵助?が、口に柄袋を喞へて、ヤッと構へる、そこんとこをぢつちもまるで敵討の氣合でやつたものと見えます、あとで門十郎は『負けた。玉造にはとても敵はぬあゝも凄い人とは思はなんだ』といつてプイとその座を出て行つてしまつた。一方玉造さんは玉造さんで『イヤ門十郎はエラい人形遣ひた。ヤァッと劍を構へた時は思はず身がふるへた』といつて感心してたさうです。これは玉造さんのまだヅッと若いころ、御維新前のことのやうに聞いてゐますが、とにかく玉造つて方はズバぬけて偉かつたに違ひありません。(文)

私は明治二十八年御靈文樂で玉造さんの源平布引瀧の實盛を見たことがあります。私が小萬の役でしたが片腕を斬落された小萬の死骸が擔込まれてくる。實盛が懐中から氣付け藥を出して、小萬の口に含ませてやる。そしてウムと活を入れる。その活の入れ工合がどうも見て、コワクなるくらゐで身のうちがゾーッとしました、そして目に見えぬ何ともいへぬ力が、グン〳〵わたしを押してくるのでした。何といふ力かと、わたしは今でもその時のことを思ひ出します。その時ほど相手の人形が——實盛が二倍にも三倍にも大きく見えたことはありません。

故人玉五郎さんなども、玉造さんが熊谷をつかつて『オイい、オイーい』と敦盛を呼び返すところや『いざ物語らん』で、きつときまる、ところなどを見てゐると、何だか恐ろしい氣がしたとつくづく感心してたことがあります。そりや大した名人でした。(榮)

別してこの人は狐遣ひの名人で二十四孝の狐火や葛の葉の子別れ玉藻前の金毛九尾の狐なぞ、とても素晴らしいものでした、でもこの人は舞臺に狐の形を寫すにはほんとうの狐の生活を知らなけりや、といふので毎晩冬の寒いのに難波の赤手拭の稲荷さんへ出かけて行つて、狐の戯れる姿態を見て歸つたといふ話です。(榮)

この人は狐ばかりぢやない、猿も上手でしたし、虎から獅子、鼠何でもいけぬものはなかつた、それに宙吊りと早替りが得意で、明治十七年松島文樂で五天笠の出た時、孫悟空を遣つて五色の雲美しい天上——實は天上裏——を縱横無盡に飛行して、見物の度膽をぬいたものやさうです。それが評判になつて、芝居は九十日も打ち續けた。『棧敷が落ちて、越路がぬけて五天笠まで鳴り渡る』——確かそんな落首の立つたのもその時のことのやうに思ひます。(文)

こんなこともありました。七夕さんで牽牛と織女とがいちやついてる。それを見て夜這星がりんきして織女のあとを追つかけてゆく——といふ珍らしい狂言が出たことがあり、玉造さん自身夜這星になつて天井裏を飛び廻られたことがあつたが、そりや人間業とも思へぬほど見事でした。

それからお染久松の七化けに、大きな玉になつて、空中飛行をされたこともあります。座摩さんのお祭りの夜、御神殿の觀音開きの扉があくと、まんまるいお月さんのやうな玉が飛び出してする〳〵と空中に舞ひ上る、その玉がパツと割れると同時に目の覺めるやうな踊り子が下りてきて、住吉踊りを踊りながら消える。そいつを玉造さんがヤつたのでしたが、そりや見事でした。(文)

こんなやうな話、名人についての話ならいくらでもありますが、今度は少し方向をかへて、柔かい人形のお話をしませう。

肩一つで戀と色のつかひわけ

一寸これを抱いてごらんなさいませ。これ、安達ヶ原の貞任ですが三貫目は優にあります。人形中で一等重たいのは一谷嫩軍記須磨浦の熊谷、甲冑に馬、合して五貫目近くもあるでせうか。その次は太十の光秀、御所櫻の辨慶、夏祭の團七、日向島の景清など。女形で一等重たいのは白石噺の傾城宮城野、これは長いうちかけにきんきらきんの櫛笄が加はつて三貫目ぐらゐ、次いでは阿古屋、梅ヶ枝なぞ（同じ遊女でもお輕は輕い）

かうして抱いただけぢやさうもありませんが、なんせ、持ち重りのするものでして……そいつをぐつと左手にさゝげて、前こごみにならぬやう、足が變に曲らぬやう、裳がだらりと勾欄の下へ垂れ下らぬやうに遣ひこなすにはなかなか力がいります。お見かけ通り私は文五郎さんなんかよりズツとカラが小さい。しかも文五郎さんは女形遣ひ、わたしは立役づかひ。その小さいわたしが、光秀や熊谷のやうな大きい、自分の脊丈けほどもある人形を遣ふには何としても寸が足りない。で、それを補ふために高い下駄を履くのです。この下駄は一番から五番まであつて、一番が三尺、二番が二尺五寸、三番が二尺、四番が一尺、五

菅原傳授手習鏡、相乘名殘り の段、　菅相乘……榮三

番が五寸、大一番の舞臺下駄を履くと、一寸石炭箱を縱にして、その上に乘つかゝつてるやうな恰好です。

それで組討ちから斬合ひ、立ち廻り何でもやらなけりやならぬのですから厄介ですよ。こゝに三人が立ち廻りをやるとすると、一つの人形に三人、都合九人の人形遣ひがその高い下駄を履いて、グルグル狹い舞臺を立ち廻らなければならぬ。慣れぬうちはよく下駄と下駄とがカチ合つてスカタンをやります殊に槍、薙刀なんて長いものを振り廻しての立廻り——例へば鏡山の求女と又助、玉藻前の奥方と金藤次との斬り合ひなんかになると、自然間がのびてテキバキいかない。チャンバラ役者見たいに拔くか拔かぬかに、早もう十人も二十人も斬つてるなんて藝當は人形ぢやとても出來ませんね。（榮）

人形もいろ〳〵、カシラによつて、文七だの、團

七だの、孔明だの、源太だの、けんびしだの、娘だの、新造だの、ふけおやまだの、幾通りにも分れてゐて、なかなかやゝこしい。眼と眉の動くのもあれば、口の動くのもある。眼が動いて眉の動かぬもの、眼も眉と口も動かぬ無表情なもの、いろ〳〵です。が、一體女は男に較べて顏の動きが少い。むろん中には鏡山の岩藤や、先代萩の八汐や、中將姫の岩根御前のやうに怒りもすれば笑ひもする、眼も『より目』といつて人間同樣左右に動く人形もないことはないが、こんなのは惡役に限り、普通の女房ものは口も眉も動かぬ、眼もあけたりしめたりだけ、尻目も利かねば秋波もつかへない。

若娘になると、更に眼も動かねば眉も口も動かず、全く無表情に近いのですが、それでゐて一等よく戀をし、色氣を出さねばならぬのがこの娘役。こいつがなか〳〵むつかしいのです。（文）

手の動くところに眼、眼の動くところに手、手と眼と一致させてつかふことは一等大切なことですが、ぢや、女の色氣はどうして出すか——

秋波もつかへず、物もいへず、泣く涙さへ出せぬ女の人形にどうして色氣を出させるか、第一に必要なのはその肩つかひです。この肩のくねらせやう一つで、柔かくもなれば硬くもなる。時代と世話と、娘と女房と、ばゝあといろ〳〵に遣ひ分けられる。初菊の戀、八重垣姫の戀、お染の戀、お七の戀、三勝の戀阿古屋の戀、あらゆる戀と色とのつかひわけをこの肩つかひ一つできまる。同じ袖を振るにしても時代はゆつたりと、世話は小刻みにふる。

惚れ方にも、心から惚れてるのと、うはべで惚れてるのとでは、つかひ方がちがつて來ますが、これは

人形によつて御覽を願ふより外ありません。（文）

人形では女が惚れるが相場

泣き方にもいろ〳〵あります。お姫さまや武家衆の奥方など、身分ある方の泣く時は、かう懐ろから紙を出して、左の手で右の袖口を輕く抑へ、右の手でそつと涙をふく、紙をつかわず、袖で涙をふく時は右手の拇指を袖口のうちらへ入れ、四本の指で袖口をもつてつゝましう拭く。田吾作娘や下司女の場合は紙もつかはず、兩手でぶしつけに涙をふくといつた工合です。（文）

總じて女は男に較べて身振りが多い。男が五へん動くところなら、女は八へんも十へん　動く、淨瑠璃では女から惚れて、女から口説くのがきまり、それも超特急のやうに大へん速度が早くそして直接說法式です。（文）

人形ぢや惚れるのが女、惚れられるのが男と、チヤンと相場がきまつてゝ、もし男が女に惚れてかゝるやうな場合は、十中十まで猛烈な肘鐵砲を喰ふ仕組みになつてゐます、こゝんところ、人形淨瑠璃なるものはもつと〳〵このごろの新しい女にもてゝいゝわけです。（榮）

さわりの場合などよくクルツと後ろ向きになつて、いゝ恰好を見せるところがあります。あれは身振りに一つの變化をつけるためと、すらつとした立ち身の後ろ姿の美しさ——肩から腰、裾にかけての柔かい

衣裳の線や、髪かたちや帶の色合の配合美を見せるためで、さわりの場合よくつかふ型。（この項桐竹紋十郎氏による）

肩づかひは、立役にも必要です、例へば紙治の『魂抜けてとぼとぼ』のくだりなどこの肩のふり工合で非常に柔かい調子が出るわけですが、しなをし過ぎて女になつても困るし、といつて柔か味を出さねば、『魂ぬけてとぼとぼ』の淨瑠璃の文句の味が出ない。なか〳〵むつかしいもんです。それに人形ばかりいくらひとりでうまく使はうと思つても淨瑠璃や三味線がうまく調子を合してくれなければ弱る。淨瑠璃や三味線の上手下手によつて、どれだけ人形のつかひ振りが拘束されるか知れません。（榮）

今まで四十何年間人形を遣つてて、私の一番太夫の語り口に感心したのは摂津大椽さんでした。明治四十三年北燒けがあつて關東へ旅興行に出た時のこと、横濱で大椽さんが十八番の二十四孝を語つた。その時、桐竹紋十郎さんの代りに、わたしが、はじめて十種香の八重垣姫を、つかつたのですが、あの名高い名文句

『如何にお顏が似ればとて、戀しと思ふ勝頼樣、そも見紛うてあられうか、――世にも人にも忍ぶなる』

のところで、摂津さんは『さあかう遣ひなはれや』といはんばかり、それは〳〵上手に語つてくれはりました、わたしはあの時ほど勇み立つて眞實『世にも人にも忍ぶなる』勝頼樣へのしほらしいお姫さまの戀心をわれとわが心に味はひながら力いつぱい、しかも樂々と遣つたことはありません。（榮）

現實を離れ理窟抜きが妙味

一體人形の面白みはそのとほけたやうなところにあるのです、人形は人形、人間は人間、人形と人間とは所詮別物、人形が人間になり過ぎたら人形の面白みはなくなつてしまふ。今、文樂でつかつてる人形の代りに三越や高島屋のマネキン人形をもつて來てつかつてごらんなさい、とても變なものやらうと思ひます。

歩き方一つだつて、人形ぢや片片同士いつしよに出す。右足を出す時に右手を、左足を出す時に左手といつた工合で、手と足とをちぐはぐに出す人間の歩き方とは大變違つてる。ちがつてればこそ面白いのです。八百屋お七に振袖着せて、人間のやうな手足の出し方で高い火見櫓に登らせてごらんなさい。無細工で見られた格好ぢやありませんよ。(この項桐竹紋十郎氏による)

淨瑠璃だつてさうです。例へば先代萩御殿の場の政岡のさわりですが、あの名高い『七つ八つからかな山へ』から、『千年萬年たつたとて』の節廻しを聞いてごらんなさいまし、陽氣で、派手で、大浮かれに浮かれてるやうなところがあつて、三千世界にたつた一人の子を殺した母親の、泣くに泣かれぬ愁歎の場とは一寸思へないでせう。

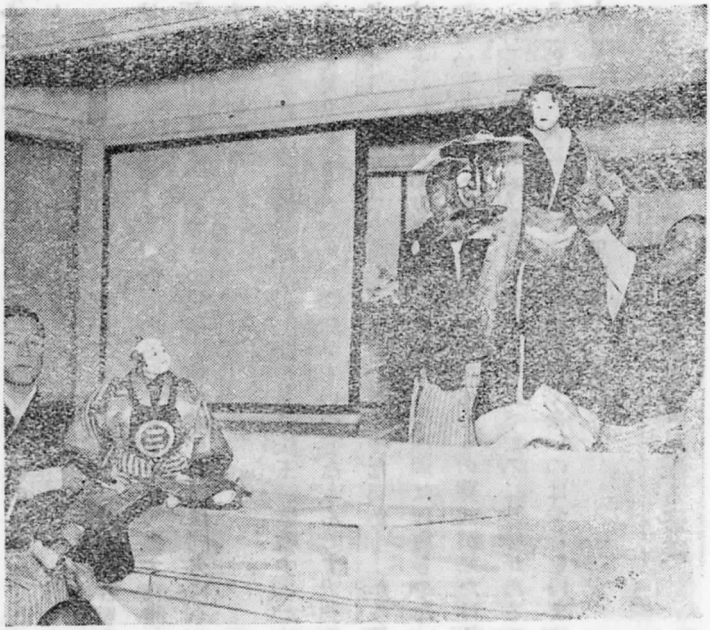
三味も浮かれ淨瑠璃も浮かれてゐる。勢ひ人形も負けぬ氣で踊る。あの曲節ぢや踊らざるを得ないですそれを踊らずに、じいつと沈みこんでゐたらどうなります。それこそ場が死んでしまつて、芝居が芝居ぢ

やなくなつてしまふ。で、文句の悲痛なのに引きかへ、こゝでは淨瑠璃も人形も大いに浮かれるといふことになつてるのです。

また菅原寺子屋のいろは送りがさうです。『御台若君もろともに、しやくりあげたる御涙』から『いろは書く子をあへなくも、散りぬる命是非もなや、あす夜誰かは添寢せん』で、子の死を嘆きつゝ、『劍と死出の山けこえ、あさき夢見し心地して、あとは門火にゑひもせず』――門火を打つて子の亡骸を送り出す親心の切なさ。

――芝居ぢや亡骸を送り出したのち、松王が燒香するだけですが、人形では身振り袖ふり、いろんなしぐさを見せる。これだつて理窟からいや變なもんです。子の野邊送りにチンもツンもあつたもんぢやないじいつとうなだれて合掌してればいゝぢやないか――かう仰有る方もありませう。なるほど理窟はさうです。それに違ひありません。ですが、淨瑠璃は理窟ぢやない。淨瑠璃が、從つて人形が寫實の藝術ぢやないといふのはこゝんところです。ほんとうの葬式が見たければ阿部野へいらつしやればよろしい。

淨瑠璃は、殊に人形は現實を離れたところに妙味があるのです。理窟で淨瑠璃を聞き、理窟で人形を見るこの節の人に、人形淨瑠璃の面白くないのはやむを得ません、淨瑠璃の亡びる、亡びないの問題はもつとほかに原因があると思ひます。（榮）



戀女房染分手綱、重の井子別れの段、重の井……榮三

役者が人形を眞似る、芝居が人形の振りをいろ〳〵工夫してとり入れる、といふことは隨分古くから行はれてゐますが、役によつてはどうしても人形振りでなければいかぬものがあります。例へば信長記――正しくいへば祇園祭禮信仰記――の雪姫爪先鼠の場がそれです。

金閣寺、櫻が咲いてる、散る。吹雪の下に美しい繪師の娘雪姫が縛られてる。花びらが吹雪のやうにふりかゝる、それを爪先で集めて鼠を畫く。と、忽ちその鼠が動き出して雪姫の縛られてる繩をかみ切る。氣の遠くなつてた雪姫がハツと正氣にかへると同時に、鼠の姿はもとの花びらになつてパッと散つてしまふ。

かういふ場はどうしても人形振りに限る

のです。役者では芝雀さん――故雀右衛門――が一番人形に熱心でよく研究に見えたものです。（文）

× ×

芝居でもさうでせうが、古い人形の世界にはいろんな迷信があります。今でも佐倉宗五郎を出すと祟りがあるといふので、宗五郎をやる時にはいつもお祭りをします。人形を祭つて御燈明をあげて、役がすんで歸る時はチャンと縛られてござつしやる繩目を解いて歸る。でないと寢てゝもきつとうなされる。きまつて何か異變があるこいふのです。

人形遣ひの一番恐がるのは菅相丞、菅原の天神さま。何せ、神樣におなりなさつた方だけに迂濶にや扱へません。殊に恐ろしいのは菅原四段目、寺小屋の前にある天拜山飛梅の場。

菅相丞が時平公謀反の條々を聞かれて無念の形相物凄じく『形はこのまゝ鳴神の不思議を見せん』で面相一時に變つて雷になり天にのぼつておしまひになる。

あのところは遣つても凄いところですが、そんな關係からか天神樣の人形は格別大事にかけます。（文）

昔は菊野殺し――芝居でする五大力――の早田八右衛門？が化けて出るなんて噂したものやそうです。文樂座ぢやありません。他の座ですが、座員が宿直してると、誰もゐないはずの二階からトン〳〵と段梯子を下りてくる足音がする。ヒョッと見ると早田八右衛門です。二階の人形庫にあつた早田八右衛門が、血刀を提げ血相かへて、段梯子をかけ下りてるのです。アッといふなり、その男は腰を拔かしてしまつた……なんて話がありました。

つくり話でせうが、私はよほど以前あの早田八右衛門をつかつたことがあります。血刀提げて下りてくると、先に殺した菊野の死骸が轉がつてる、躓いた拍子に、腹の疵口へ足を踏み込む、ぬかうとするが拔けず、死骸が足について宙に浮き上る――とても慘酷な場ですが、その頃は芝居も新派全盛、寫實大ばやりの時代でしたものですから、何でも寫實本位にこいふんで、足にべつたり血の附くところを見せるため子供の赤い靴下を買つて來て人形の片足に履かせて遣つたりしたことさへあります。阿呆眞似をしたものです。（笑）

人形の色戀にも時代の響き

ですが時代ですな。この節は取締りが嚴うなつて、そんな馬鹿な眞似は許されません。殘酷な場はいけず、第一姦通ものがいけない。大經師昔暦、これは淨瑠璃中の名作やそうですが、おさん茂兵衛の間男を取扱つたのがいけないとあつてきつい法度、槍權三重帷子、これも同じ理由から文句が多く、しんとろとろりと見惚れる男槍の權三の人形はあまり舞臺へは出られないのです。

何も彼も理窟の世の中、現實を離れた人形の世界、人形の畫く色戀の世界にまで理屈が入つて來ます。抱きつく所作もいけないし、抱きつくこいふ文句もよくない――といふので御靈にるたころ、二十四孝の勝頼、八重垣姫のいちやつきの場『あとは互に抱き付き』のところを『寄り添うて』と直されたことがあ

ります。『濡れにぞ濡れし濡衣の』といふ文句もある濃艶な場面、それをたゞ『寄り添うて』としたんぢや、も一つ情が生きないんです。

以前はこゝで勝頼、八重垣姫の二人が抱きあつて、そのあとのはづかしさをパッと扇子を開いて紛らかす。そりやとても色つぽい錦繪のやうな情熱の世界を見せたものでした。重次郎、初菊の場合も同樣です義經千本櫻すしやの段ではお里と維盛との契りに、枕二つ並べるのはいかんとあつて、枕を一つ減らされました。これも以前は枕二つ『思はせぶりとお里は立寄り――二世も三世も固めの枕、二つ並べた云々』といふところでお里かいろ〳〵こまかいしぐさを見せたものです。(榮)

それから桂川連理柵、長右衛門がお半の許へ忍んでゆくとこなども、大膽な恰好をそのまゝ遺つたものでしたが、無論今日許されるはずはありません。

人形の世界も色氣緊縮で、だん〳〵世智辛くなつてまいりました。(文)

よく文樂は亡びる、亡びる、と申されます。年百年中おんなじものを繰り返し、くり返しやつてゝ一つとして新しいものを出さぬやないか、あれぢやだん〳〵飽かれてしまふ、イヤもう飽かれてしまつてるのだ、もつと目先の變つた新作ものでも出して、ドシ〳〵時代を引張つて行かなけりや、と仰有る、御尤もな話で、新作にせよ何にせよ、よいものさへあれば、ドシ〳〵やつて行きたい、ゆかねばならぬとは、内部のものゝ誰しも異存ないところです。ですが、さう〳〵うまい工合によい臺本が出來ませうか。問題はそこです。

もう三十年も前ですが、やはりさういふ議論があつて、稻荷座で桃太郎の鬼ケ島征伐をやつたことがあります。淨瑠璃が先代大隅太夫さん、三味線が豐澤團平さん、吉田玉造さんが猿、私が桃太郎を遣つたことがあります。また新派全盛時代、堀江明樂座で西郷戰爭や雪中行軍―八甲田山中―なぞをやつたことがあり雪中行軍では後藤伍長を遣ひましたが、その時眞白な雪の背景に、兵隊の服が黑、それに人形遣ひの黑んぼぢや引き立たぬといふのであの時ばかり白裝束で出たことを覺えてゐます。その後も日清談判や乃木大將や、文樂でも時に應じて際物をやりましたが、どういふものかうけず、別して『じやんぎりもの』は不評判でした。太夫にも人形遣ひにもぴつたり心もちが來ないんですもの大衆にウケやうはずがありません。

しかし時代です。いつまでもいつまでもそんなことをいつてもゐられません。文樂も御靈時代と違つてからして大阪の眞中へ乘り出して來ましてからは、建物も新しうなり見物にも若い方がドン〳〵殖えてまゐります。それに時代が時代、新しいものへ新しいものへと無條件に飛びついてゆく今の世の中です。この時代の波に逆ひながら、しかも三百年傳統の誇りを捨てずに、古い人形を盛り立ててゆくには餘程の苦心と努力がいるわけです。

たゞ何を申しましてもわたしごもは過去の人物、願ふところはこれからの若いもの、後を繼ぐもの、ひたすらなる藝道への精進です。（榮）（をはり）＝大阪朝日新聞＝

存された。＝寫眞は其遺品＝

人形師 川島富五郎翁の遺作品の發見

阿波人形師の元祖とも云ふべき川島富五郎翁の遺作品を此程和田村の川島家にて發見した、翁は左の碑文にある如く人形研究の爲に京阪江戸に艱苦十年の星霜を積み、明治二十七年八月十八日、七十九の老齢を以て逝去され和田村の共同墓地に其の墓がる因に翁の遺品は極めて少く斯界で重寶がられてゐるが今度發見の遺作品は本縣出身にして本誌の執筆家、後藤捷一氏が保

川島富五郎翁碑文之一節

君諱正富通稱富五郎田蒔貞右衛門之四子母日和田氏文化十三年十一月十日生田蒔氏元京師人白川久太夫避應仁之亂來阿波住川島村世爲神官君父四世祖移和田勤農事稱貞右衛門平政維新始氏田蒔而君因其祖所住地名氏川島其同族傚之者五六君天資剛毅清廉弱冠之頃遊京阪江戸之間艱苦十年于茲而還始製木偶以爲業而富家傳其法於人也多矣有閑則留心文武頗究其要君明治廿七年八月十八日以病歿享年七十九

近松半二と歌舞伎

木谷蓬吟

近松門左衛門は作者の氏神であり、竹田出雲と近松半二とは、その左右の脇立ちの神だといはれてゐる出雲、半二に並んでの名作者としては紀海音や並木宗輔などその業績において殆ど伯仲の間にあるが、然しその技巧派人形淨瑠璃の大成者として、また淨瑠璃作家中掉尾の光彩を放つた巨星として、近松半二の名は、特に吾人の印象に深い。

文樂座では、昨年十一月興行に半二の傑作でありしかも絶筆である『伊賀越道中双六』を通し狂言に立て、この巨匠の百五十年忌を意義付けた。かうした機會のあるごとに、かゝる企畫の下に、古人の面影やその藝術を偲び、勝れた業績を追懷し、そして思ひを今日に致すといふことは、決して無駄な企てゞはない。

半二は大阪で生れた。父は近松門左衛門の友人であつた穂積以貫といふ學者である。以貫は伊藤東涯の

門下で播州から大阪に移つて門を張つた。各種の國字解の著作がある人だけに、又大近松と親交のあつた關係からか、淨瑠璃註釋書『難波土産』を著してゐるのも面白い――或はこれが最初の淨瑠璃評釋書ではなからうか――しかも大近松の藝術觀を識る上において唯一無二の好著であることに多大の感謝を拂うてゐる。

以貫は資性放逸不羈と傳へられてゐるが、その子の半二も、同じく父の血を享けて、むしろより以上に放浪的享樂的であつた。若いころから煙花の巷や遊民の群に交はり、揚句の果が戯作仲間に落ち着いたものらしい。父の無上な淨瑠璃好きと、奔放な學者生活の感化が、與つてこの道に彼を驅つたものと思へる。

半二は、當時竹本座の大御所竹田出雲の門人で大近松とは直接の關係はなかつた。その近松姓を名乘るゆゑんは、大近松がいはゆる作者の氏神であるといふ尊敬心からと、一つは大近松愛用の名硯が彼の手に入つたからでもある。この硯は、多分父の以貫が大近松から貰ひ受けて、更に半二に讓與したものと思はれるが、大近松崇拜の彼にとつては以上もない重寶であつたに違ひない。

半二の淨瑠璃作者としての名は寶暦元年の『役行者大峰櫻』に、竹田外記と連名で見えるのが最初である。以來作者生活を續けること三十三年、天明三年三月、五十八歳で終つてゐる。著作戯曲の數實に五十四編の多きに及んでゐるが、その大半は合作物である。世には半二を一概に歌舞伎作者だと思ひ込んでゐる人達が可なりにあるが、それもそのはずであつて、實際現在の歌舞伎狂言には、半二の原作が一等多數に轉用されてゐるからであらう。

もつとも今日の義太夫劇で第一位を占める人氣狂言は、假名手本忠臣藏、菅原傳授手習鑑、義經千本櫻雙蝶々曲輪日記、平假名盛衰記など、竹田出雲その他の合作にかゝる數種を除けば、他はほとんど半二物であるといつた觀がある。さて、その藝題を列擧して見ると……

妹脊山婦女庭訓
伊賀越道中雙六
本朝二十四孝
近江源氏先陣館
新版歌祭文
心中紙屋治兵衛
奥州安達原
傾城阿波鳴門
太平記忠臣講釋
極彩色娘扇
關取千両幟
三日太平記
敵討祟禪寺馬場

往古會根崎村噂

道中龜山噺

由良湊千軒長者

小野道風青柳硯

以上いづれも歌舞伎狂言の重要な位置を占める名編揃ひであるがかくも多數に歌舞伎の臺本に用ひられた實際に徵しても、彼の作がいかに歌舞伎向きに出來上つてゐたかといふ事實を、立派に裏書してゐると思ふ。

淨瑠璃の院本であり、それが同時に歌舞伎の臺本ともなつた半二の兩棲的作品を、もし斯道の氏神たる大近松が觀たとすれば、ちくらの沖のくらげとでも評しただう。そして『こんなはずではなかつたが……』と首をひねつた上『時代の勢だ』と吐息ついたに違ひない。

そも〳〵大近松と始祖竹本義太夫とが提携して作り上げた義太夫節人形淨瑠璃、即ち竹本座に根を張つた新興人形淨瑠璃なるものは實際『こんなはずではなかつた』のである。大近松等の固持した本領は、どこまでも義太夫節本位であつて、人形は從であり補佐の位置にあつた。即ち太夫三味線の聲曲をもつて第一義とした。故にこの方面に對する努力苦心は非常なものであつた。作者大近松は古來のあらゆる曲節を集大成して、渾然たる義太夫節なるものを建設した。各派淨瑠璃節はいふに及ばず謠曲、祭文、歌念佛、讀賣、萬歲、勞作歌、流行歌、念佛の類までも文中に採り入れて、太夫等をして十分に聲や節を活用させ

た。作者天來の美辭麗藻、その曲調の音樂的な流れも苦心の一つである。詞の中に地があり、地合の中に詞を織り入れた新手法といひ、叙景のうちに情意を描き情を叙ぶるうちにも背景が映寫されるといふ作者獨創の描法も、聲曲劇を効果的ならしめんための努力工夫であつたのである。そして人形には、人形としての活躍舞臺を、それはまた別段に設けてあつたことはいふまでもない。

近松半二の像

要するに、太夫たちの聲曲劇を補助するために人形を操らせ、生きた俳優の持つてゐない味、歌舞伎とはまた異なつた特色を發揮すべく努めたのである。歌舞伎は主として目に見るもの、人形淨瑠璃は主として耳に訴へるものと考へられた。この別色を持つ人形淨瑠璃は、そこに歌舞伎との對立價値があつたものと見られてゐた。

時代の流れは、遂に聲曲劇の藝術殿に押寄せた。大衆の聲はその大改造を促すに至つた。義太夫逝き、近松去つた後に現れた竹本座の座主兼作者の竹田出雲はたうとう大斧鉞を竹本座の頭上に下したそして從

來の藝術的な人形淨瑠璃を通俗的な人形芝居に建て替へた聲曲本位の藝術を人形本位の淮歌舞伎へと導いて行つた。

それがため、舞臺正面を占めてゐた太夫の床を、今の文樂座に見るやうに左遷せしめ、舞臺全部を人形の爲に開放した。人形の動作を劇的ならしめる爲三人遣ひの新手法を創めるといふ風に、其他舞臺裝置に衣裳に、道具に、人形の操法に、續々新工夫を案出して人形歌舞伎の進展に力を盡した。

竹本座の經營主であつた出雲の常に打算的であつたのは當然である。多數觀客の意を迎へるに人形本位の淮歌舞伎劇を以てし、一面また作者であつた便宜から大衆向きの趣向に立脚して技巧づくめの狂言を書いた。果然一般の人氣を集め、道頓堀に人形芝居の黄金時代を築き上げた。

出雲が大近松の『人形淨瑠璃』を『人形芝居』に改造して、時代順應の賢策を執つたはよいが、殆ど隆盛の絶巔にまで達した人形芝居はあまりに歌舞伎に接近し過ぎた。やがて沒落の非運が萠したのは是非がない。出雲や人形の天才吉田文三郎の去つた後、忽ちにして衰退の道に急いだ。

かうした衰運の末期に巡り合はせたのが近松半二であつた。極めて不利な時代に立ちながらも、多くの力作を出し、一時沈衰の淨瑠璃界に掉尾の光輝を放たしめた。

半二が脚色の妙、技巧の冴えはるが出雲以上、大近松以上であつた。それだけに、劇の内容は別として舞臺の面白さは無類といつてよい。登場役々の異彩特色に富むこと、趣向の變化に伴うて展開する役々の動作の色彩など、死物の人形の操作よりも、むしろ表情力ある俳優の演技によつて、より功果的である

ことが認められる。半二の作が歌舞伎に多く轉用される所以である。

半二の作とはいへその大部分が合作であるため、一貫した生命には乏しいが、一場々々の場面毎にそれ〳〵異色があり變化があり、技巧のありたけを傾倒した面白味が横溢する。いはゆる立派なレヴュー劇である。この傾向は既に出雲時代にも見られたが、半二に至つてその絢爛の極致に達したといふことが出來る。彼の妹脊山を見よ、二十四孝を見よ、近江源氏を見よ。

更に彼が最後の名作『伊賀越道中双六』を見ると、當時流行の繪双六を活用して鎌倉を振出しに郡山、沼津、岡崎、伏見、上野と、道中双六の興味を借つて、各場々々に全然異なつた色彩を盛り上げ、面白く力强く、技巧の妙を凝らして大衆の感情を捉へねば止まないまことに上乘なレヴュー劇の扮本ではあるまいか。それに各場の光景が著るしく歌舞伎的に傳色されてゐる。（たとへこの作の扮本が歌舞伎から來たとはいへ）饅頭娘沼津なども、人形よりも俳優向きである。岡崎も歌舞伎の大舞臺を見て一層興があり、殊に幕切れの……まだお手の内は狂ひませぬ、ハ、、、やがて吉左右々々……と笑うて幕は、純然たるお芝居である。伏見船宿の一段は全く歌舞伎になり切つてゐるではないか。

たとへ、作の内容が藝術味に乏しくても筋が渾濁して通らずとも多少無理でも不自然でも部分部分に印象的に感興を惹きさへすれば、それで滿足してゐるのが、いつの時代にも見る大衆の心理ではあるまいか大近松の名作が淨瑠璃にも歌舞伎にもその影の薄いのに反して、半二の作が今になほ生命のあるのは、偏に淨瑠璃プラス歌舞伎のレヴュー式技巧劇の魅力だと思ふ。技巧の力もまた偉なる哉である。

淨瑠璃

阿波の鳴戸に因める珍談

これは阿波人でなく又當の阿波の出來事でないが『阿波の鳴戸』に因んでゐるから一寸紹介して置かふ。

東京で奇人と云へば洲崎の〇〇樓の主人、俳名が生玉――大の天狗だが餘り好い稽古でない、まづい淨瑠璃……『阿波の鳴戸』を稽古して見たが巡禮歌が甘くいかない、眞正の稽古したら屹度良いに極まつて居ると云ふ譯でとう〳〵親子連れの乞食巡禮を呼込んで仕舞つた、家内中は毎日々々の『ふだらくや〳〵』で大惱み、それでも自分だけは會得した積り淨瑠璃は兎に角、詠歌だけは天下一品ぢやと大威張り、恐らく文樂の太夫でも本職の御詠歌を習つた奴は一匹も居まいの權幕明けても暮れても『巡禮に御報捨』をやつてゐたか、家内では面白くないと云ふので上野公園にと出懸けてゐつた、摺鉢山に上つて此處だとばかり荐りにいゝ氣になつてふだらくやをやつて居ると巡査が聞き付けた、見ると可い歳をして御詠歌をやつて居る『オイ貴樣何をして居るのか』の調子で色々聞いてゐる内に査公とう〳〵生玉を狂人にしてしまつて檢束したといふ。

人形三人遣ひの源流

石割松太郎

一

今日吾々が觀る人形淨瑠璃の人形といへば、三人遣ひである。一個の人形を、三人がかりで遣つてゐる事、文樂座の人形操りに觀るが如くである。即ち主遣ひ、左手遣ひ、足遣ひの三人である。『主遣ひ』は、人形の主體を遣つてゐる、その人形の責任者で、左手を人形の背後、腰部から、人形胴内へ差込んで、頭の下部に位する胴串を握り、同じく左手、二の腕への關節の處で、人形の胴輪を支へ、人形を支持して、右手で人形の右手を遣つてゐる。『主遣ひ』を側面から見ると寫眞に示すが如し。(第一圖參照)

ところで、この人形三人遣ひが、操發生當時からの遣ひ方かといふに、決して然らず。元來人形の發生は、傀儡子の人形から來た事は疑ふべくもない。然しどういふ形式で傀儡子の人形が、新興の『淨瑠璃』と

いふ藝術と結合したかは、未だ知られてゐない。これは今後の研究に俟たねばならぬが、むつかしい問題である。吾々がハッキリと、遣ひ方の知る事の出來たのは、元祿三年七月刊行の『人倫訓蒙圖彙』卷七にある山本土佐掾、即ち角太夫芝居樂屋內部の圖に示す所謂差込、又は突込と呼ばるゝ

第一圖　側面から撮影した今日の三人遣ひ　（人形は「陣屋」の彌陀六）

『下より兩手をさし込み人形一つを一人して遣ひ、手すりの上へ首を出さず力一杯差上げ短き淨瑠璃ながら丸一段出遣ひのやうにして遣ひぬ中々見るもしんどく又なるべきこも見へず、中にも辰松は其妙なる所を得て諸人專ら用ゆる所也』（『倒冠雜誌』）

とある後の名人辰松八郎兵衛などの繪畫にも知らるゝ、『差込遣ひ』である。この差込遣ひは、右引用の『倒冠雜誌』乃至『南水漫游』その他の文證・または、右の『人倫訓蒙圖彙』七卷『聲曲類纂』一卷下『牟藝古雅志』下などの所載書證によつて、人々の眼に親炙するところ、茲に說明を要しないであらう。が、問題は

こゝにある。住古、人形淨瑠璃の初期に『諸人專ら用ゆる所』であつた突込遣ひが、どうして今日三人のがゝりの人形式となつたか、そしてそれはいつ頃から三人遣ひが始つたか、差込遣ひから、三人遣ひへはどうして變遷したか？今日まで、この人形淨瑠璃の重大問題を、何人も解きほぐしてゐない。

私は人形操りの研究は、まづこの遣ひ方の變遷を究めずして『人形淨瑠璃史』が構成さるべきでないと思つた。この變遷――『人形三人遣ひ源流』が闡明されて、始めて、人形淨瑠璃史の背柱が、成立したものだと言つてい、と斷言する。この源流を究めない人形淨瑠璃の研究は、鐵筋を忘れた鐵筋コンクリートの大廈高樓だといつてい、。

二

ところで、三人遣ひについて、從來知られてゐる事實は、どんなものであるか？――といふに、私の知る限りでは、享保十九年十月十五日初日の竹本座における『蘆屋道滿大內鑑』初演の時で

『人形遣ひはなはだ上手となり、與勘平彌勘平の人形は左、足を外人につかはせ、人形の腹働くやうに拵始めし也、之を操り三人懸の始と云ふ』（『諸事聞書往來』）今度與勘平より人形の腹ふくるゝ樣に仕初る』（寶曆七年刊『外題年鑑』）

とある。この數行の文證以外には、何事も知られてゐない。元來差込遣は、人形の裾より兩手を突込んで遣つてゐるのであるから、『左、足を外人につかはせ』といふ『諸事聞書往來』の記事が生るゝ以前に、人形に足が付いた時がなくてはならぬ。人形の足は、いつから付いた？といふと

『人形は首計にて着物を打着せ、手も足も遣ひ人の手にて仕たる事にて、近世まで子供の翫びに、デクのボウと言へる物是なり、當代の如き木偶を用ゆるその權與は、大阪の細工人石井飛驒といえるもの、おとなの手を人形の袖へさし込み遣ふ事、甚見苦敷とて工夫なし、人形に手を拵へ付たり、夫より是にならひて足を付、或は手の指を働かし、眼を遣ひ眉を働かすなど、近世さまざま自由に作る、是石井氏の工夫なれば、あやつり芝居にて尊み申さねばならぬ人なり、外題年鑑に云、松本治太夫座にて、源氏烏帽子折といふあやつりに藤九郎盛長、澁谷全王丸二つの人形に初めて足を付たり、其後宇治加賀掾のあやつりにて、世繼曾我のとき朝比奈の人形に足を付、夫より諸流共に立者の人形計に足を付る事とはなりぬ』(『南水漫游拾遺』三卷)

第二圖　足の付いたい人形の差込遣ひ
元祿末か寶永の初の頃
「繪入淨瑠璃史」所載

とあるが、年代がハッキリしない。が、石井飛驒掾といひ、治太夫の『源氏烏帽子折』といひ、加賀掾の『世繼曾我』といふのだから、人形に足の付いたのは、天和、貞享――元祿とは降るまい年代である。

〔註〕石井飛驒掾と山本飛驒掾とは、同人であるといふ明確な證左は、私は得てゐない。が、山本飛驒掾が、或時代で「石井」を名乘つたらしく、

別人としては何としても考へられないのと、『嬉遊笑覽』にも説明はないが、石井、山本兩飛驒掾を同一人らしく取扱つてゐるから、山本飛驒掾(彌三五郎)は石井飛驒掾だとして話を進めてゆくされば、差込遣ひを、下――即ち裾から兩手を突込んだ人形遣ひ方の一形式だとすると、人形に足が付いたらば、どういふ風に足が付いたのだらうか。これには恰ものいゝ畫證がある。第二圖に示す、加賀掾の正本「愛染明王影向松」の表紙裏の宇治太郎左衛門の出遣ひを見るといゝ。この「愛染明王」は元祿末か寶永初年の上演正本だといふ事であるが、これを見ると差込遣に足の付いた人形として、一行の説明をも要すない。挿入の第二圖に就いて見られたい。(水谷不倒氏著『繪入り淨瑠璃史』中卷所載)

これで、差込遣ひの足の付きやうは判つたが、この人形遣ひ方の形式から、どういふ過程をとつて、享保十九年の與勘平の三人がゝりとなつたらうか。疑問はこゝにある。

そしてこの三人がゝりへの遣ひ方の形式を考ふるには、人形に足を付けた初めての人だといふ、石井即ち山本飛驒掾について知らねばならぬ。恐らく飛驒が、三人遣ひの源流を爲してはゐまいか「南水漫游」の著者「操り芝居にて尊み申さねばならぬ人」だと飛驒に就いていつてゐるが、私も飛驒を究めずして、人形操りの歴史はないとまで考へた。三人遣ひの源流を知る鍵は、飛驒の懐ろにある筈だ。これが私の研究の目安で、こゝに人形淨瑠璃史の背柱を見出さねば措かぬ。

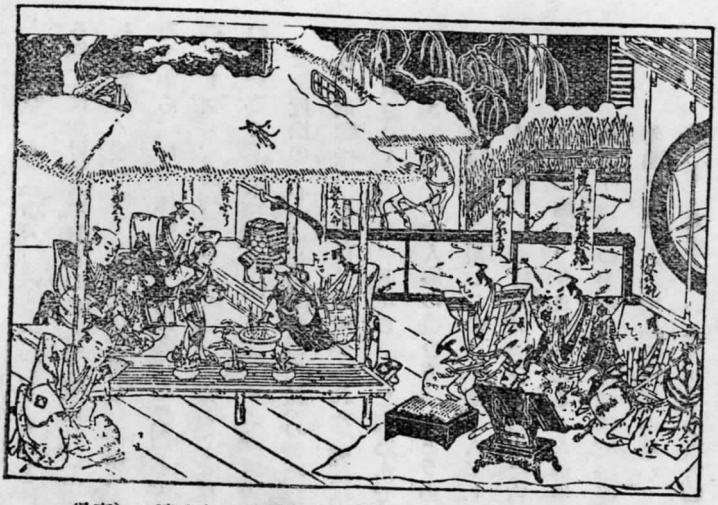
三

ところが、山本飛驒掾に就いては知る處が少い。手妻(或は手品)太夫山本飛驒掾源清賢と呼ばれ機巧

人形派の一人で「小刀一本」で「形あるものを作りて是を働かしむ、別けて水學の術」(棠大門屋敷)を應用する細工にかけては「無双の名人」と唄はれ、山本彌三五郎が本名(?)で、文祿十三年「細工人」として飛驒掾を受領し、翌十四年河内掾を受領した。が、寶永頃に京都の宇治河内といふ淨瑠璃操芝居の名代を持つてゐるから、河内掾は恐らく操名代の受領名ではあるまいかと思ふ。ところで、飛驒は「手妻太夫」として舞臺にも立ち、機巧の口上を述べてゐることは、「勝尾寺開帳」といふ飛驒掾作の淨瑠璃正本の表紙見返へしの、裃姿で「山本飛驒の掾口上」といふ繪によつても明かである。(水谷氏著『繪入淨瑠璃史』中卷參照)

また近松の「心中重井筒」に「包む袂の飛驒掾ふたつ遣ひの手づまにも、斯るなりふりうつすとも」とあるから、飛驒掾の人形は、從來知られた「差込遣ひ」とは、異つた遣ひ方——即ち「ふたつ遣ひの手妻」といふが注目さるゝ一句で、下から兩手を突込んで、兩手で一つの人形を働かす形式ではない事だけは明かであるが、さて飛驒掾の人形の遣ひ方は、どうあつたか、今日まで知れてゐない。

〔註〕飛驒掾が受領したのは、細工人として、或は重ねての受領は操名代としてゞある事を、强調して私が述ぶるのは人形遣ひとしては古往今來我が人形淨瑠璃史上、唯一人の受領もないといふ事が私の持論で、今日傳へらるゝ人形遣ひの受領者は(例へば引田淡路掾を初め)盡く所傳の誤りか、乃至は後世の潛稱、或は政略的の受領を模した名稱の授與だと斷言する。(淨瑠璃太夫の受領は勿論ある、人形遣ひの受領がないと私は言ふのである)近い例が(これは太夫だが)二代越路太夫が「攝津大掾」といふ名を、小松宮殿下から賜ふてゐるが、これは「受領」でない事明かで、人形遣



第三圖　山本飛驒掾系統の片手人形の變遷したる出遣ひ（享保十一年刊「操年代記」所載の「北條時賴記」の舞臺面）

ひ受領名の如きは、この類もある。この人形遣ひに受領のない事は、人形遣ひの業態上の祖先である傀儡子の社會的の身分に根ざしてゐる。されば人形芝居の大成者である吉田派の始祖初代吉田文三郎が、彼の一生を通じて四度觀方によつては五度竹本座に對して反逆を企て、獨立、別座の經營を計畫したのは經濟的欲望や藝の上の自由を望んだのでもなく、一つに「座本」として受領を熱望した結果だと私は解釋する。竹本座にあつて、一人形遣ひの座頭といふだけで、座本竹田近江を凌いだ彼と權勢にも拘はらず、五度も執拗にも獨立を企てゝゐるのは「受領」に目安を置いたとしか思はれない。これは餘談だが「飛驒」と「河內」の重ねての受領についてこれだけ併記しておく。機會があらば、人形遣の受領は盡く誤りである事、引いては音曲に關係の深い彼の逢坂の蟬丸といふ疑問の

人物は傀儡族の頭目株であつたらうといふ事を詳述したい。

〔註2〕人形三人遣ひを享保十九年の竹本座を始めだといふ通説を述べた。が、例の古山師集畫の『役者繪盡し』中の結城孫四郎の説經節人形に、三人遣ひらしい畫證を見る事は、どうあらう。この書の刊行は元祿八年以前ならんといふ推定である。――といふ事もあるが、私が次に述べる「三人遣ひの源流」を一考すると、さし不思議でもない。孫四郎芝居に、三人遣ひの先驅があつたとしても、中絶した先行の一形式だつたらうと考へらるゝ。――孫四郎芝居のは一まづ疑問として次へ讀續けて下さい。

四

即ち山本飛驒椽の遣つた人形の形式が、こゝで分明すると、三人遣ひへの源流がハツキリするのだ。――と、この索線を穫ようと、私は實は必然の努力を盡したのだが、徒勞に終つた殆んど絶望した時（昭和五年十月末）

他に知りたい事があつて、家藏の役者評判記の古い所を調べてゐると、左の一項の記事に出くはした。私は躍り上つた。その夜の仄々と明わたつたのも、私は全く知らなかつたほどだつた。その古評判記にはかうある。――

中之上　山下佐五右衛門

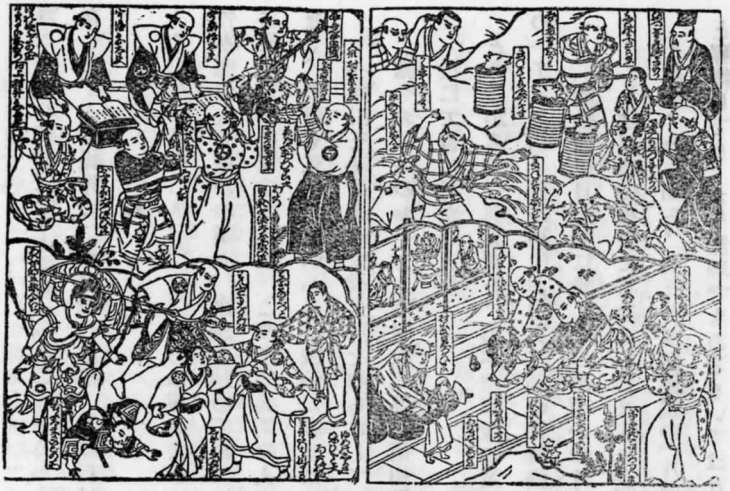
此の人は去冬都へ登りし、出羽が芝居にて、山本飛驒椽遣はれし、片手人形共にとへられませうか、

それをいかにといふに、此度のお役、ちよつと見た所が、片手人形のごとく、うごきそうな物でござらぬ所を、太夫本の引廻しの手をうしろより入れて遣はるゝ故か、一兩年めつきりと所作ぶり、能狂言に成ましてござる、殊に此度初狂言に……是と申すも山下殿の引廻し、とかく遣ての有片手人形、行末たのもし。

とある。それほどの役者ぢやないが、座本の引廻しはしがよろしきを得て新狂言にも、舞臺がよいといふだけの評言だが、茲に注意を要することは「太夫本の引廻しの手」（人形遣の手）が「うしろより入て遣はるゝ」とある。「うしろ」は「背後」の意味である。「下から兩手」を突込む「差込」遣ひとは、明かに違ふ。「下から」は「裾から」を意味してゐる。

「兩手」を突込む差込遣とは遣つて「山本飛驒掾遣はれし片手人形」とある。明かに差込遣ひと違ふ人形の他の遣ひ方が茲に嚴存してゐる事が判る。

そしてこの評判記は、首尾落丁の零本で開板年月、題簽を缺いた逸名の評判記だが、京之部でこの山下佐五右衛門の條りに「今度新嫁鏡に、はやみ甚之丞と成」云々とあり、又「是と申すも山下殿（ゑびすや座、座本山下左衛門をいふ）引廻しの」とあり、澤村長十郎の條りには「此度新嫁鏡に、山形織部の介」云々とあるのに見て、この逸名評判記は元祿十四年三月の刊行と推定さるゝ。卽ち山本飛驒掾が、元祿十三年に受領してその年冬、京へ登つたものであらう。この當時の飛驒の人形は、手妻人形でなくて「片手人形」と呼ばれた事は、この古評判記に明かであるゞ共に、前掲の「二つゞかひの手づまにも」と「重井筒」に言ふ



第四圖　手づまの人形―後の片手人形と差込遣ひの併用されてゐる元祿末か一寶永初年の畫證「繪入淨瑠璃史」中の「愛染王明白影松」の插繪

「二つ遣ひ」――兩手に一個づゝ遣ふ――片手人形なる事は首肯される。

これによつて按ふと、飛驒掾は初め「手妻人形」即ち機巧人形派に屬する細工人の一人であつて、「手妻太夫」と呼ばれてゐたが、自ら起つて、舞台に人形を遣ふに至つては機巧の人形から案出された「片手人形」といふ一つの形式で遣つてゐたものらしい そしてそれは所謂差込遣ひとは全然異つた遣ひ方であつたと解釋していゝ。

即ち辰松八郎兵衛を差込遣ひの代表と見ると、元祿十六年初演の「曾根崎心中」歡音巡り道行のおはつの人形は差込遣ひであつて、しかも足がない、兩手を裾(即ち下)より差込んでゐる。(『辨藝古雅志』)

一方、山本飛驒掾を片手人形の代表と見ると、前掲元祿十三年冬の、その人形は、片手で後ろより差込み引廻はしてゐる。また前掲の近松の「重井筒」は

寶永四年の初演（故黑木勘藏氏考證）であるから、山本飛驒掾の片手人形は元祿末（？）から、差込遣ひと併存して、人形操界に二つの遣ひ方が、並び行はれてゐた事が、これらによつて明かに知られる。

五

ところで貞享二年（或は元年）竹本義太夫が、大阪道頓堀に操芝居の櫓を揚げた當初から、この義太夫の竹本座の人形遣ひの頭取、座頭を勤めてゐたのが、吉田三郎兵衛で、おやま人形の辰松八郎兵衛に對して立役の人形を遣つてゐた。この三郎兵衛の人形が差込遣ひであつたか、片手人形であつたか、何の記錄もなく、畫證も見付らないから、俄かに斷言は出來ないが「倒冠雜誌」の記する處によると

「吉田三郎兵衛は立役人形を專らにして元祖山本飛驒掾に近寄人形の奧儀を極め其頃より大立者、天滿やおはつのおやま人形辰松八郎兵衛相勤むれば德兵衛は吉田三郎兵衛、最初の國性爺も此三郎兵衛役にて世に秀たる人形……

とあるから、三郎兵衛を、山本飛驒掾の系統の人と見て、まづ誤りはなからうと思ふ。そして三郎兵衛の一子八之助、後の初代吉田文三郎の初舞臺をこの同じ「倒冠雜誌」には、かう記してゐる。

「國性爺後日合戰に錄しやの出づかひ片手にてのはれわざ年若けれ共さすが親三郎兵衛の子程有のち〳〵は天晴の役者にもなるべしと人々是をほめけるが……」

とある、乃ち知る、文三郎の初舞臺の「片手にての晴業」と親三郎兵衛を通して飛驒系統の「片手人形」だと解釋しても、さう無理でもあるまいではないか、即ち飛驒の片手人形が、三郎兵衛に傳はり、更らにそ

の子文三郎の享保二年の初舞臺に「片手にて出遣」で好評を博したのである、そして文三郎その他のこの時代の人形遣の工夫によつて、人形の機械的の進歩は著しいものがあつて、この享保の十九年に三人掛りが始めて工夫されたといふ順序である。

乃ち三人掛りが始めて演出される前の差入遣ひと、片手人形との二形式を比較するに、何れの系統から三人がゝりが生るゝかといふ事は、その遣ひ方を一見してすぐ明かなる如く、兩手を裾から差込んでゐる差込遣ひよりは、背後から片手を(遣ひ手の左にしろ右にしろ)差込んでゐる片手人形から發達變遷したらう事は、自然の順序であらう、「與勘平、彌勘平の人形は、左、足を外人に遣はせ」と「諸事聞書往來」に言へるは、後世の主遣ひが、左手で人形を支へ、右手で人形、左手を遣つてゐるのに近いものであると想像するに難くはない、唯一歩前の形式である、山本飛驒掾の「片手人形」が、かういふ片手形式であつたか否かは俄かに斷言は出來ないが、「左足を外人に遣はせ」と「諸事聞書往來」の筆者のいふ與勘平人形の直前の片手人形は明らかに今日の主遣ひの形式であつた事が窺はれる、即ち言葉を換へると、飛驒の片手人形を源流として案出された遣ひ方の一つの形式が今日いふ三人遣ひなのである。

六

今一つ傍證として、二つの書證を、私は提出しよう。――その一つは、三人遣ひ發生以前の享保十一年四月八日初日豐竹座の當り狂言「北條時賴記」は、出語出遣であつた、そしてその舞臺面が、「今昔操年代記」下卷に出てゐる、(第三圖參照)これによつて觀ると、近本九八郎の最明寺も、藤井小三郎、中村彦三

郎の遣ふ人形も決して、謂ふ處の差込遣ではない、左遣ひて足遣ひを缺いでゐるが、今日の三人遣の主遣ひの形式に酷似してゐる。

そして、今一つこの最明寺を遣つてゐる近本九八郎こそこの時分七年の後、竹本座で與勘平の人形を遣つた人なのである、始めての三人がゝりの工夫(?)をしたのが、この近本九八郎だといふから、この「時賴記」の挿繪は輕々に見遁すことは出來ない、今日まで、この手近の「操年代記」の挿畫は何人にも見られてゐたが「飛驒の片手人形」の形式が判らなかつたから、この挿繪に特に三人がかりの源流を見出す事が出來なかつたものだと、私は言ひたい。

更に飛驒の片手人形の形式を知つた眼で、從來と視角を換へて、もう一度、水谷不倒氏著「繪入淨瑠璃史」中卷所載の「愛染明王影向松」の挿畫をよく觀て戴きたい、(第四圖參照)この挿繪で見ると、左の上欄では、差込遣ひが描かれ、右の下欄には、變遷した?片手人形と差込遣ひとが併用されてゐる、そしてこの「愛染明王」は元祿末か寶永初年の宇治賀掾の正本である事を思ふと、そして「手づま宇治太郎左衛門遣ひ申候」とある繪中の說明を見れば、三人遣ひの源流が、この「手づま人形」――即ち「飛驒の片手人形」から發生されたものである事を、明々白々に、その變遷の經路を看取する事が出來ると思ふが、どうであらう?。

斯くて、享保年度に、人形の發達驚くべく長足の進歩を遂げ、前述の如く享保十九年に、三人遣ひが完成されたのだが、その端は、山本飛驒掾――吉田三郎兵衛――吉田文三郎――近本九八郎その他の手で集

成されたのである。そして元文元年三月豐竹座の「和田合戰女舞鶴」で、從來の人形では三人遣ひとしては小さきに過ぎ、遣ふに不便であつたから、板額女を遣つた藤井小八郎は、普通の二倍大の板額人形を拵へた、そしてこの二倍大の人形が月日の經つに從うて、全ての人形の普通の大さとなつたものであるから、明和元年十月、豐竹座の「孃景清八島日記」では景清の人形を、また大きくした、さればこれを逆算してみると、元文元年の二倍大の板額の人形が現在普通の人形の大さで、元文元年以前の人形は現在の約半分であつた事が想像されるのである。

一方、操りの大勢は三人遣ひに翕然として奔つたから辰松八郎兵衛として滅亡したものだらう、そして三人遣ひへの發達が片手人形の源流から發生し、片手人形は、元祿に既にありとすれば、唯一歩の變遷である、三人遣ひの創始形式が、江戸の結城孫三郎芝居にあつたとして、さして驚くがほどの事でもない、この意味において萎微して發達は遂げなかつたが、三人遣ひの早い處は、或は江戸の說教節の人形であつたかも知れぬ。

追記＝「人形三人遣ひの源流」執筆後、尙ほ足らざりしをこゝに追記して述べておきたい。

それは新たに私が「人倫重寶記」(玖珂社記文庫藏本)を見て從來の人形舞臺の發生期のそれとは違つた見方をした事を差加へたい。即ちこゝに挿入の「人倫重寶記」の人形舞臺の挿繪を篤と觀てほしい、この「人倫重寶記」は「元祿九年乙子初春」の刊行である(丙子の誤り?)

この元祿九年頃、若しくはそれより早い時代の人形の遣ひ方は、從來は差込遣ひとのみ知られてゐたが

「人倫重寶記」插繪

この「重寶記」の人形舞臺を見ると、今日まで私どもが見た差込遣ひとは、多少違つてゐるやうに思ふ。試みに「聲曲類纂」に「西鶴諸國咄」から轉載の井上播磨が芝居の圖、同書に謂ふ正保慶安の古畫京師芝居の圖の「上るり內記」の舞臺、及び今一つの「右の下」の圖を見るに、人形の裏が半ば勾欄で隱れてゐる。今日寫眞でいふ「半身寫し」の形である事、「人倫訓蒙圖彙」七卷の土佐掾芝居の上るり樂屋の圖に照合して差込遣の形式である事に、一點の疑ひがない。

然るにこの「人倫重寶記」の人形の裳は、これら前掲の圖とは全く違つてゐる。私が三人遣ひの源流だと示した片手人形の一形式である後年の「北條時賴記」の舞臺繪に、寧ろ近づいてはゐないか。唯人形遣ひが現はしてあるか、現はれてゐないかの相違だけだと見るのは無理だらうか。(第三圖參照)

茲において思ふに、西鶴「好色一代男」(五卷)にある——

人形廻しして遊べと、摔箱より、たゝみ家體取組、上幕つらがくし首落し、五尺にたらぬ內に、金銀をちりばめ、自由を仕懸、六段ながらの出來坊うごき出ける。

とある。「上幕つらがくし首落し」といふは、「上幕つらがくし。」「首落し。」と二つの上下の幕で、「首落し」は高い勾欄代用の幕で、「上幕つらがくし」は一つの幕で、人形遣ひの顔隠しの上幕を指して言つてゐるのではないか。即ちこの「人倫重寶記」の後ろの黒幕は一樣だが、この幕の後ろに人形遣ひが、隠れて遣つてゐる事を想像すると、「人倫訓蒙圖彙」の土佐掾の樂屋の如く腕を一杯に伸して差上げての遣ひ方と違つた遣ひ方、――即ち人形の後ろから手を差込んだ遣ひ方が、もう既にこゝに存してゐるのぢやないか

さう考へると、師重の描く「役者ゑ盡し」の、人形遣ひが半身を勾欄の上に現はしてゐる遣ひ方は、當然の事で、「重寶記」の舞臺の黒幕、即ち「上幕つらがくし」を除けば、「役者ゑづくし」の伊勢、半太夫、孫四郎の遣ひ方になるのぢやないか。

言葉を換へると人形の遣ひ方には、差込遣ひと後ろから遣ふのとの二つの人形の形式があり、勾欄の裝置からいふと、腕を一杯に伸して人形を勾欄の上にのぞかせて遣ふ形式と、人形遣ひが半身のり出して遣ふ形式とが、既に發生期から存してゐたのではないか。

かう解釋すると、「雍州府志」(卷八)にいふ

人形芝居或謂操其式中央正面設舞臺横長五間構矮欄其上下設幕操偶人者居幕内出人形於上下幕間上段幕稱顔隱操偶人者以此幕隱顔面之謂也

とある一文の意義がはつきりと通ずる。西鶴の言ふ「上幕つらがくし」の意ともなる事、この今までに見ない「人倫重寶記」の舞臺繪で、略々察する事が出來ると思ふ。が、どうあらう?(完)

田舍の人形淨瑠璃

文學士　鈴木　馨

一

元祿末期から正德年間へかけて有名であつた京都の浮世繪師大森善清が描いた『しだれ柳』（元祿十五年）は、當時の風俗を語る資料として面白い繪本である。昭和四年五月に東京の稀書複製會で原本そのまゝに複製し、美濃版折本の高雅な木版刷りとして頒布したので、田舍ずまひの我らも之に接することが出來る。

『しだれ柳』は主として島原遊廓の風情を描いたもので、遊女の風俗が中心になつてゐる。その中に遊女がお座敷で人形を使つてゐる圖がある。太夫ほか大小四人の遊女とお大盡とが描かれてゐて、三味に合せてお大盡が片膝立て、扇で拍子をとりつゝ、何やら唄つてゐる。一人の遊女がこれに合せて人形を使つてゐ

るが、その人形は二本さしたおさむらひで、足はついて居ない。裾から遊女が兩手を入れて、人形を働かせて居る。お座敷の慰みとして、元祿の末にこんな人形が行はれたものらしい。

二

これを見て筆者は、幼年時代に老父がいたづらにやつてゐた人形を思ひ出す。明治四十一年の梅雨時、駿河者とか云ふ旅の人形つかひ夫婦が逗留したことがあつた。老父はデン〳〵黨で、下手ながら折々は近在の法樂に招かれて語ることもあつたので、この人形遣ひを招いた。どれだけ稽古したのか、尋常一年生であつた筆者の記憶には更に殘つて居ない。書き割りのふすまや背景を、胡粉だの紅だのいろ〳〵な繪の具で、塗りくつてゐるのが非常に面白く、折からの豪雨を口實に學校を缺席した。この人形つかひのおかげで、小學校皆勤がフイになつたので、今もなほ忘れない。

その人形は、前述の『しだれ柳』にあるものそのまゝで、操りのやうな精巧なものとは雲泥の相違があつた。勿論田舍廻りの旅藝人の事だから、子供の玩ぶ人形の程度を出でないものに過ぎなかつた。操りに類した若干の頭、兩手、それに衣裳、小道具、紙で作つた若干の書割り舞臺、それだけで人形芝居を組立てるのである。

頭は極く小さいもので、雛人形程度に過ぎない。源太とか、團七とか云ふ、操り人形の頭のやうな名はつけて居なかつたが、勿論ふけをやま、娘とか云ふ類別はしてあつた。人形の頭が小さい柳行李に一ぱいあつて、子供ごゝろに老父のまねをして、いたづらをした事も屢々あつた。この頭には勿論ノド木も、ド

グシも無く、指がは入るだけの穴をあけてある。

衣裳も之にふさはしく、種々つくつてあり、鎧かぶとのやうなものまで、一々手細工でこしらへた。衣裳は背後を腰のあたりから背へかけて、縦に切りあけておく。そこから手をさし入れ、頭、兩手を指さきにはめて使ふので、前述の『しだれ柳』の人形が、裾の下から手を入れるのと、やゝ趣を異にして居る。

高座の右側に、人形を使ふ場を高座と殆んど同じ高さに設け、人形使ひは姿をあらはさずに、左右の手に人形をはめて所作をさせるので、老父と相棒の男と二人が中心になり、手の足りない時は臨時の加勢をさせてゐた。

もとより田舍の素義連の仲間が、單に手先のはたらきのみに依つたもので、修練を積んだわけでは無かつたから、女子供の慰みに過ぎなかつた。けれども珍しいと云ふので、當時は近所近郷の呼び物になつた

この小さな人形淨瑠璃が、筆者の近在で何年續いたか明で無いが、もとより道樂仕事で、十分の修練を積まない技術だから、やがて間も無く飽かれたらしい。相棒の男が生計の都合上他郷へ出たので、自然消滅に歸し、當時の道具や人形の一部が、まだ田舍の土藏の中に轉つて居る。よほど記憶のよい人でなくては、二十年前にこんな人形淨瑠璃のあつた事を覺えては居ないだらう。

八十に近い老父は、今も田舍にくすぶつて居るが、昔の事は餘り確な記憶がないやうだ。その當時のありさまを問ひたゞす餘裕がなかつたが、恐らくその旅藝人が何處の何者であつたか、明治何年の事かも忘

れて居るだらう。田舍にあつた、單なる事實、しかも私事にわたる記述を、責ふさぎに寄稿する。筆者の生れは遠州濱松在だ。

（七、六、二三）

三味線の傳來

三味線傳來の經路に就きては傳說區々であるが『三絃考』には『元朝にはじめて製造し流球に傳はり流球より我朝に渡來したるは文祿年間なるべし』と云ひ『糸竹初心集』には石村檢校流球に渡り、親しく習得して歸り琵琶にやつして造り初めたるものなり』と記し『流球年代記』には『後柏原院の御宇梅原少將流球に漂着し按司の女と契り月琴の術を覺え後、日本に歸れり其子石麿月琴よりうつして之を造り弘む、石麿增官して石村檢校となる』と傳へて居るのであるが、『俗曲の由來』には『三味線はもと葡萄牙の樂器にして原名をラベカと云ふ、日本にては訛りてラベイカといへり、始め流球に渡來し、永祿の末年日本に入れり今三味線にはあらす胡弓なり胡弓はバイオリンと同物なり、此胡弓なるラベカは三糸にして弓の如きものに馬尾を約り、これを以て音を出せり、よりて胡弓といへり、此樂器は漸次廣まれりといへども當時の盲人は琵琶に堪能なれば撥を以て彈くに慣れ胡弓を以て奏するを難んじ、遂に琵琶の撥を以て初めたるが三味線の始めなりと』あり、兎に角流球より傳來したりといふ點だけは各說とも一致する。

道行について

京都女子高等專門學校教授
文學士　富倉二郎

一

今日上演される操淨瑠璃には、時代物にせよ、世話物にせよ、時に例外はあつても、多くの場合道行と呼ばれる美しい一節があつて、觀衆に樂劇としての操淨瑠璃の不思議な魅惑を感ぜしめる。

假名手本忠臣藏の七段目お輕平右衛門兄妹の苦忠に潤んだ目は一轉して戀の伽加古川の娘小浪親子の許婚力彌のもとへと急ぐいたいけな道行旅路の嫁入に暫し樂劇的繪畫的な夢に靜かに撫でられる。妹山背山

を分くる吉野川を狹む雛鳥と久我之助の悲戀に泣いた妹背山婦女庭訓の觀衆は軈て『睨めば睨む荻と萩』の橘姫とお三輪との戀爭ひの道行、戀の小田卷の一齣に明るい自分をとりもどす。

道行は一日の興行物としての操芝居になくてはならぬものであるやうである。

竹豊故事は淨瑠璃五段續の組織を論じて

『是を五段に綴るは能の番組に同じ、初段は脇能、二は修羅三は葛事四は脇所作第五は祝言也、大體是に表せる物也、其内第一太夫の重んずる所の役と謂は大序と三段目の切、第二は四段目の切と道行第三は二段目の切と三段目の口也、第四は初段の切と四段目の口也云々』

と云つてゐる。道行は通例四段目の口に置かれる。義理人情の葛藤を主とした悲劇的な、所謂愁嘆場である三の切と略此れと同じ組立ての四の切との中間にあつて音樂的舞踊的色彩の濃厚な道行は一つには觀衆の注意力緊張の經濟といふ上からいつて、又操淨瑠璃のもつ樂劇としての特殊性の上からいつて充分其存在理由と價値とを持つてゐる。

二

一體此道行は如何にして操劇中の重要な一場面となつたであらうか。

元來道行といふ言葉は古く萬葉集以來用ひられてはゐるが、雅樂の方では特に曲の名と用ひられてゐたやうである。體原抄や教訓抄にも見え、舞人が樂屋を出て舞臺に行く間に奏する樂を意味してゐる。

この音曲上の名が淨瑠璃に於いて今日の如き意味で用ひられたのは明暦寛文の頃かと思はれるがそれは

謠曲に於ける道行の語の發展であつたやうである。

併し所謂道行の文體、即一つの修辭としての道行は既におくから見える。伊勢物語の東下りは一つの大きな道行として有名ではあるが、それは構想としてのそれであつて此際は自ら別である。平安朝時代のものとしては忠岑集にある長歌

……心の暗にまどひつゝ、逢坂山を越出て、しげき思ひを山代の、山をうしろにうらみつゝ、うしろめたしと思ひしに、わが身は勢多の橋にわたり、いかにせましと打眺め、近江の海を見やりしに、やむ事波の立しかは、遙に見えし立島のからき別をするがなる、富士のみ山と見ゆれども……

をあげるべきであらう。地名を羅列したにとゞまるとはいへ以後の道行風の詞章の早いあらはれとみられる。梁塵秘抄には『いづれか清水へ參る道』以下『法輪』『根本』の三つの巡禮歌風の道行風の俗謠が見られるが又注目に値する。

かうした心構への文章はやがて鎌倉と京都との交通が頻りになるにつれて、其道中記にしば〳〵試みられる一方、神社、佛閣參拜のことが流行し其參拜道中記として試みられ、軈ては有名な平家物語の重衡海道下りを生み、宴曲の海道、熊野參詣、善光寺修行を生むに至つたものかと思はれる。一は韻文風に一は朗詠風にさうして此二流の融合が太平記の東下りを生んだのであらう。

今宴曲の海道以下三篇を見るに其處には行過ぐる地名を讀み込みつゝ、其間を掛け詞、緣語、頭韻の使用によつて巧みに鎖り合はせる所謂道行の技工が遺憾なく發見される。

……不破の關屋の板廂、眞屋の餘りにまばらなれば時雨も月もたまらず、駒なべて渡る堰の杭瀨河、雨に障れば笠縫の里にやしばし休らはん、なれも契りやむすぶの杜、うらやましくも立並びて、枝さしかはす二木、水の流れて川島のわが墨俣や替るらん……(海道)

道行といふ名は用ひられないが道行風の文體は先づ宴曲あたりで大成されたものと考へてしかるべきであらう。かくて以後の中世の曾我物語お伽草子舞曲等にしば〳〵表はれる修辭となつたわけである。

淨瑠璃は其母體としてお伽草子と舞曲とをもつ。淨瑠璃に道行があるのは不思議ではない。併其始めは淨瑠璃は必ずしも道行を必須なものとしたわけでもなく又見るべきものを持つてゐたわけでもない。

有名な淨瑠璃十二段草子の中には東下りとして

……大磯小磯鞠子川、わか松おい松下り松、かた瀨川を打ちわたり、隅田川をは遠所とてあをさの松原にさしかゝり、花は咲かねど櫻川、身に着ねども衣川多くの名所打すぎて……

の短い單純な道行があるに止まり、此十二段と共に古いものとして擧げられる阿彌陀の胸割には全く見あたらぬ。勿論道行といふ言葉は用ひられてはゐない。

……戀しき人にあわた口、君はとゞめぬかせぎ山、たづぬる人にあふ坂の、關の清水に影させぎ、□□とよりいまぞ大津の□ま□のうみなる舟よせて、のりもならはぬ旅の空、こがれて物ぞおもひける我をあわれみましませと□□よしの山を伏拜みかたゝの浦に引あみの、めごとにもろき涙□□、かいづの浦に舟よせて、なをゆくすへはあらち山、越前のつるがをこへ、かゝやのとをも越過て、越中越

後をさし過て、國郡郷々みのこす方もあらばこそ、戀しき人にあふしうや、ちかのしほやの夕煙、影に忍ぶのさとぞうきと、み□きてみるや衣河、名所舊跡尋ぬれど、戀しき人はなかりけり……

これは說經の『むらまつ』五段目の道行であるがこれなどは當時としては極めて長いものでその哀切な調は後の道行に影響するところ大きいものがあつたらう。

淨瑠璃が三味線と合流し、更に木偶と提携する時此いはゞ道行風な一節はその樂劇としての本性から自然の展開として當然發展して舞踏的要素の多い所作事としての一面をもつた一場面を造つたではあらう。併し事實は此れが發展には歌舞伎に於ける道行の影響が多分にあつたのであり更に此兩者は互に相助け合ふことによつて道行を生ましめたのである。

歌舞伎に於ける道行の最も早いあらはれと思はれるものは『又と世にあるものでない』と云はれた右近源左衛門が舞うた海道下りである。既に古く閑吟集に見える小唄

『面白の海道下りや。何と語るとつきまじ、鴨川白川うち渡り、思ふ人に粟田口とよ、四の宮河原に十禪寺、關山三里をうちすぎて、人まつもとにつくとの、見わたせば勢田の長橋野寺篠原やかすむらん、云々』

を舞うたものである。松屋筆記にも云つてあるやうに當時は尙道行の語は用ひられてゐなかつたやうであるが、寛文の頃の玉川主膳に就いては舞曲扇林に

『主膳は景と曲との二を得たり……道行は尙上手なりき。此頃まで道行舞ふ人稀なりしが、今は人每

にしかも永き道行を舞ふは如何』

とあつて道行の流行がわかる。道行といふ語も此頃から用ひられたものと思はれる。古今役者物語にのつた貴船道行によつて當時の道行を想見しよう。

『くものゑにあれたる駒はつなぐとも二道かくるあだ人に積る思をしらせんこおもふもぬるゝ袂かな

浪のよる〳〵たち出てそなたの神をたのみつゝかよひなれにし道の末おむろに近きをしほ山糺の森の

木のま行月の朧か見もわかぬ浮世はうしの時まいり神のちかひのすゑきよくかも川こへて眺むればあ

とにみそろが池にすむあゝ鳥ならば我も又こひしき方にとび行て今のつらさをしらせんとゆきてはか

へりかへりては又せんかたなみのよるのみちこひしきやみに鞍馬川 水のをちあひうきはしをとゝろ

〳〵とふみ渡りいわまにせきくる波にゆられ〳〵て今こゝに貴船の宮ねにつきにけり』

能がかりの舞踊としての道行はかくて歌舞伎によつて起り、それは説經や土佐や外記の淨瑠璃を用ひることによつて詞章音曲の方で次第に複雜化してゆくと共に、操淨瑠璃も亦歌舞伎のそれに示唆されて次第に舞踊的音樂的要素の濃厚なものを生み出してゆくに至つたものと考へてよい。

道行としてみるべきものは先づ加賀掾の淨瑠璃にみられる。而してそれを大成したものは近松であつた

三

既に宇治加賀掾の語り物に元祿味の豊かな道行があり、それが世人の口にのぼつたことは其語り物の中座敷淨瑠璃として用ひられたものを集めたと思はれる竹子集や大竹集をみる人は容易に推察しよう。七人

比丘尼の白菊道行や源氏六十帳逢州道行等元祿情調の濃かなものがある。

うき思ひ胸にたく火の紫屋町よしみのおろせとやかくと心を添へて吳竹の籠の鳥かやうらめしといとひし廓しのび出、笠深々と身をやつす、出立まばゆき春の日の長い刀に腰卷羽織仇し男と五つ紋つけし袂の打とけて相湯風呂血文誓文起請文、あらゆるこんたん盡したる戀しき男は有明の鳥のなかぬ日はあれど一度あはざることはなし……

此れは松の落葉にも見えて一般に廣く謠ひ囃されたと思はれる石山寺契情大州道行であるが說經の哀切の調から出でゝ其處に元祿狹斜調調の豐かさが見られる。

近松に至つては此傾向は愈甚しい。一體語り物即過去の事件を取扱つた客觀的抒事詞としての淨瑠璃が木偶劇と結合して主情的劇詩となるためにはそこに何よりも現實的傾向の取り入れと濃厚な主觀的歌謠としての抒情的傾向との取入れが必要であつた。而して歌舞伎の道行が淨瑠璃の道行に對しての影響も又こゝにある。而して近松の成功も亦こゝにあつたと思はれる。

『文句は情をもとゝすと心得べし』(難波土產)といつた彼の言葉も面白い。歌舞伎狂言作者として既に充分腕を磨いた彼は歌舞伎に多分に盛られた抒情味と現實味を其作に應用した。俗謠讀賣念佛祭文謠曲等を巧みに取り入れた彼の詞草はよく妖艶な哀調の中に現實味のかつたしかも抒情味豐かな道行を生ましめるに充分であつた。しかも節付の上の希代名人筑後掾を得たのである。時代物に世語物に元祿人は近松の道行に惱殺されたのは當然である。併近松については既に多く云はれてゐる。此處には只當然本文に於て

省略し得ない彼の心中道行に就いて一言する。

筑後掾の竹本座は作者太夫相並んで相當名作を出してをりながら尚藏入面白からず、元祿十六年五月曾根崎心中を出すに至つて空前の大入を占め是迄の負債を償却した事は有名な逸話になつてゐるが、近松の作者としての重要な意味は此世話物にある。而して彼の世話物の大部分は心中狂言であり其等には孰れも誦すべき道行が含まれてゐる。

今昔操年代記に當時の心中狂言に就いて次の樣な記事がある。

『豐竹若太夫（中略）それより修行の爲爰かしこに下り、其もとり堺南の端にて芝居とり組み給ふ、折節いとやの娘、手代の久兵衛と密通現れ娘をつれ萬代（もづ）とやらんへかけ落はたけの井戸に身を投兩人共に死たり、是幸の心中と俄に一段淨瑠璃に作り、さつとした道具拵云つきにして心中泪の玉の井と云ふ外題を出しければ所の事といひ思ひの外あたり、究の日限仕舞大阪に歸り、長門九郎兵衛と語らひ、相座本にて舞のしばゐにやぐら幕、豐竹若太夫とあらため、はなやかなる看板、さかいみやげ心中泪の玉の井と出しける、春頃筑後がたにはそね崎心中、兩家同じやうな仕組、玉の井の奥、久兵衛おち道行の內に、さのみしみ〳〵なけかずとあゆましやれ、さきには鬼はないものと初冠より町中に口眞似させ、次のかはり金五郎うき名の額、是も一段淨るりにて茶屋名よせの道行にまことに小さんと我中はあのほり詰の二つ井戸、ごちらを見ても深ければこ、浪花のわかい衆によろこばせ、そね崎道行同前に、此稽古本京大阪の淨るり本や、門ならべ板行してひろむ』

これは心中道行が常に昨日今日の生々しい巷說を題材とし、此興味も又此點に負ふ所大きいのを示してゐる。

近松の心中道行も、其好評は彼の麗筆によるとはいへ、又其處に演出される事實が今日の巷說であるといふ點に其興行價値の一半を負うてゐた事は見のがせない。

天網島の硯川の道行は『走り書謠の本は近衛流』と書き出した所から一夜作りの急作であると傳へられて、其點が有名であるが、此翁草の傳へが事實か否かは別として、ともかく近松の世話物の道行が常に出きるだけ生々しい事實を取りあつかはんとしたことを語るものとして面白い。現實感から兎角離れたがる木偶劇の材料として巷說は、しかも昨日今日の巷說は觀衆にまことらしさを求める心がある以上有利な題材である。しかも世を擧げて現なき歡樂の夢に日も尙たらず醉めては急轉直下義理の柵も黃金の重荷も投げうつて散る花の心中道行に末路を求めるのを潔しとした當時の民衆にとつては哀艶な近松の心中道行の魅力の恐しさは到底今日の人には想像もつかない事と思はれる。時代を知れば知る程私は彼の道行の現實味に感嘆する。

近松の書いた道行の數は非常に多い。鸚鵡の袖鸚哥の園にある道行の數だけでも恐ろしい數に上る。今近松の書いた道行をみると大體四種に分けられよう。即本來の道行——それは時代物に多い本格的なものである——寺社指の道行狂亂道行、心中道行である。而して其中でも近松の麗筆は其現實味と悲痛と妖艶との味に於て心中道行に最も自由に驅使し得たことであらう。

今日道行といふ言葉のもつ濃艶悲痛な情調味は近松によつて與へられたといつていい。

四

近松より前から既に五段組織は成り、加賀掾のものにも又西鶴のものにも、同時代の海音のものにもすぐれた道行があり、それは必須なものとなつてゐたのではあるが道行の大成者はやはり近松といはねばならない。それは筑後掾の節づけに負ふ所も勿論大きいが作者の側からいへば詞章の巧みさが第一だつたのである。從つて近松以後の作者がこれが詞章に痩せる程の苦心をしたことは申すまでもない。

近松に師事して劇界の亞聖と讀ばれる千前軒出雲が所用あつて江戸に出てゐる留守伴の小出雲が『新薄雪物語』を書いて四段目の道行の冒頭に『旅立に日の吉凶を擇はぬは落人の身の習かや』と書き出したがいかにも心許ないので早飛脚で其原稿を父のもと迄送つたのは有名な話である。又半二が妹背山の小田卷の道行でお三輪と橘姫との戀爭ひの道行に『睨めば睨む荻と萩』の一句案出に數日を費した話も人口に膾炙してゐる。

併尙此れを近松に比する時彼等の道點の特色は其詞章のもつ節付の巧みさと人形振とにあつたやうである。其中有名なものに妹背山道行、忠臣藏道行、菅原道行、花原圖道行、日高川道行、楠昔噺道行、うすゆき道行、千本櫻道行、芦屋道滿道行、椀久道行、近江源氏道行、桂川道行、お染久松道行、信仰記道行三國女郎道行等あるが中でも人形道行の三絶と云はれるものは妹背山と忠臣藏と千本櫻の道行である。

此等はいづれも其人形振りに特色をもち抒情詩的文學性よりも創詩的舞踊性がかつてゐるやうである。

妹背山は小田巻を用ひた三人の道行として其舞踊的効果が高く、忠臣蔵は深窓の娘の振の美しさがすぐれ千本櫻に至つては櫻花爛漫たる吉野山を舞台に美しい振袖姿の靜御前と狐の早替りに其特色をもつてゐるのである。

所謂世話物の心中道行は悲劇的氣分が勝つてゐてそこに派手な舞台的要素にかけてゐるがために、文學的又音樂的にはすぐれてゐても後日上演された場合それが直接觀衆に三面記事的興味を訴へぬ時は損な上演物であつたと思はれる。世話物の心中道行が當時異常な好評を博しながらも以後多く上演されない理由はそこにもあつたと思はれる。

五

明和の頃から操劇は世の好尚の動きと共に次第に歌舞伎に近づかんとしたがそれは木偶劇の劇的要素と歌謠的要素との間の破綻を生じ木偶劇は歌舞伎に其の位置を讓ることになつた。

而して道行は歌舞伎の世界に入つて長唄富本清元等の所作事となつて行つた。妹背山道行が常磐津願系緣雪環に、お染久松が清元道行浮塒鵲に、新口村の燒直しから勘平おかるの清元の道行旅路の花婿が表れた樣なものである。

尙道行に就いては語るべきことが多いであらう。今は只道行に就いての題下に視野に入るものを簡單に書きとめたに止まる。この邊で一先づ筆をおく。忽々筆を執つたもの且菲才調査の不行屆の點も多々あらうと思ふ。寛恕を乞ふ次第である。＝カットは妹背山道行小田巻の一場＝

阿波の生んだ淨瑠璃本書き

豐竹綱惠太夫

阿波の誇として淨瑠璃本書きの豐竹綱惠太夫事堤常吉氏を紹介する。

氏は明治二十六年國府町矢野に生れ、昭和七年の現代に於て和田の天狗久翁と綱惠太夫とは斯の藝術界に於て實に二大巨手と云はなければならぬ。

綱惠太夫は居を小松島に占め、此人は何樣淨瑠璃が數寄であつた、其筆蹟を見れば美的で而も筆力豪健生龍活虎の勢いだ殆んど深林に嘯くがやうである。

氏は十七才の時故郷矢野を出て二代目上總太夫の末弟子と成り、三代目上總太夫に隨ひ人形座に加入諸國巡行せしも雛聲を悔みて引退、後大阪竹本洋拜太夫及かづらの肉筆を手本として學ぶ事二十年一度筆耕學に入らず揚々たる姿勢眼光極めて巨大、字くばりから文法論など迚ても富ることが出來ぬ。

誌代集金に就て

誌代發送の手數を省く爲めに遠距離の會員諸氏えは集金郵便を差立てる事と致しましたが然し御承知の集金郵便は金參圓以上でないと受付けない關係上金參圓に滿たざる節と雖も剩余金は次號の誌代として金參圓の集金郵便を差立てますから以上惡しからず御含み下さいまして御拂込方御願申上げます

阿波郷土史研究會出版部

つもる人生でつのひめぐ

線面張繰繰紡り

人形師　吉岡久吉氏

「天狗久」で通つてゐる人形師吉岡久吉さんは。阿波名東郡國府町の和田に唯一孤壘を守つて鑿の味と刷毛の匂ひに陶醉してゐる珍らしい人です。阿波は淨瑠璃の國人形の國といはれたもの、時世が變つても矢張り古い物は懷しい。

操人形師としては日本國中唯一人といつても宜い人が此阿波に殘つてゐる事も嬉しいではありませんか。

お爺さんは今年七十四の齡ひをしながら電燈の下で八ポイント活字の本を眼鏡なしに讀んでゐるだけ、そんな高齡とは思はれない程達者で元氣です。そして六十年近くを殆ど座りつゞけて來た仕事場で得意の鑿を動かしたり刷毛を嘗めたりし乍らはつきりした聲音で話しつ

ゞけて行きます。張りぼてや、彫りかけた人形の首がにこ〳〵と此方を向いて笑つてゐます

浄瑠璃の味が、日本の傳統音樂の最上のものであるといつても過言でないのは眞實でせう音曲の妙に添ふるにこの美しい人形をもつてした日本人の心情の優雅を私たちは忘れることが出來ませぬ。依つて本誌の人形芝居特輯號刊行するに際し久吉翁の話を後日の記念として掲載し得たことは誇つて良いことだと思ひます。（カット文字は豊竹綱惠太夫筆）

細工場の窓から覗いた人形芝居の變遷

私が人形師になつてから一番阿波に操人形の盛んであつたのは明治十年から二十年頃までゞした。がまだ〳〵明治年間はさう悲觀時代でありませんでした。しかし明治二十七八年の日清戰爭の後に壯士芝居といふのが生れ、之れが當時の珍らしがりの人氣に投じて歌舞伎芝居が生れたのと一緒に人形芝居にも響いて來た樣です。其次には桃中軒雲右衛門なんといふのが大に喜ばれた浪花節の出現です。

何しろ十人ばかりの一座で一圓といふ樣な高い木戸をとつてゐるのに人形芝居の方では人形の大荷物がある上に遣ひ手があるし太夫があるといふのでいくら少なくても三十人はゐる。おまけに木戸が十錢、二十錢高いのでも五十錢といふのですから費用ばかりかゝつてみいりは少ないと來てゐるから立つて行かない。私共が聞くと一圓の浪花節の太夫と五十錢の義太夫とでは較べ物にならない程義太夫の方が上だと思ふのだが流行と人氣とはいやな物で押しながし行く大衆の勢を何としても理屈で堰止める事は出

來ません。それが爲に又節劇なんといふ物が出來て今度は少し飽かれかけてゐた壯士芝居の後身である新派劇がその爲に打擊をうけたばかりでなく、一般の古い興行物は皆一樣に打擊であつたのです。斯うして來る毎にじり〳〵と其領分を蠶食せられてゐるうちに止めを刺されたのがあの活動寫眞でした。安くて早くて目さきがどし〳〵變つて行く活動寫眞には何といつても追付けません、之れにはすべての興行物がひごい目に叩きつけられたのですが最も憂目を見たのは人形芝居であつたのでせうぞか落にすつかり衰微してしまつたのです。

操り人形の盛んな時代に私共人形師の仲間も行つてゐましたが今は歸つてゐる樣ですけれどあまり仕事はしてゐない樣ですし、板野郡大津村の大代に大江榮松といふのがありましたが、之は人形師といふよりも獅子の頭や、神輿に飾りなどを作つて儲けて人形は副業といつた風でしたから餘り上手でもありませんでしたが、其息子が親父の跡をついでやつてゐますものゝ、本物の人形師といふのにはまだ〳〵でせう。今では玩具の人形を主に作つてゐる樣ですが

人形の製作（一）
桐を材料とす　横顔を示す　荒たしの頭の

も澤山あつて此和田にも私の家の東に『人形忠』といふのがあり西に『大江』といふのがあつて三軒共夜も晝もぶつ通しに仕事に追はれてゐましたがそれが今では私の家一軒になつてしまい國府町以外の同業者もすつかりなくなつてしまつたといつて宜しいようになりました。尤も外に名東郡國府町の矢野に近藤辨吉といふのが、私の甥で私が敎へて文樂へ

仲々熱心て、色々と私の所にも研究に見えます。

不景氣と惠比須の注文

不景氣だ〳〵といふ聲が高くなつて世の中が妙にしづかになればなるほど私の店へ妙な注文が殖えて來ます。それは惠比須さんです。惠比須さんでも祭つて景氣直しのお願でもかけるのかと思ふと仲々そんな呑ん氣な沙汰ではありません失業時代の悲鳴とでもいふのでせうかいくら失業したといつても遊んでゐては食ふ事が出來ないから其所で手つとり早い所で、五六圓でも元入れをして惠比須廻しに出やうといふのです。ですから不景氣だと殖えるのです。

人形の製作（二）　一の正面

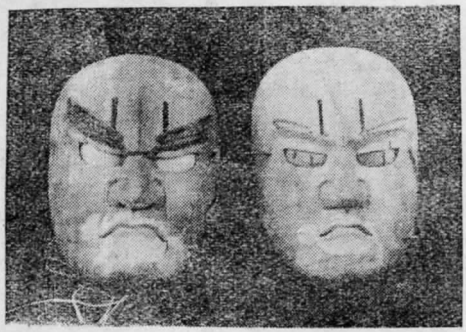
全國的に見た操座の分布矢張り關西に多い

今私の所では操り人形も作れば張りぼても拵へ、玩具の人形も製作して居りますが、專門としては操りです。一口に人形といつても色々な種類があつて生人形は今こそ東京や大阪でも出來る樣になりましたが、其本家は熊本の松本喜三郎で今でも松本喜三郎の作つた

のは際立つて見事です。市松人形は京都が本場で東京、大阪が宜いといふのが定評で、本場物には眞似の出來ない宜い所があります。

操り人形になると之は阿波が本場で文樂などでも一寸した修繕位なら座附の人形師が居つて遣りますが、少し手の込んだ物になると出來ないので皆私の所へ持つて來ます。

全國で操り人形の盛んな所といへば、山口縣と鳥取縣、大阪の文樂、淡路と阿波、淡路には今も座が四つ許りあつて仲々盛んですし、阿波では衰へたといつても、德島市の新榮丁にもありますし、三好郡の方へ行くとまだ〳〵あります。紀州にもぽつ〳〵ありますが之は素人が道樂にやつてゐる樣です。西へ行くと愛媛縣の宇和島九州では熊本縣と、宮崎縣です。讃岐にも以前はありましたが、近頃さつぱり注文の來なくなつたのを見るともう無くなつたのでせう。最近に名古屋に新らしい座が出來て三好郡から小さい座の人形を買つて行つて始めたのが甘く當つたらしく、注文が來るのです、仲々評判が宜いらしいのですよ。妙なものですね。



人形の製作（三）

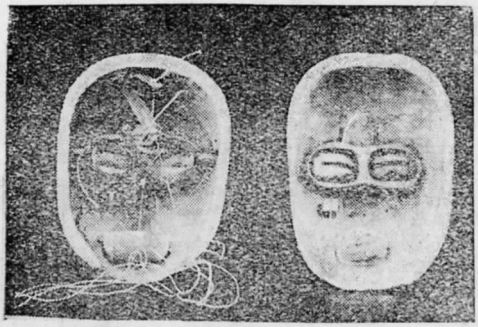
頭を二つに割り中をくりぬいて（右）眼と唇を入れる（左）動かすからくりをつける

文樂と源之丞

文樂の人形の頭は源之丞のに比べると顔が一寸五分小さくなつてゐます。だから頭全體からいふと半分位しかない樣に見えます。すべてがそれに準じて小さいものだから源之丞に比すると遣い易いので遣ふ上にも纖細な技巧が凝らせるといふものです。それに一つの藝題を出すると二十日間もぶつ通しで同じ物をかけるから遣ひ手もいたつて甘くなくちやならない譯です。所が源之丞になると、同じ藝題の二日もかける樣な事は殆ごない、廻つて打つてゐるものだから毎日々々藝題が變る、夫につれて遣ひ手の調子がすつかり違つて來る。おまけに人形が大きくて重いから遣ひにくいので自然拙いと見られるのでせうが、私などは矢張り源之丞に味がある樣に思ひます。近頃女文樂とかいつて若い十五六から十七八才位の娘が一人で遣ふ座が出來てゐる樣ですがあれは美しい若い娘で大衆の目先を代へると云のが狙い所でせう。頭は糸で頭へ引かけ、足は脛にくゝりつけてそれで遣つてゐる樣ですが元來人形は顔には顔、手には手とそれぞれ呼吸があり苦心があり地の義太夫につれて數人の息がぴつたり合つて人形に生氣を生じて來る所に人形芝居本來の味があるので迚も一人遣ひなごは問題にならないでせう。顔の動き工合にしても源之丞の方が文樂よりも複雜になつてゐます。又人形の製作方法にしても時世と共に工夫を加へるのが何程かづゝ變化して來ました。眼、口、眉などの動かし方にはそれ〴〵引く糸に番號があつて、遣ひ手はそれを心得てゐるから眼をつむつてゐても動かせます。頭と頸とは別々になつてゐて大糸をぐつと引いてゐると頭が動かな

くなる、それにつれて小さい糸を引いて眼や口を動かすのです。唯上村源之丞一座だけは今でも古例を守つて三番叟だけは、猪首といつて頭と頸と一緒になつて動かないのを使つてゐます。一番叟二番叟は目も口も動かないのを用ゐ三番叟になつてから猪首の人形を遣つてゐますが之もよし内部がいたんだ時に非常に厄介で、どうしても専門家の操人形師の手にかけなければ修繕が出來ません。

頭と頸と別になつてゐる方でしたら内部のからくりが破損しても大概の事なら専門家でなくとも器用な人形師ですと頸を外して修繕が間に合ひます。文樂にしろ、淡路の六太夫とか六之丞とかにしろ皆三番叟でも頭の動くのを使つてゐます。けれど前にも申した様に源之丞だけはごこまでも古例に則つて猪首の方を遣つてゐます。之れだけは源之丞の特色です。



人形の製作（四）　三の裏面を示す

頭と腕が巧拙の岐路形が出來ると骨相の研究

人形師といつてもピンからキリまであるので一口には言はれません。器用なら誰でもやれるかといふとさうも行きません。まあ形が出來る様になつたとしたら一人前だといへばいへるでせうが、それ以上になると何所がとまりになるとはいへませんね。たとへば劍道にしても初傳、中傳、習傳、印司といふ順序を踏むと同様に腕と頭

の働きで上手と下手とが別れる話なんです。私なぞ外に同業がないものだから落が頭になるとまあお山の大將を氣取つてゐられる位のものなんです。

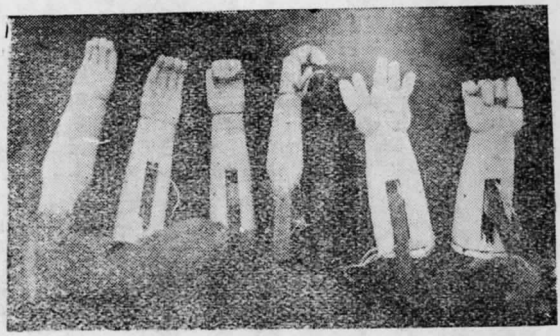
製作の方になりますと、義經の顔、靜御前の顔といつた風に土臺になる繪圖があつていつもそれを見て作るわけではありません。チャンと頭の中へ疊こまれてゐるので大體の形は出來るわけですが、それだけではまだ〳〵立派な人形師とはいへません、其所に研究と苦心を要します。形が出來る樣になると骨相の研究に這入ります。大石內藏之助の頭一つを作るにしても第一に赤穗の家老だつたといふ事を考へる。而し家老といつても、阿波にもあれば土佐にもある。至る所の大名の家に家老はゐる。長い顔もあれば丸い顔もある扨どれが適當だらうと思ふ其處で今度は其性格を考へる。大石內藏之助は非常に賢い人間であつた。度量の大きい人間であつた。統領の材であつた。だから深謀遠慮の相が現れて來なければならない。斯うなると、仲々繪圖だけでは出來なくなるでせう。娘の顔を持へて呉れと賴まれると誰でも十七八の女を作りますが、女の顔だつて決して一樣では有ません。

人形の製作（五）
出來上つた顧のいろいろ

昨年德島へ來た延若なんといふ役者になると、年增にもなれば若い娘にもなり『冥途の飛脚』では忠兵衛にもなるといつた樣に扮裝して大した不自然さを感じないにしても人形だとそんな融通は利かないから如何しても製作の上に苦心が要ります。

之れだけ苦心慘憺して作つた頭と繪圖を手本にして作つた頭とどれも人形の頭には違ひないから『何所迄が一人前か？』といふ事になるではありませんか仕事のコツといふものは仲々敎へやうといつたつて敎へられるものではありませんから一通りの型が出來る樣になつたならそれ以上は自然に自分に自分が會得するより外に道はありません。即ち巧拙の岐路が生じて來るわけです。私など何の考へもなしに此道に這入つてうか〳〵と六十年近くも過ごして來てゐるうちに時代が變つてしまつて斯んな風になつてしまいましたがそれでもまだ〳〵すつかり人形座がなくなつた譯ではないので一年中仕事があつて食ふ事には不自由しませんが今になつてやつと氣がついて考へてみると之れだけ苦心してする努力を外へ向けたらもつと金儲けが出來るだらうと思ひます、だから人は若いうちによく考へて這ひる道を選ぶ事が第一ですよ。それでも物好きがあつて弟子入りをさせてくれといつて賴んが來るのもありますが、『其麼馬鹿な事をするよりもゝつと金儲けになる方へ、お考へなさい』と言つて斷つてゐます。

私の家も悴があゝをついでゐましたが早く死んだので孫は斯麼事をしやうとせず私一代で跡をたつ心算でゐましたがせめて修繕だけでも出來る樣にして置いて呉れなければ困ると頻りに云はれるので一番末の孫に、ぼつ〳〵やらせて居ります。



人の製作（六）

出來上つた手の一部が固定し結ばれてゐる。
いろいろな指が接續されてゐる。
（向つて右）五本の指が別々に動く。
（中）拇指、四本の指が接續されて動く。
女の手、以外の指が接續されてゐる。
（左）安物の手、もつと動かない。

芝居が衰微して其方の注文が減つて來ると今度は全然違つた方面からの注文がたまにある樣になりました。それは好事家で珍らしい物を蒐集してゐられる人達でした。鳥居博士や安田系の銀行を廻つてゐられた安田さんなども三つ四つ持つて歸られました、それと一緒に珍らしがつて態々此阿波の爺が名士訪問を受ける樣になつたのも思ひがけなかつた事の一つです。同業者が盛であつた時分には振返つてもくれなかつたに比較に衰微して來ると前の鳥居博士や米國のスタール博士、岡山の高等學校の教授の松本さんなんかも此汚ない店へ見えられ又新聞社の方なぞもお尋ね下さつて記事が新聞へ出ると途方もない所から注文が來るといつた風なんです、之も長生の餘德でせうから、もう二三年は生きさして貰つて仕事を續けたいと思つてゐます。何か注文があつてもそれが張りばての雜物なら直ぐ『よし來た』と請合はれますが手の込んだ凝つた物になるとかゝるのが臆劫で仲々手がつけられないので宜しう御座ゐますといつて置いても一日延びになつて思ふ樣には運びません、畫の大家なぞが容易に書かないのも同じ樣な氣持ではないのでせうか。之れから少

し製作上のお話を致しませう。

一體の人形が出來る迄難かしい生地物塗仕上げは三分の一の値段

順序から云ふと生地の彫刻それから中のからくり最後に仕上げですが生地の彫刻が一番難かしいとされてゐます。それが根本ですから非常に苦心を要します。所でいくら立派に生地が出來てゐても塗りが惡いと臺なしにされてしまふし生地が少々惡くても仕上げの方を上手がすると見違へる樣になります。すると仕上も大切だといふ事になつて來ます。矢張り一番大切なのは最初の生地の彫刻なんです。

内部の目や眉や唇を動かす裝置は型に這つたものですから一通り覺えれば何でもない事なんです。

生地物といつて佛像やなんかの樣に塗りをかけない生地の儘の彫刻物と塗り仕上げの方を比較すると生地物の方が三倍位高くなります。其理由は生地の儘で出すのですから微な瑾であつてもならないし、彫刻にも手が込むのですから隨つて高くなるのです。

塗りだと少々の瑾などは塗りで隱くせるし下の生地にも手が拔ける無論塗る爲に手間は、とれますが塗で仕上げる手間と彫りばかりで仕上げを手間と比較すると塗の方が餘程樂だから從つて安く出來るわけなんです。

頭だけに五日もかゝる

さて之れからいよ〳〵頭の製作にかゝりませう。材料は桐です之を適當の大きさに挽切つて大體の形を拵へると下圖を畫いて塗を當てます。そして順々に下圖をかき〳〵彫刻を進めて行きます。

頭の形が出來顏の全部が出來上ると耳を仕上げるそれが濟むと耳の少し前の所から竪に眞二つに挽割ります。そして緣を三分ばかりの厚味に殘して中をへります。眼瞼や唇の下など回轉する物を嵌入する所は紙の樣な薄さに繰りとつて眼球と唇を入れます。之も皆材料は桐です。眼球は二つの異つた糸の引き具合によつて上下と横とに動く樣になつてゐます。

引く糸は全部絹絲を廿本卅本と合せて之によりをかけたものです。絹絲でないと切れる怖れがありますから他の絲は用ゐません。バネには鯨の齒を薄く削つて使ひます。

今ではゴムの樣な便利なものがあつて使つてみると工合は非常に宜いのですが長持ちがしないのが缺點で二年位すると使はないでも駄目になつてしまひますから修繕する場合に一々頭を割らなければならんので厄介で使へません。

鯨の齒だと蟲にさえ蝕はなければ三十年は持つてゐます眉毛は銅の板をつかひます。斯うして內部の裝置が出來上ると頭の前後を合はせ繼ぎ目を張つて塗りにかゝりますが三回塗つてから鮫の皮か荒いペーパーで擦つて均らしまた塗りをかけて三回位すると木賊をかけて丹念に擦つてよく手入れをし、木綿で拭い

て又塗りをかけ、今度は十回位塗つて乾かせ布切れで入念に拭いてゐると光澤が出て來ます。最初のぬりから仕上げ迄に三十二回手がかるものとしてあります。

頭一つ拵へるのには普通の物で五日ばかりかゝります。

値段は其所いらで先づ十圓位、安い所なら六七圓位で出來ます。女物は大體に於て手間はかゝらないのですが髪やなんかゞ金を食ふので七八圓といつた處です特に凝つた飛び切りの上物になると分はありません。次は手ですが之れにも通りがあつて關節が全部屈伸する樣になつたのは先づ六圓、一番安いので一圓八十錢、其間に三圓位のがあります、胴は空胴で角力取のだけは裸になる事があるから別に胴禮を拵へますが其他は金輪に骨を入れた儘です、で十圓の頭に相應しい手足を揃へるとして人形一體に二十圓はかゝるでせう、無論衣裳拔きです。安い物なら十五六圓でも出來ます。玩具の張りぼて人形の頭なら三十錢位からでも出來ますが目引きになるとも少しかゝります。

一座の持つ人形の種類

前にも申した樣に、内藏之助の顏、義經の顏、光秀の顏といつた風に一々吟味をして行くと仲々難かしくて、藝題々々の人形を全部違つた物で揃へるとなると、旅から旅を廻つて行く一座では荷物が大變大嵩なものになつて來まして運搬の費用に金がかゝつて仕方がないばかりか、第一資本がたまりません。そこでまあ『太功記』と『忠臣藏』と『妹背山』と云つた藝題の人形と衣裳とを持つて居れば大抵の藝題がつ

とまるこいはれてゐます、しかし小者などのは別に持つてゐないといけません。『大江山』を出せば酒呑童子の頭がゐるし『玉藻前』を演れば狐が必要だといふ風に特殊なものは持つてゐないと間に合ひません。お話しすればまだ〳〵いくらでもありますが、あんまり長いもの御退屈でせうから之れ位の處で失禮させて頂きませう。

殘暑御見舞申上候

和昭七年九月

東京代々木一一一八番地
久保義八郎
電話四谷二三八二番

殘暑御見舞申上候

昭和七年九月

一宮松二
住所　名西郡入田村矢野
勤務　德島縣立池田中學校

血染の指

その一本！

近世名人『越路』を生む

新町の廓情緒

小川袖香

民衆藝術の殿堂、阪地文樂が燒失前の御靈に於いて既に人形淨瑠璃の寶石を抱いて居た古き時代に淡路から生れ出た淨瑠璃太夫で、越路から後ちに攝津大掾とまで經のぼつた其の大掾の多くの弟子ごものなかで砂中の金とも見え、ゆく〳〵は我が前名の越路を襲がしたい若手に佐の太夫があつた。

時代、世話行くとして可ならざるはない越路に其の音聲に於いて、其の節調に於いて恰がら師匠其の儘とも云ふ可き佐の太夫は慥かに攝津の秘藏弟子であり、大掾としては徹頭徹尾可愛くて堪らなかつたのである。

其れほど佐の太夫は技藝に於いて天禀の才があるばかりでなく、背はスラリと高く、俳優にしまほしい

容貌であるので、新町、堀江の色町ではさアちやん、さアちやんで若い藝者、あごげない舞子に持て囃されて居た『藝が好くて男ぶりが好く、其れであたい等が惚れてあげるさかいに、文樂の人氣が向上して道頓堀の芝居がうろたへるのだワ』と、御靈のハネるを待ちかまへて其の儘誘惑する、思ふこ嚴格な師匠を持ち居る佐の太夫としては、行く〳〵第二の越路たる名門の寵兒、碎いて言へば鳳凰の卵である自分だから、いかに女どものワイ〳〵騷いでも此許自重して謹嚴に藝術に精進せねばならぬと腹を据えては見たが何しろ美くしい女にチヤホヤされて、剩さへ特別な待遇を得るのだから、知らず、知らずに墮落の淵に落ち行く。

こゝで師匠の大掾は可愛い弟子であるから膝に吸ひ寄せて前途のために嚴しく訓戒した。けれど。

賑やかな道頓堀の夏の夕べ。チラ、チラ流れに映る紅提灯、櫓の手を休ませた屋形の涼み舟。それに何處からともなく身うちを唆る三味線の音色河岸の樓に反響する冴へた撥。それに交つた女の噪いだ聲が一とわたり河面を撫でると、あとは甘つたるい歌がヂンこ陽氣に煽つて來る、それにまた雪洞の火が沈んだ水に美くしく銀鱗を漂はして居る。

『さアちやん、もう更けたよ今夜は泊らう……』

と、可愛い女から切々こ迫られた其の夜の享樂を思ふと、嚴めしい師匠の自分に對する訓戒も次第に麻痺しそめて、彼はいつしか酒色中毒患者になつて仕舞つた。

若い身柄には殊に藝人には有り勝ちな耽溺だこ、此儘に打ち捨て置いては破滅の基であると、大掾は思

ひ切つて懲らしめのため破門をした。破門された佐の太夫は今後の身の振り方に窮して、

『以後屹度魂を入れ更へて藝道に身を盡します』

と詫を入れたけれど、師匠の大掾は一度や二度の訓戒ではなくこゝに最後の手段をとつたのであるから、只だ口先きばかりのお詫のみでは芯からの悔悟が顯はれて居ないとあつて、斷然受けつけなかつた。

こゝで佐の太夫は取り付く島もなく途方に暮れたのであつた。

當時に於ける師弟の關係は總ての藝道に嚴格であつた、其の修業が眞劍味に死生を往來し居た、血に滲む難行苦行が汝を玉にする、詰り師匠と弟子との顏合せは、火の出るやうな熱烈さであるから、隨つて名人も生れ出たのである。言はゞ今日のやうに生溫るい師弟の間柄ではない、其れ丈け藝道に伸び行くに連れては實の親子に比しい情味に富んで居た、こゝに到ると墮落と云はうか何んと云はうか今日の師弟關係は殆んど成つて居ない。

支那の孔明ではないが、攝津大掾は泣いて馬稷を斬つたのである。

其の藝道に於いて天稟の才を認め居たけれど、他の弟子どもへの戒めに斷然と思ひ切つた。

此のイキサツに顯はれたのが關西實業界の巨頭で、當時大阪商業會議所會頭の土居通夫クンである。

大掾が越路時代からの大の最負であり、素人淨瑠璃の天狗連として床に唸る、其れまでの指導を受けて居た旦那藝、夫人美名子も越路最負たることは勿論で、土居クン夫婦は越路が可愛いだけ其れ丈け佐の太夫も可愛いかつた。

『ま、ま俺にまかせて置け！』

と、途方に暮れ居た佐の太夫を邸宅に連れ歸つて玄關番にした、それは當分懲らしめの爲めであつて、夫人美名子が監視となつた。

太夫の『佐の』は倒づられて本名貴田常次郎で朝夕に迎へる玄關づとめ、折角に拾はれた土居旦那の情けに常次郎の佐の太夫は勤勉怠りなかつた。

が、其れは束の間。

船場の土居邸に女關番に小いさくなつて居た彼れは性來の放蕩心がどうしても納まらなかつた、いつしか秋が訪づれて表庭の樹々にサラ〳〵と淋しい秋風が吹きつけるたびに、文樂の華かな舞臺が思ひ出される、そして芝居がハネると。

『さアちやん行かう、夜が明けるまで飲まう』

と、待つて居て呉れた若い藝者たちの顏が眼先きにチラづいて仕方がなかつた。

『あ、遊びたい……嚴しい旦那のお屋敷だけど、夜ふけて知らぬ間に抜けて……ほして夜が明けぬうちに密つと戻ると好い』

と、彼れは深夜ひそかに抜け出て、馴染の新町に浮かれた。

こんなことには巧みな彼れの行動は、幸ひ誰れにも氣づかれずに居た。

所が或夜のことだつた土居翁が便所に行くべく佐の太夫の部屋を通りかゝつた。

『あゝ可愛い奴だ……辛棒しろ今に俺がうまく仲裁して床に上らして遣るから……』

と、心のうちで密つと部屋を覗いて見ると、寢て居る筈の佐の太夫の姿が見へはいから、

『ほ、ほ大方あいつも小用に立つたのであらう』

と、別に氣にもかけずに居た。

これが幾夜もつゞいた。逢ふほどに契るほどに、拍子よく屋敷が拔け出られるほど、彼れはもう大膽になつて居た、押へて居た遊蕩心が煽りだした。

深夜小用に立つ土居翁も同時間に佐の太夫も行くものゝは信じられなくなつて、彼れの行動を疑ひそめるとゝもに、召使を起して邸內を隈なく探らしめた。

佐の太夫は藻拔けの殼。彼れの正體は土居邸に顯はれなかつた。

『うむ！不届きな奴だツ、深夜に屋敷を拔け出で、俺の眼を昏ますとは怪しからぬ奴！』

と、流石に温厚な土居翁も一時は怒つた、けれどこれを爆發させては監視に當つて居る美名子が責任を感じて……と、こゝは何事もなくに穩やかに暇を出すが好からうと、翌朝何喰はぬ顏で歸つて來た佐の太夫を己が居間に呼び寄せて、其譯を語らずに放逐した。

どうにかして藝人にしたいと骨を折つて見たけれど、蝕ばつた佐の太夫の遊蕩に匙を投げたのである。

土居旦那に愛想をつかされて、ぽんと放逐された佐の太夫の貴田常次郎はこゝに始めて享樂の夢が覺めた。

放蕩のぎん詰りが胴身に泌みた。師匠の摺津大掾にも、情けある土佐の旦那にも申譯のために、日頃自分が信仰し居る高津の高倉稲荷に參詣して。師にも恩人にも容れられない自分の過失を懺悔して、こゝに深く決する處があつた。

彼れは參詣に來る人目を避けて、稲荷の祠堂の裏手に出た。そして暫らく默禱をして懷ろから小刀をとり出して、左手の紅指を切つた。なまくらであつたと見へて、スパリと行かなかつた。其れをもぎかしがつて彼れは鮮血したゝる指をカブリと嚙み切つた。

ムヅ〳〵と痛みが持ち上がるを堪へて、其の紅指を服紗に包んだ。

『この一本が詫の印！』

彼れは急ぎ足に其のまゝ土居邸の門を潜つたのである。

土居翁の前に『お詫の指一本』生々しい其れを差し出して、屹度心を入れ替へて眞人間になることを誓つた。

もゝ〳〵自分には眼をかけて呉れて居る土居の旦那であるから、これでお詫が叶うであらうと豫期し居たが。

『お前こりや何んと云ふ、たわけを仕出かしたのぢや』

と、案に相違の土居翁は。

『身體髮膚之れを父母に承く、敢て毀傷せざるを孝の始め也』

と、論語の講義で彼れの無智を戒めて容易に其の憤りは解けなかつた。

『俺は知らぬ、勝手にせよ』

と、彼れの謝罪を斷乎と退けて仕舞つた。

『あゝ仕舞た、罪の上に罪を重ねたのか……』

と、佐の太夫は後から逐はれるやうにスゴ、スゴと土居邸を出た。服紗に包んだ詑の指一本を懷ろに男泣きに泣いた。

『自分はどうしても土居旦那の許しを得なければ、お師匠に對しても申譯がない』

と、其の足でフラ／＼と南地宗右衛門町に辿つて居た。

それは土居旦那の許しを得るには最贔筋の大和屋の女將に賴むより他に手段はないと思つた。女將はお千代と云つて始終に土居邸に出入りして居る、土居翁の愛妾で美名子夫人の諒解をも得て居る此の宗右衛門町では女將としてナンバーワンであつた。

未だ宵ではあるが、色町としては阪地の粹であるで、四邊りの空氣は媚めかしく、廓情緒は十分に漂つて居る。

ある決心のもとに此の廓にふら／＼出て來た佐の太夫は、ふと蝕ばり付いて居た遊蕩心がまたチカ、チカと芽生へた、けれど今は三界に家なき自分の痛ましい境遇を思ふと、何かしら恐怖を感じて、これではならぬと犇と反抗した。そして馴染ふかい大和屋の簀戸を力なく潛つた。

そして心から泣いて土居旦那への詫を切に依頼した。もと〳〵最負の佐の太夫だからお千代は其れをよく引き受けて熱心にとり持ちた、お千代を介しての佐の太夫の詫を無下に退けるほど頑迷でない土居翁は、指まで切つた改悛の情に一時は其の輕舉に却つて反感をしたけれど、もと〳〵歸參が叶へたさからのことであるから、こゝに總てを白紙にして歸參を許すとゝもに、もとの玄關番に直してこれで愈々人間が生れ變らば、師匠の大掾に仲裁し遣ることに極めた。

こゝに宙宇に迷つて居た血染めの指は小さな箱に納めて、彼れ佐の太夫は其れを玄關の天井の一隅に吊した。

そして其の箱を始終に眺めて已が慾情を抑へて、謹慎に謹慎を重ねた。

彼れが故人になるまで兎角に女性の噂があつたが、何しろ近世の名人！越路を作り上げたは其の血染めの指であつた。

本誌配本集金に關する一切は
德島市西大工町
阿波鄉土史研究會出版部

原稿、質問に關する一切は
名西郡入田、矢野杉尾山麓
阿波鄉土史研究會編輯部

操座の陰語と人形頭の説明

舟葉　米久

太夫や、人形遣ひが今尚ほ、蔭語を使つてゐると云ふ事を聞いて目下某座に於いて開演中の人形座に就いて調べて見た、處が今日では『下品な言葉』と云つて座元から使用を堅く禁ぜられてゐると云ふ事だ、そこで調査には甚だ困難を來したが幸ひにして太夫に知人があつて、殊に其の太夫は二十幾年間人形座に加入してゐる關係上特に好意を寄せられほつ〳〵語つて呉れた、自分はそれを筆記した、此の筆記は即ち言はれるがまゝの筆記で、筋もなければ、順序もない、依つて中には隨分下品な言葉もあつたがこれも研究上必要と思つたのでそのまゝ筆記して置いた、只此の語は阿波と淡路とは幾分違つてゐるが、自分の筆記したのは即ち阿波の蔭語である、いづれ機會を得て淡路の蔭語も紹介したいと思つてゐる。

しのきじんきう（源之丞）
じんきう（操　座）
けにつかひ（人形遣ひ）
やいとじんきう（久太夫）
でんばり（幕）
じんくちでんばり（黑　幕）
きたのこ（合圖のヒョウシ木）
えんこはたけ（太　夫）
やいた（劇　場）
ずるこ（太　鼓）
ずるてん（三味線）
板左衛門（太　夫）
おいた（本太夫）
ごりこ（頭　取）
いたもと（座　元）
はたきわけ（打ち分け）

人形頭の説明

團　七＝夏祭の團七の頭で中々用途が多い、最初は和唐内に打つたのが團七に遣つて以來それが通名になつてゐる、大團七、小團七と二通りある。和田兵衛鰺七などはこの頭である。

おかだい（合圖の鐘）
ぜけん（人のたらない事）
せける（人の充分ある意）
じんしう（能　人）
ば　し（芝　居）
かんご（刀）
え　に（荷　物）
せ　に（船）
えんこ（手）
そ　く（足）
お　か（顏）
こつぱり（目）
そりこんだ（這入つた）
たけでる（出した）
まつし（あの人）
まかり（貸　る）

五所柿＝恰好が似てゐるので名づけられたもので輕い敵役に遣はれる、人形遣ひの好み好みで特に定まつたものもないが、大阪の文樂では岩代の頭に用ひ、現に鞠川玄蕃に使つてゐる。

景清がしら＝は縮緬張りでその役丈にしか用ひられない。

けげた（盗つた）
きんとはたく（賭　博）
はんこほ（巡　査）
はんこい（恐ろしい）
ち　ま（町）
た　げ（下　駄）
たらく（水又は湯）
ぐなつた（たぶらかした）
ほなん（何　程）
ごろさ（しらみ）
じこ兵（偏　路）
じはきよくつた（恥をかつた）
もうし（親）
ててもうし（父）
母もうし（母）
だいきよ（兄　弟）

鬼　若＝最初鬼若丸の人形を模したのでから呼ばれてゐる、雙蝶々の長吉の頭はこれである。

ちやりがしら＝これにもお福、親玉、小助、彦六などいろ〳〵の名がついてゐて、中々能いほりのものがある又平や與次郎などにつかふものも、ちやりがしらの部に屬する、特殊なものとして彦山の斧右衛門の頭がある。

ねきや（姉）
よりさらさんば（婆）
しんでんよりと（爺）
かあもん（若男）
が　り（娘）
ちようけい（夜家）
まるかせ（女の乳房）
そつかけ（妾（メカケ））
ら　は（腹）
四郎左衛門（鼻）
しむけん（頭）
とんび（髪）
ぐ　る（帶）
む　き（着物）
れいきな（美しい）
しろもい（面白い）

孫市、梅王、銀平、實盛、佐々木等この眠り眼は切腹場の判官、盲目兵助などに使ふ。

けんびいしがしらの内部

けんびいし＝用明天皇職人鑑の檢非違使勝船に用ひたのでそのまゝ通稱になつてゐる、世話と時代にかけて最も融通のきく頭で八郎兵衛、三左衛門、源藏、芝六

しやかたい（有難い）
しだかせ（呉れ）
かこひ（儲けた）
かこへぬ（儲けられぬ）
かにこく（尤も）
しやた（明日）
のうき（昨日）
せうざ（酒）
ちうしよう（醤油）
みようにち（酢）
三年（味曾）
しやくねんぼ（ねぎ）
ざね（米）
こくれ（麥）
ならめ（甘い）
かたこぼ（ごぼう）

平作＝沼津の平作から出た名で、古くは親爺がしらと呼んでゐた。白太夫、三ぶ、久作、德太夫權四郎等に用ひられ白く塗つて布袋の市右衛門、坊主頭にして、宗岸にもこれを用ひる、同じく敵役の親爺頭で『しうと』といふのは時政、五左衛門、義平治、瀬尾、新洞左衛門なぞに使はれる。

× ×

ふけおやま＝おさん、戸無瀬、お妻、玉手御前、政岡なぞ板額はこれの大形のを用ひる。

たつぼ（魚）
ちうけい（茶腕）
こだ（積物）
ごくじ（そうめん）
のせよ（食ふ）
ならび（さい）
さいこほ（めし）
ごんうん（うどん）
じやり（肉）
えんじき（膳）
ちんめ（百姓）
しくわ（菓子）
えんな（無し）
たいくしな（氣の毒）
みやしな（病人）
ばれた（死んだ）

手＝たこづかみは陣屋の熊谷などに使はれ、かせ手は多く美男ものを用ひられる忠兵衛、治兵衛、判官などはそれでかきつばたは多く奴役の手に用ひられる、この外につかみ手（組打の熊谷）さぶた（百太夫）皷手琴手、屏風手、三味線手などいろ〳〵ある。又チャリ手としては數の子手などいふものがある。この手も文七、園七の頭には大を用ひ檢非違使頭には中、若男、老役には小を用ひるがしきたりとなつてゐる。

殘暑御見舞

忌部神社彌宜
石原誠彌

りようてん（醫　者）
つなける（見　る）
つなげぬ（見えぬ）
じろく（本又は文字）
ぜ　め（自　分）
ごしく（貴　殿）
げたごらせ（人形を遣へと言ひ付ける）
ろ　は（馬）
けつぺ（犬）
ぎうしんぼう（大きい）
てこひ（小さい）
せくち（ままつた）
へ　ぐ（賣　る）
ま　う（買　物）
かきれ（來　い）

はかおやま（お娘）＝初菊、時姫、八重垣姫、雛衣、お染、お三輪、おさと雛鳥等此頭の出ない芝居は殆んど無いといつてもいゝ。

婆＝長吉の母、勘平の母酒屋の母、覺壽等に用ひられる老女もので此外に美耶といふのがある、荒妙、鳴海なごの頭、又八汐といふのは八汐、岩根御前、岩藤等に遣はれる安手なるものには帶屋の婆、花菱屋の婆、八百屋の婆等。

じやきまたがる（汽車に乘つた）
じようかく（疊）
あ　ざ（名）
さづく（御馳走になつた）
かくむき（ふとん）
に　ち（明り）
にちばらした（明りを消した）
ぜんごろう（休んだ）
ふけつた（歸つた）
た　こ（家）
なたにかまる（夜ばい）
かゝさん（情交出來なかつた）
た　れ（女の陰部）
どんせん（男根）
かゝす（情交）
た　ろ（金）

文七＝檢非違使と餘り變つた所がないが、稍大きく出來てゐる。最初雁金文七に打つたものらしい。熊谷、正清、長五郎などの役につかはれる。

わかをとこ＝源太ともいはれてゐる駒澤、三浦之介、十次郎なぞ、これに今少し眼の張りをもたせ眉引きの具合を詰めると重忠や、主計介などにもなる、呉服屋重兵衛に使つた事もある。

おげん（圓）
おげんへい（一　圓）
けいとく（一圓五十錢）
てん両（百　両）
へろぜろ（一　度）
まへびき（二）
おやまこ（三）
四つこぼし（四）
かたこぼし（五）
むつこぼし（六）
七つぼし（七）
とくまん（五十）
つ　　や（三枚目語るもの）
す　　け（三段目）
つけもん（中狂言）
だきおい（中狂言語り）

與勘平＝蘆屋道滿大內鑑の與勘平の頭で、岩永にも用ひることがある。

次輯よりよろづ紹介欄設置

◇本欄は一般讀者諸氏の通信機關として設置する
◇一行十五字詰、五行以內
◇凡そ種目は質問、個人通信、讓り受け度き物品、讓り度き物品等讀者の自由です
◇用紙ははがき
◇宛名は必らず阿波鄉土史研究會編輯部宛

ごんだろはん（三番叟）　　かは（朝顔日記）
たま（玉藻前）　　かや（大江山）
たに（一之谷）　　ごごし（妹背山）
するこ（太閤記）　　ぐら（忠臣藏）

阿波に於ける三味線義太夫墓所記

故（松浦德二郎調査）

（アイウエオ順）

◆藍玉組太夫（義太夫）

三好郡池田に生れ、阿波屋太兵衛と稱す、大阪に出て北堀江吉野屋橋南詰に居住し、藝名嘖々、一時絶

倫と稱せられたり、嘗て『於染久松質屋の段』を演じ、御文章を朗誦する處に至れば、聽衆感に入りて賽錢に財布を投げたるものありといふ。寛政五年七月十日歿す、年六十一、墓石は大阪市高津表門社西側自性院にあり。

◆小川土可通〔義太夫〕

阿波郡土成村の人、通稱は勝三郎、素染太夫とも稱し、又素染齋と號す、當時小梶太夫德島に在りて、藝名殊に高し、土可通之と相對して、一時に併稱せられたり、『日向島』『吃又兵衛』等、尤も入神の技となす。明治三十年舊三月二十二日歿す、年八十二阿波郡土成村元屋敷地に墓あり。

◆蔭山雲園〔義太夫、三味線〕

美馬郡郡里の人、中年にして三好山城谷村に移住せり、名は孝總、條之祐と稱し、別に耕之號す、又俳人を以て知られ、書畫を能くし、餘事義太夫、三味線に秀づ、明治三年十月二十九日歿す、年五十四、三好郡山城谷村引地に墓がある。

◆金枠〔義太夫〕

阿波郡伊澤村の人、古林孝九郎と稱す家世々味噌醤油製造業たり、競馬を好み、其の馬印を藝名に用ふ

餘技義太夫に秀で、『金比羅御利證』『太閤記七段目』の『二代鏡秋津島』を得意とせり、明治九年八月六日歿す、年五十五、阿波郡伊澤村字綱懸二百十番に墓がある。

◆柏尾柏葉〔義太夫〕

美馬郡貞光の人、元作と稱す、江戸流義太夫に長じ諸國に出演せり、明治十五年十月二十七日歿す、年四十五、美馬郡貞光町字丸山に墓がある。

◆紀伊國屋九平〔義太夫、三味線〕

德島中通町の人、紀伊國屋九平と稱す、故に紀の九といふ、妙技を以て其の名時に著る、明治三十一年一月二十日歿す年八十一、德島市寺町般若院に墓がある。

◆楠本山峰〔義太夫〕

名東郡國府町中の人、名は長平、老いて一と號す、染太夫、及越前大椽に就いて學び、『鏡山長局』『楠三段目』『八陣守護の本城八段目』等を得意とす、明治二十六年四月八日歿す、年六十六、名東郡國府町中千僧庵に墓がある。

◈山鳥太夫〔義太夫〕

水田福太郎と稱す、初め德島市八百屋町に住し、後、秋田町に轉ず、嘗て東京に出でしが、舊藩主其の技を演せしめ、大に歡賞せられ、名貴紳間に知らる、小松宮、伏見宮、華頂宮各殿下の台命を奉し、其の技を演したることあり、明治三十八年八月二十九日歿す、年六十一、名東郡八万村無緣寺に墓がある

◈竹木關太夫〔義太夫〕

阿波郡土成村田中の人、通稱は伊藤彥助、妙技を以て其の名高し、天保二年七月十七日歿す、年八十七阿波郡土成村田中同家庭内に墓あり。

◈竹本小梶太夫〔義太夫〕

德島市助任町の人、通稱小梶嘉久郎、義太夫に秀で人品態度の悠揚高雅なる、音節の巧妙と相須ち藝名嘖々として肩を比ぶ者なく、當時阿波第一の稱あり、殊に『忠臣藏九段目』を得意とせり、明治十三年八月七日歿す、年四十五、德島市住吉島蓮華寺に墓がある。

◈竹本長門太夫〔義太夫〕

板野郡鳴門村高島の人、通稱は沖虎吉、又水門太夫と號す、其名一鄕に高く、門人頗る多し、明治三十八年舊二月十九日歿す、年七十八、板野郡撫養町齋田共同墓地に墓がある。

◈竹本浪太夫〔義太夫〕

的場甚七と稱す、名東郡齋津村津田の人、德島市に住す、藝名傳へて今に至る、明治四十年十月二十三日歿す、年七十一、德島市西富田光仙寺に墓がある。

◈竹本勢見太夫〔義太夫〕

通稱は久米川勝次郎、德島市西横町の人、藝名蛇の目と稱す、神戸市に出て、勢見太夫と改め、其の名世に知らる、大正三年十一月二日歿す、年九十六、神戸市城ヶ口に墓がある。

◈竹本染太夫〔義太夫〕

名東郡津田浦村の人、東京に住し、義太夫を以て世に知られたり、初、染太夫と稱し後筆太夫と改め、和歌山を經て大阪に出て、其の名愈々高く、遂に越前大椽の名を許されたり、人稱して入神の妙技となす、東に移りて、又駒太夫と改む、大正四年二月二十日歿す、年七十九、新潟市西堀通七番町長善寺に墓あり。

◆竹本千歳太夫　〔義太夫〕

通稱は若木チカ、東京に住して、藝名大に著れ、阿波女義太夫の長と稱せられたり、大正五年四月二十日歿す、年七十八、德島市佐古三谷常嚴寺に墓がある。

◆津田桃子　〔義太夫〕

德島市助任西町の人、清次郎と稱す、「八百屋お七」を得意とせり、明治四年四月十三日歿す、年六十、德島市助任西町萬福寺に墓がある。

◆鶴澤傳八　〔義太夫〕

德島市古物町の人、通稱は小川德太郎、藝名遠近に高い、明治六年三月三十日歿す、德島市寺町長善寺に墓がある。

◆鶴澤友五郎　〔義太夫、三味線〕

麻植郡川田村の人、通稱は川村友五郎、當時阿波郡土成村小川土可道の義太夫、其の名尤高く、腹藝と稱して、其の三味線を勤むるもの、皆難事とせしに唯此の人能く土可道の妙技に副ひたりと、明治四十

一年舊二月十五日歿す年八十二、麻植郡川田村字山の神新墓地に墓がある。

◆鶴澤小米〔義太夫〕

通稱は濱ロヨネ、德島富田の人、幼より三絃を習ひ長じて女義太夫となり、各地に遊演して、足迹殆ど全國に遍く、斯界の絕倫と稱せられたり、年四十一にして業を廢し、宿屋業を富田中之丁に營みて老を養ひ、大正七年七月二十三日歿す年七十七、德島市富田瑞巖寺に墓あり。

◆手塚東朝〔義太夫〕

名東郡國府町中の人、名は博雅、覺右衛門と稱す染太夫に就き、「秋津島」「日向島」等を長技とす、又池の坊生花を京都に學び、橘の紫幕を授與せられたり、安政七年七月二十三日歿す、年五十五、名東郡國府町中私有墓地に墓がある。

◆豐竹卷太夫〔義太夫〕

通稱は鈴木仁右衛門、名は朝親、那賀郡長生村の人幼きより義太夫を好みて、天稟の奇才あり、夙に大阪に出て、文樂座に入り、美聲音曲の妙を以て世に稱せられ「阿波鳴門」を得意とせり、慶應元年四月二十八日歿す、年七十、那賀郡長生村字明谷字北浦九十一番弛に墓がある。

◆豐竹小靱太夫〔義太夫〕

麻植郡川田村の人、大阪に出て靱太夫の門に入りて、義太夫を學ぴ、小靱の名を授けらる、二軒屋町免許地に於て芝居興行あり時、德島に歸り『三勝』を演じ、大入にて、十二日間之を續けたりといふ、阿波出身の義太夫にて、其の名の全國に知られたる者の一人なり、明治十一年一月二十四日歿す、大阪市天王寺釣鐘堂墓地に墓がある。

◆豐澤仙之助〔義太夫、三味線〕

那賀郡赤石の人、德島に住し妙技の名、今に至りて傳稱せらる、明治十六年一月五日歿す、年六十四、德島市西富田本玄寺に墓がある。

◆豐澤藍紫〔義太夫〕

名東郡國府町の人、名西郡神領村に住し、通稱を佐々木儀一といひ、家世々組頭庄屋たり、餘事義太夫を好み、鶴澤仙之助、同咲藏に學び、天賦の音聲と共に藝名世に著はれ『新版歌祭野崎村の段』『一谷熊谷陣屋の段』『忠臣藏本藏下屋敷の段』等を得意とする、上角(うえつの)の稱、遠近に傳播せり、明治十七年五月二十八日歿す、年五十七、名西郡神領村字本上角に墓所がある。

◈豐竹八重太夫〔義太夫〕

板野郡板西町の人、通稱は奥谷常藏、義太夫の妙技今尚其の名を世に傳ふ、明治二十一年一月三十一日歿す、年七十八、墓所は板野郡板西町川端字中谷にある。

◈豐竹綠太夫〔義太夫〕

板野郡松茂村笹木野の人、後藤只藏と稱す、德島花澤咲藏に學びて、名聲大に著れ、『お染久松』を得意とせり、明治二十三年七月二十四日歿す、年六十一、墓所は板野郡笹木野字北上共同墓地にある。

◈豐澤鶴翁〔義太夫、三味線〕

德島市古物町の人、通稱は小川政太郎、妙技の名遠近に遍し、明治二十八年九月一日歿す、年五十七、墓所は德島市二軒屋町紫庵である。

◈豐竹國太夫〔義太夫〕

德島出來島町の人、通稱は河野久兵衛、妙技今に至りて稱せらる、明治二十八年舊十一月二十六日歿す年七十二、墓所は德島市寺町般若院にあり。

◆豐竹上總太夫〔義太夫〕

佐々木勝藏と稱す、父を金吾といひ、那賀郡赤池の人、幼時父を失ひ、母と共に名東郡庄村に移住せり那賀郡赤谷豐竹卷太夫に學びて、遂に蘊奥を極め、『鏡山七段目』殊に人に稱せらる、明治二十九年二月三日歿す、六十七、墓所は名東郡加茂名町庄法谷寺畔にあり。

◆豐竹梶太夫〔義太夫〕

德島市西新町の人、後勝浦郡小松島町に移れり、通稱は吉野善平、妙技の名、今尙人に稱せらる、明治三十二年舊七月二十七日歿す年八十二墓所は勝浦郡小松島町共同新墓地にあり。

◆豐竹錦太夫〔義太夫〕

德島市富田町の人、通稱を上田ヒサヒこいふ、聲調音節俱に妙境に入り、當時女義太夫の最と稱せられたり大正八年一月十八日歿す、年六十三、墓所は德島市寺町潮音寺にあり。

◆中村響太夫

三好郡山城谷村引地の人、虎之進と稱す、『伊賀越沼津の段』を得意とする、山間避地の出にして、藝名

時に高し、練磨の勤苦想ふべし、大正元年三月十五日歿す、年七十四、墓所は三好郡山城谷村引地字藏屋敷にあり。

◆中川彌長軒〔義太夫〕

板板野郡一條村の人、喜三郎といひ、初、夏月と稱せり藍砂糖商を營み、餘技義太夫に長じ『伊賀越沼津の里』を得意とせりといふ、大正四年二月二十五日歿す、年六十五、墓所は板野郡一條村共同墓地にあり。

◆坂東猛虎齋〔義太夫〕

名西郡高川原村南島の人、佐一郎と稱す、家世々農を業とせり、『お夏清十郎』『薄雪三段目』等を得意とす、明治三十二年九月二十七日歿す、年七十、墓所は名西郡高川原南島村墓地にあり。

◈花澤市左衛門〔義太夫、三味線〕

土居知藏と稱し、德島市中通町一丁目に住せり、藝名時に著れ、遠近皆其妙技を稱せり、明治三十三年十一月一日歿す、年八十、墓所は德島市寺町還國寺にあり。

◆正木顧春〔義太夫〕

名東郡北井上村佐野塚の人、大助と稱す、藍商を營み家世々庄屋たり、餘技義太夫に長じ、音聲雄大にして妙境に入り、佐野塚の政所（まんどころ）といへば、直ちに義太夫を連想せしむるに至れり、明治十二年四月十四日歿す、年五十三、墓所は名東郡北井上村佐野塚二十八番墓地にあり。

◆三寄玉祺〔義太夫〕

三好郡山城谷村川口の人、通稱は祺八郎、其の音曲優雅にして、都人も及ばず、山間の出にして妙技堂に入る平素の練磨想ふべし、殊に『三十三間堂棟本の由來』を得意とす、明治三十一年七月十三日歿す年八十四、墓所は三好郡末貞名字上川口にあり。

本誌の毎月發行

多數の會員諸氏よりの御希望に依り愈々五輯より毎月一日發行と致しました。

普通號　毎月一日發行
特輯號　年二回一月、七月

□原稿募集

一、一般讀者諸氏よりの原稿を募集す
一、短長は隨意なるも用紙は原稿用紙の事
一、右原稿内に挿入の寫眞、文獻等は書留郵便を使用する事
一、製版復寫使用後は責任を以つて返戻す
一、宛名は必らず本會編輯部宛

戲曲

人形座

作　林　皷浪

□山に圍まれた村の飲食屋と宿とを兼ねた二階の八疊一間。隣室は三疊程の客間で汚穢ない襖を閉めきつてある。廣間から隣室への通路は狹まい板敷で其處には下へ降りる段梯子が架つて手摺が設けてある、登場者は何れも此村で興行してゐた人形座の重なる座員の一部が泊つてゐる

登場人物

遣ひ役の者	村上定丸
形人過ぎた十六年輩	村上千五郎
同過ぎて十五ゆ見	村上作三
同	村上勘之助
同	村上源次
同	お增
酌婦	竹豊三玉
宿屋の座形人	田花佐市
女太夫	
十三才	
二十三本々座形人（登場せず）	

ので部屋の片隅には皆が寢る蒲團を高く積みあげ手荷物のバスケットや柳行李が亂雜に散らばつてゐる。粗末な瀨戸物火鉢が一室に二つだけ。天井から薄暗い電燈の光が千五郎、作三、勘之助源次の寒さうな顏をてらしてゐる。一座の年頭である立役の定丸だけは煎餅蒲團を被つて獨り隅の方で寢てゐる。

十二月に近い頃の晩八時、外は雪が降つてゐる、

作　三「一躰座本はなん仕てるのや、サツサと戻らんかいな

勘之助「サア、ごう話が決まるかゞ問題やぜ、戻つてみな安心は出來へんがな

作　三「なんと、倚賴りないなア

勘之助「けど遲ふても今夜は　どうしても戻つて貰はんと困るがなア

作　三「まあ〳〵待つてるより外に仕樣があらへんでエ

勘之助「今年の樣に、何處も彼處もヘマ斗り踏むと、どうも成らへん。なア作やん、座本が戻つたら皆が何んとか言はうやないか

作　三「そや〳〵斯んなに歩を喰はされては家へ送るごころか賃買ふ金もあらへんか、〇ナア千五郎はんト最前から腕を組んで凝乎聽いてゐる千五郎に詞をむける。

千五郎「成程皆がぼやくのも無理はあらへん。俺かて其通りや。けどな、座本の身にも成つて考へてやり

いな。お互に給金々々と言ふて責めたかて、斯う不景氣に成つて何處でも打日が殘るやうでは結局はお互に損を被らな仕樣がない。淡路へ歸つたかて其通りや。興行斗りやあらへん。何んしたかて皆が困りぬいてる時節やがな。まあ座本が引受てるよつてお互は喰ふだけの腮が付てるのやから辛抱しいな。

作　三「けど次ぎ場所は決まらへんし。まだ明日も明後日も雪に降り込められるし。わてェ等は何時迄もこやするのは樂でえゝけど座本が氣の毒なさかひ

千五郎「其處が座本といふ責任で愁い所や。そや依つてに、あまり座本を責めなこと言ふことや

勘之助作三默つてしまふ千五郎氣が付た樣に脊ろを振りむいて

千五郎「アゝ定やん。どうや、懷爐の灰はまだ消えてえへんか

定丸千五郎に聲かけられて蒲團から首を擡げて皆の方へ向きなほる

定　丸「アゝ有難う。まア熱があらへんよつて樂なんや

千五郎「そや〳〵。まア眠と寢てなはれ。それア私かて冷へるのやぜ

定　丸「旅へ出るとどうしても身體を無理するわいな。斯んな商賣はでけへんと思ふてもな……

千五郎「それア私かてさうやで。倅奴が早う廢業して呉れこ喧しう言ふのやけれど。やはり若い時から剝ぎつけた皮やがな

定　丸「昔こ違ふて今時の子供は學校で敎へられてるさかひ。親父が人形遣ひや言ふと。どうも卑下するらしい

千五郎「もうお互に年とつてるのやから。此商賣を仲に仕込む言ふたかて。でんで相手に成らへん。
些に居る源やんの樣に子飼から修業する人は今はたまからあらへんしな。ナア定丸さん。
人形座も先は心細いもんや
作　三「全く其通りや。座本が偉らゐだけであかへん。肝腎の人形役者がこれから先は次第と無い樣になるのや座を拵へたうても出來へんがな
千五郎「先の事どころが。今からでもわや罷めたいんや。前々は御難喰つた時はあつても又愉快に派積んだもんや。此頃のやうに何も彼も愁らい目に會はされると誰もが棒折るがな。
源　次「けどなア師匠。そう言ふたかて春に成つたら今の苦勞を忘れまつしやろ
勘之助「それア源やんなぞまた若いよつて樂しみな事が有るわいな。我々になると最うあかん。持てへんしなア
作　三「それはそうと此處の興行はほんまに失敗やつたなア。皆が最前から話してるけど。どうも私は是から先がたよりなつてどんならへん。實は淡路の方へ手紙出しといたんや。都合で此處から暇もらはうかと思つてるのや
千五郎「そんな無茶言ふたらどむならんがなア。たゞさへ手薄で旅をしてるのやから。おまはんの都合はそれで良いかしらんけど。なア作やん。苦勞はお互ひや。折角斯うして一座を續けて來た事やし。一緒に國を出た仲やないか。お前が先だつてそんな事言ふたら誰れも辛抱する者あらへんが

作　三「イヤ私はな。座本に斯んな事言ふとゑらゐ惡るけど。ごうも近頃は座本の興行方針が成つたないなア。第一此所で塒するのも私やちやんと前に乘込む先に注意してあるのや。サ。果して其通りに成つたがな。こんな山中で汽車場いふたかて五里もあるやないか。此處で駄目やつたら次ぎから次ぎと捌け場が有るやなし。ほんまにこんな場所へ來る依つてに、につちもさつちも動かれへんがなア。お互に小遣ひはあらへんし。ごない思ふてるのや一躰座本は

勘之助「そして今掛けに行つてる所はとても前金を出す歩方やあらへんぜェ

作　三「サア、そやよつてに此處の宿かて手雜用やし。ごうして次場所へ立つ心算やろか。私はそれを心配して言ふのや

勘之助「なんぼ言ふたかて仕樣があらへん

千五郎「まア、ごうなこ成るやろ

下の座敷へお客が來たとみえて急に賑やかな聲がする。段梯子を昇つてくる音酌婦お增登場

お　增「モシ、お師匠はん、御免やすや

こ聲をかけて隣の間の襖をあけて這入るすぐ出て來て襖をしめる

お　增「早う賴んまつせェ

三　玉「おほきに（襖の中で聲がする）

お增皆に振り向いて鳥渡會釋して行きかける源次立ちあがつてお增を呼び止める。

源　次「ア、お増さん〳〵アノまだ雪降つてまつか

お　増（立とまつて）なか〳〵歇ましまへんが。二三日も降りますやろ

源　次「時に三玉さん。何んだんね

お　増「……

源　次「お座敷だつか

お　増「ハァ、御ヒイキの方だつしやろ

下から女將の聲らしく

お増さアーんと手をならして呼ぶ

お　増「ハアーイー

とお増はわざと大きく聞こえる樣に答へる

お　増「また後ちに來まつさ、鳥渡お客やつたらこんなんやさかひ

ト言ひ捨て、遁れるやうに段梯子を駈け下りる

源　次「ア、お増さんちよつと。鳥渡待ちいな——

トお増のあとを追ふやうに源次もついて段梯子を下りる

作　三「ハヽヽ、彼奴が物になるかいな

勘之助「けぢ源は、尼が崎に彼の子が居た時からの馴染やぜ

作　三「エ、あの子、尼が崎……

勘之助「お前知らんのかいな。ほら櫻井座の隣で車曳いてた桑あんの娘やがな

作　三「ア、それでや何んやしらん此所へ來た時から見覺えがあると思つてたんや。なんで斯んな所へ來てるんやろ

勘之助「そんな事ア知らんがな。いづれあの娘も苦勞して來てるのやろ

源次段梯子を荒々しく駈けあがつて來て皆の前へ立つたまゝで

源　次「あけへんぜ、ノ〳〵

作　三「なんやな、源次

源　次「今な、□町から下へ着いた客に聞くと、□町座は萬歲がかゝるのでちやんと辻びらが出たさうやぜ、

勘之助「おほ方千鳥會やろ、ナア請元かてもう此頃は客本位やぜ。受けるものに飛びつくのはあたり前や

作　三「座本が手ぬるいよつていつもごぢを踏むのや

勘之助「たよりが無い筈や、○市へ廻つてるのや。其内何んとか座本が仕てくるやろ

作　三「○市やつたら、屹度手打に決まつてるがな。もう私は厭になつてきた

皆々暗然として萎れた樣になる

隣の襖がサツと開く

豐竹三玉立縞に黑御召の紋付羽織濃化粧。歳のわりに派手な扮裝にて出る。

作　三「ア、追抱さん、頼んまつせ

こわざとらしい聲をかける

三　玉「驕りまつせェ、待つとんなはれや

三玉莞爾と皆に愛想して段梯子を下りて行く

作　三「やつぱり女の太夫だけに得なもんや。あゝやつてお座敷が掛るがな

勘之助「わひかて往くぜ。三番叟でも持たして見いな

作　三「お前お正月迄此處でとやしたらえゝのや

勘之助
源次「ハ、、、

此時お増平鉢に壽司を山盛にしたのを脇とり盆に乘て運んでくる

お　増「お師匠さんからだつせェ

源　次「エおほきに、濟みまへんなァ

こお増が重たさうにしてゐるのを、源次が受とつて皆の前へ置く、お増は會釋して段梯子を下りて行く

作　三「サァ皆やりんか。何も遠慮いらへん。前へ寄りいな

勘之助「さうか、皆よばれうやないか

皆にじりよつて壽司鉢を圍む

『……とをごをめゐ——ゐて。敵にさこられじこを——……』

三玉の彈語りが下の座敷から聞こえてくる

定丸最前から目をさまして居るらしく寢返りをしては蒲團を動かしてゐる。千五郎氣がついた樣に半紙をのべて平鉢から壽司を五つ程手掴みで盛つて

千五郎「定やん、定やん追抱からやぜ

ト定丸の寢てる枕許へ押しやる

定丸待ちかまえてゐたやうに

定　丸「さうか、えらひ御馳走派積むのやな

ト蒲團を蹴ねて起きなほり早速壽司を喰べる

千五郎「私や、先へ寢るよつて、皆ゆつくりやりなはれ

ミ言ひつゝ隅の蒲團をおろして千五郎は勝手に敷てゐる此間に源次下へ立つて行て土瓶に茶碗を盆に乘せて持てあがつて來て皆に茶を入れる

作　三「時に何時やな

勘之助「十一時頃と違ふか

作　三「起きてたかて仕樣があらへんな。サア、寢よやないか

ト作三立つて蒲團に手をかける。勘之助も立つてともに夜具を敷く二人は襦袢一枚になつて蒲團にもぐり込む

作　三「源やん（寢たまゝで聲かける）

えらふ下の座敷は靜かやないか

源　次「氣になりますやろ、追抱が

作　三「フン、しやうもない。源ちやんお前又ぼんやり、其處で何仕てんねェ。お增さんが氣になるのやろ

源　次「阿呆らしい。うだ〳〵言ひたはんな

柱にもたれてゐた源次は窓の方へのびあがるやうにして顏を背向ける。

いつか千五郎と定丸の寢息が洩れて聞こえる

今し十二時をうつ時計の音

雪はさかんに降つてゐる。

—幕—

新刊紹介

土佐史談（毎號）　土佐史談會

劍山、祖谷溪歩危の案内（小濱靜石著）同　氏

上　方（上方盆踊號）　後藤捷一氏

大阪史談會報（二卷四號）　後藤捷一氏

德島線名勝案内　大阪鐵道德島出張所

藝術殿三冊　國劇向上會

山田奈良案内　大阪鐵道局

大阪陣西軍將士墓寫眞　後藤捷一氏

只阿波に於ける淨瑠璃に關するものが少なかつた事を遺憾として居ります

△次輯より普通號として毎月發行する事に致しました

特輯號　年二回（一月、七月）

普通號　毎月一日

△前輯代金の未拂込の方がまだ小しある樣に出版部から報告がありましたが、當會は次輯を發行する迄に凡ての整理を終る事にして居りますので其點を御諒承あつて出版部（徳島市西大工町）へ至急御拂込の程を願ひます

△次輯からよろづ紹介欄を設置しました一般諸氏の御利用をおすゝめします

△終りに、本輯には横山春陽氏の傳說、笠井藍水氏の「鄉土地名の研究」福田芳明氏の「かくれたる鄉土資料の數々」前田正一氏の「鄉土祭神と地名の研究」が頁の都合上次輯に廻しました、執筆者及讀者諸氏にお斷り申上げて置きます

編輯餘錄

久米葉舟

讀書の秋が參りました、本誌ますます健在各方面の御同情によつて內容記事彌々豐裕になり、私の希望が實現されて行く事は何より欣快の至です計畫は頭に渦を卷いてゐますが、前途遼遠ですから一歩づゝ堅實に進んで行くつもりです、

△各方面より御注意を頂き感銘して居ります、不備な點も多々あらうと存じますが、私としては懸命の努力を拂つてゐますので此の上共の御鞭韃を願ひます

△前輯の阿波十郎兵衛特輯號は豫想以上の好成績で大變好評を博しました、本輯は前輯以上の努力を拂ひました結果新に喜田博士の御紹介で百太夫の祖である吉井太郎氏の長編を頂き、又斯界權威者石割松太郎氏及木谷逢吟氏京都女專の富倉二郎氏の玉稿を頂き、其他に於て權威ある諸先生の御研究の發表は讀者諸氏には大好評を博するものと豫想して居ります

阿波鄉土史研究會清規

○阿波鄉土史研究會は廣く各方面の學術的研究を網羅し從來の業蹟を集成し且研究參考の新資料を供し以つて阿波文化研究の綜合的成果を得且その普及にも寄與多からん事を期するを目的とす

○會の事務所を左記に置く

徳島縣名西郡入田村矢野杉尾山麓　阿波鄉土史研究會

○阿波鄉土史研究會は機關雜誌阿波鄉土誌を隔月發行し會員に實費にて頒つ

○雜誌の阿波鄉土誌は左の目的を達せんが爲に、たゞに古今文獻の調査のみならず周れく遺物、遺蹟、傳説、言語、信仰、その他人類學上、社會學上の諸研究並に資料を掲載す

○會員は何人を問はず入會する事を得

○雜誌「阿波鄉土誌」は廣く會員の諸氏より前記諸項に關する研究並に資料の提供を歡迎す又鄉土研究に就いて疑問の點は執筆後援家に質問することを得但し質問は當分一問以内とし必らず本會宛のこと　（絶對無料）

○會員は「阿波鄉土誌」發行都度實費を以つて購讀するものとす

○阿波鄉土誌の編輯原稿に關する一切は名西郡入田村矢野杉尾山麓阿波鄉土史研究會編輯部に於て行ふ

○阿波鄉土誌の配本及集金に關する一切を徳島市西大工町阿波鄉土史研究會出版部に於いて行ふ

出版部設置

○本會は鄉土歴史に關する書籍を出版し會員に限り實費を以て頒布す

○會員申込用紙は申込次第進呈す

昭和七年九月二十五日印刷
昭和十年九月三十日發行　【定價金壹圓】

編輯所　徳島縣名西郡入田村矢野　阿波鄉土史研究會

發行兼編輯人　徳島縣名西郡入田村矢野六〇九ノ一　久米惣七

印刷所　徳島市西大工町四二番地　ミヤコ印刷所

發賣所　阿波土鄉史研究會出版部

・御一代第一の御盛儀用

御婚禮御衣裳の御用命は

何卒一樂屋に御下命の程を願ひ上げます
優良高級品と時代大衆品とを豊富に準備致
して老練の販賣員を配し良品第一！親切本位
に御説明申し上げます。

・春、夏、秋、冬を通じての

特選吳服新柄發表

階上階下全店擧げて季節最新製品を陳列致
して御座ります……いつも皆様が申さ
れます御買物は一樂屋と

德島市西新町

一樂屋